
バラエティギフト

青葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バラエティギフト

【Nコード】

N3204V

【作者名】

青葉

【あらすじ】

名探偵コナン短編集です。思いつくままに気まぐれ更新します。CPはコ蘭、新蘭、高佐に…いろいろあると思います。恋愛以外も多いかと思います。

きみの笑顔がみたい（前書き）

短編集書いてみることにしました。

：「雨の午後は：」もいればよかったかも、とか思ってます。

第一段は蘭目線です！

では、お楽しみいただければ幸いです。

きみの笑顔がみたい

コナン君はいつもどこか無理しているみたいに見える。

買い物から帰ると、コナン君は居間の窓辺に座って外を眺めていた。ドアを開けて「ただいま」という間のほんの一瞬の間に見えたコナン君はどこか物憂げで、

何か考え込んでいるようだった。

あんな瞳をして、何を考えているのだろう…

何かツライことでもあったのだろうか…

なのに、

「あ、おかえり。蘭ねえちゃん」

コナン君は私をみるとニツコリと笑って言った。

まるで、無邪気な子供のよう。

ツライことなど、何もないかのよう。

いつだってそうだ。

彼は自分の弱みを私に、いや、他人に見せるようなことはしないで笑っている。

その笑顔の裏に本当の顔^{キモチ}を隠して…

ねえ、何がつらいの？

何を抱えているの？

どうしてそんな表情^{カオ}をしているの？

教えてよ、コナン君。

でも、そんな事をきいてもコナン君はまた

「なんでもないよ。蘭ねえちゃん。心配しないで?」

いつもの様に笑うのだろう。

いつもの笑顔をつくって…

きっとコナン君は理由を教えてくれるつもりはないんだろう

それならせめて、

この優しい子が作りものなんかじゃない自然な笑顔になるように頑張ってみよう。

「今日の晩ごはんはコナン君の大好きなハンバーグよ!」

「ホント? わーい! うれしいな」

出来ることはわずかしかなければ…

「ほら、コナン君の大好きな仮面ヤイバーチョコ、買ってきたからね!」

「あ。う、うん…ありがとう」

なんだか笑顔がひきつってるような気もするけど…

君の笑顔がみたいから…

私は出来るだけのことをしてみせる。

恋する人（前書き）

2 個目です。

今回は W I S H O 2 様からのリクエストで新×蘭で！
リクエスト、ありがとうございます！（＾Ｏ＾）/
ご期待にそえるかわかりませんが、どうぞ！

またもや蘭目線です。

組織壊滅後、二人はまだつきあっていない設定。

恋する人

はあっはあっ、

私は一人で夕暮れの道を走っていた。

しばらくすると息が切れてどこかの家の塀に手をつき、息を整える。

「ばっかみたい」

そのつぶやきがだれに対して向けられたものなのか、走り出す直前、あの言葉をいった彼に対してなのか、それとも勢いに任せて思ってもいないことを彼に言った自分自身なのか

「ばっかみたい、ばっかみたい！」

そう、それは今から少し前のこと、学校の教室での出来事だった。

部活を終えた蘭は急いで教室に向かった。
新一が待ってる

教室の前につき、ドアを開けようと手を伸ばしたとき声が聞こえてきた。

「おー工藤、こんな時間まで教室（じう）にいるってことは最愛の奥さんでもまってるのか？」

「工藤はホントに毛利のことア・イ・し・て・るもんか？」

中道君と会沢君の声だ…

って私のこと話してる！？

……新一はなんて答えるんだろう？

「バーロ、そんなじゃねーよ。」とか言つのかな？

でも、でも…

もしここで「ああ、そうだよ」だなん言われたら…私は

だけど、聞こえてきた新一の声はそのどちらでもなかった。

「バーロ、俺の蘭への気持ちは愛なんかじゃねーよ」

うそ、そんな…

新一は私のことが好きじゃなかったの！？

だからあの時ロンドンで告白してくれたんじゃないの！？

バンッ！

「ら、蘭！」

新一が驚いたようにこちらを見る。

「わ、私だって！私だって新一のことなんか別に好きでもなんでも

ないし！

わざわざ待つてくれなくなつて1人で帰れるわよ！！」

そつ言い捨てる 私は身を翻し、その場からかけだした。

「あれ？蘭ちゃん、どうしたの？」

「おばさま……」

ようやく荒い呼吸が落ち着いたころ、私は新一のお母さんに声をかけられた。

隣に大きなスーツケースがあるから、帰ってきたところなのだろう。

「おばさま、どうしてこんなところに？」

「あら蘭ちゃん、こんなところとは失礼ねえ。

私が自分の家にきちゃいけないかしら？」

「えっ？」

本当だ、今まで私が手を付いていたのは新一の家の塀だった。
……いつの間にココまできたのだろうか
私はいつも、ツライことがあると新一の家にくるんだ

「んで？蘭ちゃんが今そんな泣きそうな顔をしているのは
ウチの愚息が原因かしら？」

「え、いや。あつあの…」

「ホラ、何があつたのか言ってみて？」

「し、新一が、新は私のこと愛してないって…」

あの新一の言葉、今思い出してもズキツとくる

「新一のヤツ、本当にそんなこと言ったの？」

「はい。『俺の蘭への気持ちは愛なんかじゃない』って…
だから、新一は私のこと好きじゃなかったんだあって」

ああ、自分で言ってる涙がこぼれてきた

ふわっ

いいにおいがしたと思ったら、おばさまがハンカチで涙をふいてく
れていた。

「あのね、蘭ちゃん。新ちゃんは蘭ちゃんへの気持ちが
”愛情なんて言葉で表せるものではない”って言いたかったのよ」

「…愛情って言葉じゃ表せない？」

「そつよ」

「じゃあ何なんですか！？新一の私への気持ちって!？」

そう尋ねるとおばさまはふわりと笑って答えた。

「恋、よ。愛情はね、包み込むことで満足できるけど、恋はその人の全てを得てもまだ全然足りないの。」

だって形のない物だから、ずっともどかしくて、せつないの。

新一はね、きつとずっと蘭ちゃんに恋し続けるのよ。永遠に、ね…」

そうなのだろうか？新一は永遠に私に恋をし続ける…？

ドキドキした。

さっき走った時よりもずっとずっと…

と、そのとき。

ギュッと、後ろから誰かに抱きしめられた。

振り返らなくてもわかる。

私を抱きしめているこの腕は

「新…」

「蘭、ゴメン。誤解させたかったわけじゃないんだ。」

ただ俺は蘭が、蘭のことを…」

「もう、いいよ。言わなくても」

私は新一の腕からするりとぬけて振り返り、新一の口に指を当てる。

「私だって、嘘をついたからゴメンはお互い様だしね」

「嘘？」

聞き返してくる新一に、私は出来るだけとびきりの笑顔に言う。

「私、新一が大好きだよ！」

私も、ずっと恋してるからね、新一に！」

「ら、ん…」

「あれ？新一、顔赤いよ？」

「な、何いってんだ！夕日のせいだ！それにお前だって赤いじゃねーか！」

「私だって夕日のせいよ！」

と、いつてから気がついた。

もうすでに日は暮れて、街灯がついてることに。

それから私たちはふつと笑いあい、どちらかともなくキスをした…はじめてのキスを…

それから新一は

「俺だっけ？とお前に恋してるからな…」
と言うと私を抱きしめた。

・・・とその時

「やっやっといつたわね！お二人さん」

その声のする方をむくと、おばさまがビデオカメラをこちらに向けていた…

「母さん！」「おばさま！」

それからひと悶着あったのは、言うまでもない。

私たちは恋をする
お互いに、永遠に

恋する人（後書き）

なんか、思ったよりも長くなっちゃいました^^：
いかがでしたか？

やっぱりラブラブってかくの難しいな…

自分で書いててこっばずかしくなっちゃいます／＼／＼／＼／
私にはこれが限度です。ハイ。

では、次回もどうぞお楽しみください。

次はかけたらコナン×歩美かな？

a n i n s e n s i t i v e m a n (前書き)

すみません。

コナン×歩美、まだ思いつきません。

もう少々お待ち下さい>m(____)m<

今度は新一+志保です。(けして×ではありません)
志保目線で

a n i n s e n s i t i v e m a n

FBIやCIAの協力もあつて組織は壊滅した。

もちろんあの凶悪な組織相手に無傷でいられるはずもなく、多くの人が大怪我をしたし、私と工藤君とて例外ではなく2か月も入院してしまった。

そして、退院してから約3ヶ月後、ようやくAPT-X4869の解毒剤ができ、

私たちは無事に元の姿に戻ることができた。

私は2つの決心をしていた。

1つは帝丹高校に通い、普通の高校生活を送ること。
そしてもうひとつは

「ねえ、工藤君」

「ん？どうした、宮野？」

元の姿に戻った直後、博士の家で体に異常がないか確かめている時。
私は宣言した・・・

「私、負けないから

明日から帝丹高校に通って

蘭さんと正々堂々と勝負してみせるわ

」

そう、これがもうひとつの決心・・・

蘭さんには敵いつこないってわかってるけど、

それでも、工藤君をあきらめない。

「・・・・・・・・」

工藤君は目を丸くして黙っていた。

当然よね、イキナリこんなこと言い出したのだもの・・・

だ・け・ど・・・

現実はそのようなモノじゃなかった。

数秒の沈黙の後、工藤君が言った言葉は、

「なんだ宮野？おまえも空手するのか？」

あいた口がふさがらなかった

そうだ、彼はこういう男だった

なんて、

ドンカンな男！

a n i n s e n s i t i v e m a n (後書き)

タイトルは英語で「鈍感な男」

(のはず。英語に自信のない作者)です。

志保ちゃんはきっとこんなこと言わないだろうな
とか思いつつも、

きつと、新一はこんな風にかえすにちがいない！
と勝手に想像しました。

次こそコナン×歩美！（書けたらいいなあ…）

萌芽（前書き）

今回はコナン×歩美です。

シンゴ様、リクエストありがとうございました&お待たせしました。

・・・ちゃんと×になってるかな？

萌芽

「いや！絶対に行く、コナン君についてくもん！」

「歩美・・・」

コナンは困ったように歩美を見た。

コナンの前に立っている少女　　歩美は大きな瞳をつりあげ、
手を腰に当て肩で息をしていた。

それはいつもの様に、少年探偵団皆で出かけ、

これまたいつもの様に事件に遭遇したときのことだった。

違う事と言えば、珍しく阿笠博士がいなく、子供だけだったということだけだ。

コナンはすぐに事件真相を見抜いたが、危険性が高いということでは

元太・光彦・歩美をうまく丸めこんで、

灰原にまかせて犯人の元へむかう自分から遠ざけたのだが

なぜか歩美はカンづき灰原のすきを突いてコナンの所へ戻ってきたのだ。

コナンはふうつとため息をついた。

歩美は先ほどから自分を睨みつけた状態で一步も動こうとしない。

「なあ歩美・・・」

「いつやつ！！！！」

「・・・まだ何も言っていないんだけど」

「どうせコナン君は『あぶねーからお前は帰れ』って言うんでしょ！？」

「そんなのいや！歩美もコナン君についてくー！！」

「だからさ歩美、危ないってわかってるんなら・・・」

「絶えっ対にい・や！」

先ほどからこんな調子話が進まない。

・・・このままでは、ヤバイ。

犯人にまんまと逃げられてしまっし、証拠も消されてしまっ。

コナンの顔にだんだんと焦りが見えてくる。

それを知ってか、歩美はさらに言う。

「ねえ、コナン君、早く行こうよ。犯人に逃げられちゃうよー！？
それでもいいの！？」

「よくねーけど、お前、ついてくるつもりなんだろ？」

うん。とうなずく歩美に対し、

「危ないんだぞ！？怪我するかもしれないし、それでもいいのか！？」

とコナンがかえすと

「危険なことをこわがってたら探偵なんてやってらんないもん！それに、危ないのはコナン君だって同じでしょ！」

「だから俺はお前に危ない目にあって欲しくなくて・・・」

「仲間を一人で危ない所にいかせるなんて少年探偵団なかまじゃない。コナン君はいつも一人でいつちやうじゃない！」

コナン君だって、歩美だって少年探偵団のメンバーなんだよ！」

それに、と歩美は付け加える。

「歩美、いつもコナン君に守ってもらってばかりだけどそれじゃだめなんだよ。ちゃんと成長しなきゃ・・・」

そう言い切った少女を前にコナンはしばし沈黙し告げた。

「わかった。ただし、俺のそばから離れるなよ。危なくなったら俺が歩美を守るからさ・・・」

「うん！じゃあ、コナン君が危なくなったら歩美が守ってあげる！」

満面の笑顔とともにそういった少女はコナンの腕をつかみ、

「ほら、コナン君、犯人はどこなの？
早く行つてとつちめてやろうよ！」

その愛らしい外見を裏切るようなセリフをはきながら、かけだした。

自分自身の成長のために・・・

萌芽（後書き）

コナン×歩美、事件もので、というリクエストだったので
全く事件の内容が書かれてない&あんま×になってませんね・・・
すみません。事件、思いつきませんでした>m(_____)m<

タイトルの意味はまあ、今まで守られてばかりだった歩美の成長の
はじまり、
といったところでしょうか？

次回はこの間の新×蘭の続きを書こうかと思っています。
ただ、明日は多分更新できません。

次回もよろしくおねがいします！

お姫様に祝福を（前書き）

「恋する人」の2日後の話です。

晴れて恋人となった二人はデートに出かけます。

またもや蘭目線ゝ

お姫様に祝福を

2日前、新一と告白しあい、

その様子をビデオにおさめたおばさまにさんざんからかわれた。

そして、今日は新一とのデートの日。

新一があの後

「明後日トロピカルランドにいこう」

って言ったんだ。

新一と二人で出かけるなんてすごい久し振りで、うれしくて早く目が覚めた。

だけど、服はどれがいいかなんて何度も着たり脱いだりしている間にあっという間に時間は経ち気がついたら約束の時間に間に合いそうにもなかった・・・

「ご、ごめんね新一。遅れちゃって!」

約束の時間に30分も遅れて現れた私に対し新一は、

「俺は今まで蘭のことずっと待たせてたからな。」

30分くらいなんともないさ。ただ・・・」

そこでいったん口を閉じると新一は私を抱きしめ耳元でささやいた

「やっぱり来てくれないんじゃないかって不安になった・・・」

あの新一が不安に？それは私だから、ってうぬぼれていいのかな？

「私はいくよ。新一が待つてゐるならどこにだって、いつだって。だから・・・」

不安にならなくても大丈夫だよって笑ってみせる。

「行こ、新一！」

私は新一の手をとりトロピカルランドにむかった。

そのときは自分の中で嬉しいの他にもう一つ別の感情があるなんて気がつかなかった。

～トロピカルランド～

休日のトロピカルランドはすごい人だったけど、

新一が上手く時間を計算してくれたおかげであまり並ばずにすんだ。

「ほら、のど渴いたろ？」

「ありがとう！」

のどが渴いたな、と思ったら新一が飲み物を買ってきてくれた。
私のことわかってるんだな、とか大切にしてくれてるんだと思う
とすごい嬉しかった。

今回は事件に遭遇することもなく、ジェットコースターに乗ったり、
トロップビーと写真を撮ったり、噴水を見たり、穏やかに時は流れた。

そして夕方

「俺、ちょっとトイレに行ってくるから
そこでまっててくれ！」

そう言うと新一はその場から走り出していつてしまった。

「あ……」

その時私の脳裏には一つの光景がよみがえった。

すぐおいつくからよー！

前に新一とトロピカルランドに来たときの、光景
ぼろり、と涙が零れ落ちた。

どうしてだろう。新一はただトイレに行っただけなのに・・・
今日はあやしい人なんて見なかったのに・・・

不安なんだ

また、新一がいなくなっちゃうんじゃないかって。
このまま帰ってこないんじゃないかって。

そう、不安が私の中にあっただけの感情だった。

ヒック、ヒック・・・

大丈夫、新一は絶対帰ってくる。だから泣くな、自分。
そう思っても一度出てきた涙は止まらなくて、
そのまま泣いていると。

「蘭・・・？」

新一が戻ってきた。

「蘭、どうしたんだ？誰かに何かされたのか？どっか痛いかな？」

心配そうにたずねてくる新一を前に、安心した私は新一に抱きついた。

「しん、うわあゝ。ひつく、新一〜!」

「お、おい蘭!? どうした!？」

あわてる新一の声が聞こえてきた。

その声と、抱きしめているこの感覚が新一が幻なんかじゃないって証だった。

「あ、あのね・・・ヒック」

「う、うん？」

「不安、だったの。新一がまた、帰ってこないんじゃないかって」

「蘭・・・」

「でも大丈夫だよ! 新一、こうして戻ってきてくれたもん!」

心配させないように涙をぬぐってにつこりと笑う

新一はそんな私をみていつそう強く私を抱きしめるといった。

「蘭、ゴメンな。不安にさせるつもりじゃなかったんだ。」

それと、俺はもう二度とお前から離れるつもりはないから

「新一・・・」

新一と二人、見つめあう。と

「あ、やべー蘭、急ぐぞ!」

新一は時計を見ると急にあわてだし、私の手をひき走り出した。

ちょっとムードが台無しなんだけど。

「はあ、間に合った〜! ほらついたぞ!」

到着した場所はトロピカルランドのお城の一番上の階、私たち以外誰もいない。

「ねえ、ちょっと。ここ、入って大丈夫なの?」

「ああ、大丈夫さ。特別に許可もらったんだ」

そういえばここにくる途中でクルーになんか見せてた・・・

「なっ、特別に許可ってどうやったのよ!？」

まさかあやしい手でもつかったんじゃない・・・と疑いの眼をむけてると

「別に大したことはしてないさ。・・・前にここで起きた殺人事件
解決しただろ？」

そのお礼ってわけさ!」

と、そこで新一は人差し指を口の前にだし、シートのポーズをとった
まさか口止めか・と思っただらそうではないらしい。
新一が窓の外を目でさす。

ピュー・・・・・・ドオーーーーーン

「う、わぁ〜キレイ・・・」

花火が上がっていた。

いつもと違う位置でみてるからか、ものすごく綺麗だった。

「ここで、蘭と花火を見たかったんだ」

「すごい・・・キレイだよ。ありがとう新一!」

そして花火も終わる頃、新一が私の方を見ていった。

「蘭、聞いてくれ。真面目な話があるんだ」

そう言った新一の顔は夜空に咲く花よりも赤かった。

「何？」

私は新一の方をむいた。二人はまた向き合う。

「・・・蘭っ。俺はお前が好きだ。この地球上の誰よりも。だから、そっその！俺と結婚してくれ！！」

そう叫んだ新一が出したのは箱。

中にはシルバーのシンプルだけどとてもきれいな指輪がはいつてて・
・

「私で・・・いいの・・・？」

ためらう私に新一はきっぱりと告げる。

「俺はお前しかいない」

そして私は決める

答えなんて最初から一つしかなかった。

「はい。喜んで！」

嬉しい・・・今までの人生の中で一番幸せ・・・

そう言うとなつは、これからもっともっと幸せにする。って言うって指輪をはめてくれた。

そして私の頬に手を添えると

「好きです・・・俺の、お姫さま」

口づけしあう二人を祝福するように、最後の花火が一際キレイに咲いた。
今の二人をみているのは、花火だけだった

お姫様に祝福を（後書き）

フツのデート書くつもりがいつのまにか

プロポーズ話になってた・・・

優作さんと同じ場所でさせようと思ったんですけどね・・・
なんか変わっちゃいました。

ではまた次回もよろしくです！

おちゃんわん（前書き）

こんばんは！

今日はバイトが思ったより早く終わったので更新できました

今回は恋愛色ゼロです。

おちゃわん

「まったく、蘭のヤツ。子供扱いしやがって・・・」

コナンは毛利家の居間でひとりぼやいた。
もちろん、台所にいる蘭には聞こえないように

今、コナンの目の前にあるのは子供用のパジャマ
そのおなかにでかでかと書かれているのは青がベースの服を着て
額には黄色のY、首には赤いスカーフ。
そう、仮面ヤイバーだ。

「コナン君、新しいパジャマ買ってきたよ！
じゃーん、何と仮面ヤイバーなのだあ！！」

という明るいセリフとともに蘭び渡されたのが、コレだ。

なんで高校生にもなって仮面ヤイバーなんだよ・・・
などと言えるハズもなく、コナンは笑顔でそれを受け取った。

・・・蘭ときたら、いつもこうなのだ。
何かにつけ、コナンが新しい物がある、となると
こうやってヤイバーグッズを買ってくる。
・・・もしや蘭が仮面ヤイバーが好きなんじゃないか、と思うほどに。

お箸にお弁当箱、歯ブラシ、文具に下着、e t c . . .
数えだしたらきりが無いほどに。

そして、今日のパジャマだ。

「い飯よ」

蘭の呼びかけとともに、夕食がはじまる。

今日のメニューはぶりの照り焼きにほうれん草のおひたし
それに根菜の煮物だ。

「おいしい？コナン君？」

「うん。とってもおいしいよ！

さすが蘭ねえちゃんだね、おじさん！」

「ああ、英理のヤツとは大違いだ。

蘭の料理の腕がアイツに似なくてよかったぜ！」

「ちょっとお父さん！お父さんがそんなことばかり言うから
お母さんがでてっちゃたんじゃない！」

にぎやかな夕食が進む中、コナンはお茶碗を落としそうになる。
先日、蘭がコナンのお茶碗をわってから

コナンは来客用の薄緑色のお茶碗を使っているのだが、

子供の手には大きく、やや持ちづらいのだ。

「あ、コナン君大丈夫？ やっぱりそれじゃ持ちにくいよね？
今度新しいの買ってきてあげてからそれまで我慢してね！」

「フン！ 居候のガキの為にわざわざ新しいの買つ必要なんざないが・
・
落して割られたら迷惑だからな！」

「もー、お父さんたらすぐそういう言い方するんだから！
コナン君、これでもお父さんはコナン君の事心配してくれてるのよ」

「別に俺はこんなガキ・・・」

「はいはい」

そんな会話がされた数日後、蘭が買ってきたのは

「はい、コナン君。新しいお茶碗買ってきたからね！」

満面の笑みとともに渡されたのは、

案の定仮面ヤイバーのお茶碗だった・・・

「はあゝ」

コナンは蘭に気づかれないように何度目かのため息をついたのだった。

おちゃわん（後書き）

蘭ってコナンのこと子供扱いするの好きだな
と思います、書きました。

割れたお茶碗ってのは「漆黒の追跡者」からです。

至福の日（前書き）

こんばんは。

今回は新蘭結婚式

お姫様に祝福をの3年後。

例によって蘭目線

・・・でも結婚式って出たことないからよくわかりません^^;

至福の日

ある、よく晴れた春の日。

今日は桜が満開に咲いている。

今日は、結婚式。

私と新一の、結婚式

「蘭、ついたぞ」

お父さんが車のドアを開けてくれた。

「ありがとう、お父さん」

3年前、新一が私にプロポーズした後、新一は私のお父さんとお母さんに結婚の許しをもとめた。

お母さんは「結婚は20歳になってからね」といつてすぐに許してくれた。

だけどお父さんはなかなか許してくれなくて、

だけど新一はお父さんの許しが出るまで毎日私の家に来た。

そしてそんな日が半年も続いたある日、突然

「絶対に蘭を幸せにしろ」

そんな言葉と共にお父さんの許しが出た。

その前日まで絶対にダメだと言っていたのに、急に許した事が気になっ
て

その日の夜お父さんに聞いたら、

「新一はお前をさんざん待たせたから許すつもりはなかったが、
お前が待った分だけ毎日来たからアイツの気持ちを認めただ」

そう言う優しい目をして私の頭をくしゃり、となでると

「よかったな、蘭。幸せになるんだぞ」

と微笑んだ。

・・・いよいよ式が始まる。

お父さんに手をとられてバージンロードをゆっくりと歩く。

その先には、誰よりも愛しい人。

新一が待っている。

そして私は新一のもとにたどり着いた。

「工藤新一、あなたはこの者、毛利蘭を妻とし、その健やかなときも、病めるときも、喜びの時も、悲しみの時も、富めるときも、貧しきときも、妻を愛し、妻を敬い、妻を慰め、妻を助け、そのいのちのかぎり、堅く節操を守ることが神聖なる婚姻のもとに誓いますか」

神父さんの前での誓いの言葉。

「はい。誓います」

新一のきつぱりとした声。

そして神父さんが次に私にたずねようと口を開こうとした時、再び新一の声が聞こえた。

「そして、この命が無くなり魂のみとなっても、蘭一人を愛し抜くことも重ねて誓います」

「なっ、新一！」

式場がざわめいた。神父さんも驚いている。

当り前だろう。今まできつとこんなことを言う人はいなかっただろうから。

オホン、と咳ばらいをして神父さんは式を元に戻す。

「毛利蘭、あなたはこの者、工藤新一を夫とし、その健やかなときも、病めるときも、喜びの時も、悲しみの時も、

富めるときも、
貧しきときも、夫を愛し、夫を敬い、夫を慰め、夫を助け、そのいのちのかぎり、
堅く節操を守ることが神聖なる婚姻のもとに誓いますか」

「はい。誓います」

そして、と心の中で付け加える。

私も、魂だけとなっても、新一だけを愛し抜きます。と。

だって私まで口に出したらまた騒がしくなっちゃうもんね！

ここでふと参列者の方に目をやるとお父さんが号泣しているのが見えた。

お母さんも涙ぐんでいる。

お父さん、お母さん……

今まで二人に育てられてきた。

そのことを思うと私も涙が出そうになる。

だけど必死で涙をこらえる。

晴れの日には花嫁の顔が雨だったらヘンだから……

でも、やっぱりほんの少しだけ涙がこぼれてしまったと思う。

最後にブーケトスの時がやってきた。
ブーケの花は園子を選んでくれた。
赤いアネモネの綺麗なブーケ。

園子ったらブーケの花を決めるのを手伝って欲しいって言ったら

「アネモネよ、アネモネ！それも赤いやつ！

花言葉が『君を愛す』ですって！あんた達にぴったり！

あ、でも胡蝶蘭もいいかもしれないわね。『変わらぬ愛』ですって。
あゝでもやっぱコレも・・・」

なんて言ってなかなか決まらなかった。

あれもいい、これもいいなんてなかなか決まらず、
結局一周めぐってアネモネになった。

「でもね、この花って本当にあんた達にぴったりだと思っよ・・・

赤い花だと花言葉は『君を愛す』なんだけど、

白は『真実』・・・新一君にぴったりでしょ？

そして紫は『あなたを信じて待つ』。

新一君をずっと信じてまっけた蘭にぴったりよね！」

「ちょっと、園子！私はもう新一のこと待たないんだからね！」

「ごめんごめん。でもさ、そんなこと言っても

蘭は待ちそうだよね、新一君のこと。

例え新一君に何があっても・・・」

「もう！不吉なこと言わないでよ！」

そんな会話をしながら決めたのが、このブーケだった。
そして私はこのブーケを大切な親友の方へと投げる。

園子が京極さんにまだプロポーズされてないってへこんでたから、すぐに園子にも幸せがくるように・・・

見事キャッチした園子は嬉しそうに笑って

「らあ〜ん！おめでとう、幸せになりなさいよう！

新一くん！蘭のこと幸せにしなかったら承知しないわよ！

もう一度でも蘭のこと待たせてみなさい！？

この鈴木園子様がアンタに鉄拳制裁をくれてやるわ！

あと、誓いの言葉、イケてたわよ！」

なんて拳を振り上げてる。

「おめでとう」

「蘭ちゃん、おめでとう！幸せになってな〜？」

「お〜工藤！よーやったなあ！」

「探偵ボウズ、蘭を泣かせたらただじゃおかねーぞ！」

「工藤君、蘭さん、おめでとう！」

みんなの祝福の言葉が降りそそぐ中、私は隣に立つ大好きな人を見上げる。

目が合うと、自然に笑顔があふれる。

「なあ、蘭」

「何？新一」

そんな中、ふと新一が口を開く。

「お願いがあるんだけど・・・」

そう言うと新一は私の耳元に口をよせて“お願い”を言う。
なら、と私も新一に“お願い”を言う。

「いいか、せーで言うぞ？」

「うん！」

私たちは呼吸をあわせて「せーの」と言い、

「ずっとずっと、大好きだよ」「おまえ」「あなた」

「おまえ」と「あなた」、なれない呼び方でお互いを呼んだ二人は、園子の持つてるブーケの花よりも赤くなった。

至福の日（後書き）

うーん、新蘭の結婚式、ラブラブで、と言うリクエストだったので
すが、

新蘭ラブラブ要素が少なすぎるような・・・

ところでアネモネってブーケにするのありなんですかね？

適当に花言葉調べてきめたんですが・・・

おまけに結婚式ってどういう風に進行するのかわからん。

W I S H O 2 様、期待はずれで申し訳ないです> m (| (m <

次は・・・この二人の新婚生活ってのもありなんです
が、しばらくは他のネタでいきます。

明日は更新できるかな

本庁刑事の求婚物語（前書き）

こんにちは。

昨日は体力値がゼロとなったため更新できませんでした。
今回は高佐です。

ちょっとだけ「お姫様に祝福を」とつながっています。

・・・にしても、タイトルが思いつかない><

本庁刑事の求婚物語

工藤君が蘭さんにプロポーズをしたらしい・・・
しかもトロピカルランドのお城で。

彼もやるのがデカイな、と感心しつつ高木渉は一つの決心をした。

佐藤さんに、求婚しよう。

高校生だつてやったんだ、僕だつて頑張らなければ、と。

「やゝ今日は楽しかったわ。高木君、ありがとね」

「あ、いえ・・・」

高木の決意の次の非番の日、いつもの様な他の刑事たちの目を盗んでのデート。

その終わりに近付いてきた時、二人は米花町を一望できる眺めのいい場所にいた。

いつも彼らが守っている米花町コメコメは夕日で鮮やかに染まっている。

「今日の高木君なんかいつもより無口じゃない？
体調でも悪かったりする？」

「いえ！大丈夫です。元気です！」

どれ、と自分の額に手を伸ばしてきた佐藤に、高木は慌てて否定する。

あらそう？と手を下した佐藤はそれとも、と続ける。

「私とのデートが嫌だったとか？」

そう言うと佐藤は犯人を取り調べる時の様な、刑事の目になる。慌てたのは高木だ。

「ああああつ、いや！そんなことはありません！」

「ホントにいく？」

なおも疑いの眼を向ける佐藤に対し、

「本当です！桜の代紋に誓って！佐藤さんとのデートが嫌だなんて、例えば天と地がひっくり返ってもあり得ません！！」

必死で否定する高木の姿がおかしかったのか、佐藤はぶつとふきだす。

大げさね、と笑いながら夕日に染まった米花町に視線を戻す。

その横顔を見ながら高木は改めて思う。

やっぱりキレイだ、と。

そして彼女がキレイなのはその外見の美しさだけではなく、どんな時にも揺るがないその強い信念からも来ているのだ、と。

数分後、

深呼吸を一つした高木は決意を実行に移す。

「あ、ああの！さ、佐藤しゃん！」

「（しゃん？）どうしたの、高木君？」

緊張のしすぎで嘔みまくった高木をいぶかしみながらも佐藤が返事をする。

「（わあゝ何やってんだ俺！落ち着け、落ち着くんだ！）
ぼ、僕は佐藤さんが好きです！だから、あの、そのつ、
僕と結婚してくださいっ！！」

つかえながらも何とか目的の言葉を言った高木を驚いたように見つめながら、

佐藤は再びふきだした。

「高木君、舌かみすぎ・・・」

「あ、す、すみません！その・・・」

慌てて謝罪しはじめた高木を制し、でも、と佐藤が続ける。

「でも、そんな高木君だから傍にいたいと思うのよね
だから・・・」

貴方のプロポーズ、受けるわ。と言った佐藤に高木は赤くなりながら

「ほ、本当にいいんですか？」

「もちろん、女に二言はないわ！」

そう言い切った佐藤の目は強い決意が浮かんでいた。
これを疑うなんてとんでもない、と高木は思う。

「あ、そうだ。指輪！」

高木はバッグをぐそぐそと漁り目的のモノをだすと佐藤に向かい合う。

「佐藤さん、左手を出してください」

「え？ええ。いいわよ？」

きょとんとしながらも佐藤が出した左手、その薬指に指輪をはめる。
それを見た佐藤は

「ねえ、高木君、左手の薬指ってなにか意味があるの？」

「ええええ！？佐藤さん！？」

「何よ？」

「それはですね……」

まだ“左手の薬指”の意味がわかっていなかった佐藤に驚きながらも説明する。

「へえ、そんな意味があったのね」

知らなかったわ、とつぶやくと佐藤はその手を胸に抱く。
まるで、今しがたはめられた指輪と
それをはめた後輩刑事の想いを抱くように

「ありがとう。高木君」

佐藤はふわり、と微笑むと高木の目を見て言う。

「きっと幸せにするからね！」

力強く言い切られたその言葉に高木は思わずずっとける。
男のセリフ、とられた

やれやれ、と頭を搔くと、高木は言う。

「じゃあ僕は、その100倍は幸せにします」

そして後日、

佐藤は由美にからかわれ、

高木は他の刑事達から尋問を受けたのは、言うまでもない

朝の挨拶（前書き）

WISH02様のリクエストより

「至福の日」の続きで新蘭新婚生活です。

新一君、キャラ崩壊・・・

さうて、ちゃんとラブラブになるでしょうか？

朝の挨拶

「も〜、新一い！いつまで寝てんの！？早く起きなさい！！」

日曜日の朝、10時すぎ、元気のよい声が工藤邸に響き渡る。

米花町2丁目21番地にどつしりと構える工藤邸。

今現在そこに住んでいるのは先日幼馴染の関係からめでたくゴールイン、

結婚した年若い夫婦である。

工藤新一

工藤蘭（旧姓：毛利）

この二人は今日もにぎやかに朝を迎える。

新妻、蘭は夫、新一の寝室の扉をバーンと勢いよく開け、
ずかずかとベッドのどこまで歩く。

「ちょっと新一！？珍しく依頼がないからっていつまで寝てんの！？まったく、しょーがないんだから！」

「ん〜あともうちよつとだけ・・・」

耳元で怒鳴っても起きる気配のない新一に蘭は額に青筋をたてて、

「ふうん、そう。起きないのね？」

新一はせっかくの休日でも私と過ごすより寝ることを選ぶんだ……じゃあ、昨日焼いたレモンパイ、全部一人で食べちゃおう」

そう言うと、くるりと背を向けると部屋を出て行くとする蘭に新一は慌てて

「わあーまってまって！蘭まって！今起きるから！だから俺にもレモンパイ」

そのあまりの慌てっぷりに一瞬、蘭は吹き出しそうになるが、おもしろくなってもう少し夫をからかうことにする。

「……へー、新一は私が何回起こそうとしても起きなかったのにレモンパイで起きるんだ……。ふうん、そう。新一は私よりもレモンパイの方が好きなんだ？」

そういじける（もちろんふり）蘭に新一はあわてる。

「おい、蘭！なんで考えがそーなるんだ！？

そんなことない！絶対ない！」

「じゃあ、レモンパイ、私が全部食べてもいいのね？」

「……………」

「ほら、即答できないじゃない！」

新一の私への気持ちってしょせんそんなものなのね……」

「そーじゃないっつの!」

「じゃあ、いいの?」

「・・・っ、ああ。いいよ!」

「目が泳いでるよ? 探偵さん?」

「泳いでねえ!」

完全に蘭に遊ばれているのだが、新一はその事実気がつかないよ
うで、

彼にしては珍しく焦っている。

そしてとうとう堪えられなくなった新一は蘭を強引に抱きよせる。

「ちよっ、何!? 新一!?」

「お前とレモンパイ、どっちがいいかなんてそんなの決まってるだ
ろ?」

俺が一番好きなのはお前なんだから・・・
信じらんないなら、証明してやるつか?」

「えっと、あ・・・」

どうしよう、からかってたつもりなのにいつの間にか
新一が本気^{マジ}になってる・・・

と、蘭がどきまきしていると、

「くっ、あはははは！」

新一が笑いだした。

そこで蘭はようやく気付く。

「からかったわね!？」

からかう側とからかわれる側、いつの間にか立場が逆転していたのだ。

んもう、と頬を膨らます蘭に対し新一は囁く

「ごめんごめん、蘭があんまり可愛いからつい・・・」

その言葉に蘭はゆでダコになる。

「もう、新一ってば！」

目が覚めてるならさっさと起きる！

ごはんにしよ!」

「ああ。でもその前に・・・」

ニコニコと新一は言う。

「蘭、『おはよう』のキスして？」

なっ、と再び真っ赤になった蘭は、

「もう『おそよう』でしょ？」

と言うと、夫の唇は自分のそれを重ねた。

「おはよう」「」

朝の挨拶（後書き）

はい、新一、激しくキャラ崩壊した気がします。

新一ファンの皆様、ごめんなさい > m (——) m <

次は真×園子か「萌芽」の続きます。 (たぶん)

今はまだ遠い、背中（前書き）

シンゴ様のリクエストより

「萌芽」の続きです。

江戸川氏負傷。

はい。一回書いたのに全部消えるという悪夢がおこりました。
ああ、死にそう・・・

今はまだ遠い、背中

「コナン君、コナン君！」

「っ……っ！」

コナンは左腕の付け根をおさえ、歯を食いしばり痛みをこらえる。そこにはひと振りのナイフが深々と刺さっていた。

それは、いつもの様に探偵団でかけ、これまたいつもの様に事件に遭遇した時のこと。

犯人を見抜いたコナンは子供たちを遠ざけ、一人で犯人の元へ向かおうとしたが、それに気付いた歩美がコナンについてきた。

それから証拠を消される前に犯人の元へ行き、コナンが推理を披露。

犯人が犯行を認めたとこへタイミングを見計らって歩美が呼んだ警察が登場。

あとは逮捕、連行するだけだった。ここまでは順調だったのだ。

しかし土壇場になって犯人がいきなり隠し持っていたナイフを出し、

近くにいた歩美に襲いかかろうとしたのだ。

「歩美！」

「きゃっ」

とつさにコナンが歩美を突き飛ばし、歩美は無傷ですんだのだが、

「ぐうつ……！」

「コナン君！」

コナンは左腕の痛みを抑え、何とか犯人に麻醉銃を撃ち込む。ボタン、と倒れた犯人を警察が連行し、救急車を呼んでいる間歩美はコナンの元へと駆け寄る。

「歩美ちゃん、大丈夫だから……心配しないで？」

「大丈夫なわけないよ！
だつてこんなっ、ナイフが……！」

ああ、そうだ。ナイフを抜かなきゃ。と震える手でナイフを抜こうとすると、コナンの手がそれを制する。

「だ、いじょうぶ。……抜かないで？」

「でもっ、こんなに刺さってるのに！」

「い、今、抜い・・・ちまった、ら
血、がと、止まら・・・ない、から・・・」

とぎれとぎれの言葉。その間にもナイフの下からとどまることなく
血が流れている。

どんと蒼白になっていくコナンの顔をみながら
涙目になった歩美は思う。

どうして、自分は何も知らないんだろう？
どうして、自分は何もできないんだろう？
早く来て、救急車さん。

数分後、ようやく救急車が到着した時には
もうすでにコナンの意識はほとんどなかった。
そしてそのままコナンの体は米花総合病院へと運ばれた。

コナンの傷は思ったよりも酷く、
左腕の付け根から斜めに刺さったナイフの切っ先は
心臓のちかくまで到達していた。

病院の手術室前の廊下で歩美が佐藤刑事に付き添われながら震えていると

元太達がやってきた。

探偵団バッジで連絡をしたのだ。

普段なら抜けがけがどーのこーのと文句を言う元太・光彦も

コナンが心配なのか何も言わない。

灰原は手術室の扉をチラリ、と心配そうに見ると歩美に声をかける。

「吉田さん、大丈夫？」

「う、哀ちゃああゝん！」

とうとう我慢できなくなった歩美は灰原に抱きつく。

「うう、どうしよう？コナン君が、コナン君がゝ！」

歩美のせいで！どうしよう！？もし・・・

ヒック、こ、コナン君が死んじやつたら・・・！」

灰原は泣きじゃくる少女を抱きしめながら言う。

「大丈夫よ、江戸川君はこんなに泣いている貴女を残して死なないわ・・・」

それより、彼が助かることを祈りましょ？」

「ヒック、う、うん」

2時間後

手術中のランプが消え、中からストレッチャーに乘せられたコナンが運ばれてくる。

コナンの顔は蒼白く、酸素マスクを当てられている。

「あ、あの！コナン君はっ、コナン君はどうなんですか？
大丈夫なの！？」

手術室からでてきた医者に必死にすがりつき問う歩美に対し、医者は

「もう大丈夫です。命に別状はありません。
心配しなくても大丈夫だよ」

その答を聞くと同時に歩美は床にペタリ、と座り込む。

「よかった。ホントによかった！」

そのまま呆けたように座り込む歩美に灰原が手を差し伸べ、歩美は立ち上がる。

「じゃあ、彼の病室にいきましょっか？」

「うん！」

数時間後

小さなうめき声と共にコナンが目覚めた時、病室にいるのは歩美だけだった。

灰原は眠気覚ましにコーヒーを飲み、元太は「腹へった」と光彦をつれどこかへ行き、小五郎と蘭はまだ来ていない。

「う……………」

「コナン君！気がついたの！？
どっか痛いところない？お医者さん呼んでくるね！」

そう言いかけだそうとした歩美の手をコナンの右手が引き留める。

「コナン君？どうしたの？」

「歩美、泣いてただろ？ごめんな、
『守る』って言ったのに、泣かせちゃって……………」

その言葉で歩美は気づく。
コナンの言った「守る」には身体だけじゃない、心もふくまれているのだと。

「ちがうよ、コナン君はちゃんと歩美のこと、
守ってくれたんだよ……………」

歩美なんて『守る』っていったくせに何にも出来なくて……………」

それに、と歩美は続ける。

「歩美、なんにもわかってなかった。
『危険なこと怖がってたら探偵なんてやってられない』とかいいな

がら

本当に怖いのは何かわかってなかった。
ホントに、本当に怖いのは・・・っ」

自分が傷つくことじゃない

他人が、大切な人が傷つくこと

そんなこともわかってなかったなんて、探偵失格だ

うつむいて涙をこらえる歩美の頭にポン、と優しく手が置かれる。

歩美が顔をあげると、コナンが優しい目をしてこちらを見ていた。

「それでいいんだよ」

「えっ・・・？」

「知らないことがあるのは悪いことじゃない。

知らないことはこれから知っていけばいいんだ・・・

大丈夫、歩美ならできるよ」

「ホントに？できるかな？」

「ああ。歩美が『知りたい、わかりたい』って思うなら。

大丈夫。歩美はまだ小学１年生なんだから、時間はいっぱいあるよ」

「なんか、その言い方、コナン君小学生じゃないみたい」

「え、いや、そんなことないよ！」

ふと歩美はさつきまでの辛さがなくなっている事に気がついた。

やっぱり、コナン君はすごい。と歩美は改めて思う。

事件だけじゃなく、歩美の悩みまで解決にちゃうんだもん。

そうだ。

知らないことはこれから知っていけばいい。

知らないことがあるのは悪いことじゃないんだ。

そうやって、色んなことを学べばいい。

それで、いっぱい知ったら、コナン君みたいになれるかな？

ううん。なれなくてもいい。

だって歩美は歩美だから。

でも、そしたらいつかコナン君の隣に立つんだ。

今はまだその背中を見ているだけだけど、

いつか、きつと「私もコナン君と同じ探偵です」って
胸を張って言えるようになるんだ！

「よし！」

その後、歩美は閉館間際の図書館にかけこみ、
本を数冊借りた。

まずは、色んなことを知るんだ。

その夜

歩美が借りた本をみた歩美の両親はひっくり返ったとか返らなかったとか

「よくわかる応急処置」

「毒物・劇物の効果と管理法」

「世界の凶器」

「人体の仕組み」

「銃器と刃物、その殺傷能力」

今はまだ遠い、背中（後書き）

あゝ焦りました。マジで。

だって全部消えたんだもん。

あ、最後のヤツは歩美が借りた本のタイトルです。
テキストにつけました。

では次回もよろしくです！

幸せの音（前書き）

こんにちは

WISHO2様のリクエストより、

新蘭で蘭妊娠話。

妊婦蘭ちゃんと過保護な夫新一君でお送りします。

また新一のキャラ壊れるかも・・・

基本蘭目線。後半からはちょっと変わります。

幸せの音

朝、
なんだかイイ匂いがする、と思ったら新一が私の部屋のドアを開けた。

「おはよう、蘭！今日はよく寝むれたか？」

「新一、おはよう。この匂いは何？朝ごはん？」

「ホットケーキなんだけど、食えるか？」

「うん！」

私の妊娠がわかってから、新一はすごく変わった。
まず、朝は私よりも早く起きるようになった。
そして、コレが一番驚きなんだけど・・・料理をするようになった。
以前は包丁を持たせたら切ったものが全部つながっていた新一が！
そりゃあ、まあ最初は酷かった。否、酷いなんてものじゃなかった。

つわり中の私の為に作ってくれたお粥は、
黒こげでとても食べられるものじゃなかったし、
パスタを茹でれば茹で過ぎでドロドロになるか、逆に芯が残りすぎる。

果物を切ろうとすれば何をどうやったのか
切ろうとした果物が吹っ飛んで壁にぶつかり半分つぶれる・・・
困ったような顔で、潰れかけたメロンを持ってきた時のことは今で

もよく覚えてる。

でも、新一は元々器用だからか、
1か月もするとまともなモノが作れるようになった。

他にも掃除をしたり、と色々な家事をこなすようになった。

あと、もう一つ。

何と言うか、まあ、過保護なのだ。
それも、超がつくほどの……

私が少し掃除をしようとする

「俺がやるから蘭はじっとしてろ」

とか、

ちょっとした重い物を持つとうとする

「蘭はそんな重い物、持ちちゃダメだ！何かあったらどうする！？」

とか、

果ては階段を上り下りするだけなのに

「転んだらたいへんだ」

と必ず付き添う。

嬉しいような、でもやっぱり過保護なような・・・
子供が生まれたらもっと大変だろうな、と思う。
きつと、今以上の過保護っぷりを発揮するんだろう・・・

今日の朝ごはんはホットケーキに蒸し鳥と生野菜のサラダ、
それにデザートグレープフルーツだった。

料理が出来るようになったころは

得意げに卵焼き単品をドーンと食卓に出していた新一だが
それじゃ、栄養が偏ると気づいたらしく、
今では色々とメニューを考え、工夫している。

「じゃあ、いつてくるな！
5時くらいまでには帰るから！」

「うん、きをつけてね！」

「お前もな！何かあったらすぐに電話すんだぞ！？」

「はい！」

いつてらっしゃい、と軽くキスして送り出す。

今日は新一は、依頼人の家へ行つて調査をするらしい。

「さてと、と」

相変わらず新一が家事を全部やってしまつてやることないし、園子とは昨日の午後中ずつとおしゃべりしたし、今日は本でも読んですごそっかな

もう何回も読んだお気に入りの本を手にとり、家で一番すわり心地のいい椅子に座ろうとした時、お腹に違和感を感じた。

「え．．．？」

工藤邸の主、新一が自宅に帰つたのは午後５時半だった。

「ただいま、蘭！」

しかし彼が呼びかけても家の中はシンと静まり返っている。

「蘭．．．．？」

不審に思つた新一が家の中を探すと、蘭はよくいる、日当りのいい

部屋にいた。

夕闇のせまる部屋の中、電気もつけずにいる蘭の背中のはかすかに震えている。

「蘭！」

驚いた新一がかけより、その顔をのぞき込むと、涙でぬれていた。

「おい、蘭！どうした！？なにがあつた！？
まさか・・・・・・・・」

お腹の赤ん坊に、なにかあつたのか、と青ざめる新一に震える声で蘭は告げる。

「あのね、お腹の赤ちゃんがね・・・」

「うん・・・」

「動いたの！動いたんだよ！」

「・・・・・・・・へ？」

赤ん坊に何か良くないことでもあつたのか？
と身構えていた新一は思わず間抜けな声を出す。

「う、動いた・・・・・・・・？」

「うん。そうなの！今日、初めて動いたんだよ！」

「ほ、ホントか・・・・・・・・！？」

「ホントだよ・・・」

さわってみて？と蘭は自分のお腹に新一の手を当てる。
最初はなにも感じなかったが、しばらく手を当てたままにしていると、

「あっ」

「ね？動いたでしょ？」

「ああ！動いた！動いたぞ！」

新一は驚き、また大いに喜んでいた。
子供が、動いてる

そんな新一の様子を見て、蘭も嬉しそうに笑う。
心の中で、お腹に宿る命に語りかける。

ねえ、聞こえてますか？

私と新一のかわいい赤ちゃん。

私たちはあなたが大好きです。

私たちのところへ来てくれてありがとう。

あなたに会えるのをずっと楽しみにしているからね

新一と蘭が、この新しい命に会えるのは、もう少し先のこと

幸せの音（後書き）

はい、なんとか書きました。

なかなか話の展開が思いつかなくて・・・

新蘭妊娠話はこんな感じで！

で、こんど赤ちゃんの話もかきたいのですが、

新蘭の赤ちゃんの名前、募集します！

女の子にしようかなって思ってますので、

どうぞよろしくお願いします>m(_____)m<

漢字には読み仮名をふっていただけとありがたいです。

よろしければ由来も・・・

由来がなかった場合はこちらでなんか考えます。

冬物語（前書き）

今回は真×園で！

新蘭の続きはまた後ほど・・・

冬物語

それは12月の半ばのこと

園子は今しがた見た光景が信じられなかった。

もしかしたら、自分の目がおかしくなったのではないか、と思うほどに・・・

その日、園子は米花町のショッピングモールに一人で買い物に来ていた。

セール中だったこともあり、いつもより安く、

いいモノが買えた園子は満足していた。

満足したし、さあ帰ろう。と帰ろうとした瞬間、ソレを見た。

米花町ショッピングモール1階にあるジュエリーショップ「Beika」で、

園子が今現在交際中の恋人、京極真が他の少女と指輪をみているのを・・・

その少女はかわいらしかった。

清楚な雰囲気を漂わせ、ゆるやかな天然パーマの黒髪は肩にかかる程度。

大きな瞳はキラキラと輝き、楽しそうに京極を見つめている。

そして対する京極はというと、

どこか照れたような笑顔で色々な指輪を手にとり、少女に見せてい

る。

まるで、どれが一番少女に似合うか確かめているかのように

それ以上その光景を見ていられなくなった園子はその場からかけだした。

かけだして、その店が見えなくなった所でようやく立ち止まると今見た光景を思い返す。

今のは、どう見ても

浮気

そんな言葉が頭の中に浮かんでくる。

真さんは、そんなこと絶対にしないって思ってたのに・・・
しよせん、彼はそういう男だったのだろうか？

まてよ・・・

そもそも自分は京極真の“彼女”になれていたのだろうか？
ふいに親友の言葉がよみがえる

『京極さんファンの子多いんだから・・・』

京極にとっては、自分は“ファンの子”だったのだろうか？
いずれにしても、

「失恋、か・・・」

本当にやんなっちゃうな、とため息をつく、園子は帰路につく。
さっきまで心を浮き立たせていた買い物袋が、
ものすごく重く感じられた・・・。

それから約1週間後、

今日は帝丹高校の2学期の終業式だ。

皆が各々の成績表に一喜一憂している中、園子は深いため息をついた。

1週間前の光景が忘れようにも忘れられないのだ。

こーなったらやることは1つ。

カラオケにでもいつて憂さ晴らししてやる！そして忘れるんだ！

そう決めると園子は親友に声をかける。

「らあ〜ん、今日この後カラオケいかない！？

あと、ケーキバイキングも！」

カラオケも、ケーキバイキングもどちらも蘭が好きなものだ。

断られるワケがない。と思ったら、

「ごめ〜ん、園子！今日は新一と映画なの！」

そう謝る親友の顔はデートが楽しみなのか嬉しそうでもとても邪魔できやしない。

「ああ、そうゆーことね！

うん。ならしょうがないわね。じゃあ、また明日！」

明日から学校休みだよ！という声を耳にしながら
園子は教室を後にする。

なんか、最近いいことないし、今日はまっすぐ帰るか……

その夜、

園子が1人さみしく部屋でテレビを見ていると携帯が鳴った。

くくく

この着メロは、

「真さん……」

一瞬ためらった後、園子は思い切って通話ボタンを押す。

「……もしもし？」

「あ、そ・園子さん！こんばんは。
えっと、京極です……」

電話の向こうから聞こえてきた声に園子は一瞬、おかしくなる。

登録してるんだから、名乗らなくても分かるのに・・・
いや、たとえ登録していなくても、声をきけばわかる。
彼の、声なら

「どうしたの？」

「え、あの・・・お話したいことがあるのですが、
今から米花公園にきていただけませんか・・・？」

緊張したような声でピンときた。

別れ話だ。

そうか、私、ふられるんだ。

「わかった。すぐに行くから、待つてて・・・」

電話をきくと園子は大急ぎで支度をする。

どうせふられるなら、ふったことを後悔するようないい女スタイル
でいってやる！

そう決意すると、園子はいつもよりも大人し目の、
大人っぽい服に着替える。

～米花公園～

園子が行くと、すでに京極は到着して、園子を待っていた。

「園子さん！急に呼び出してすみません。

あ、今日はいつもより大人っぽい格好をされてるんですね・・・
よくお似合いです」

「で、何？話したいことって？」

そんな言葉なんて聞きたくない。とばかりに園子は言う。
きつと、やましいからこんなこと言ってるんだわ・・・

「あ、実はですね、園子さんに会わせたい人が・・・」

「会わせたい人あゝ？」

「あ、いえ。会わせたいというより、

園子さんに会いたがつてる人でして・・・」

まさか、この間の彼女か？

そんなに人を馬鹿にしたいのか、と園子が憤っていると
公園の入り口の方から1人の少女が走ってくるのが見えた。

「まゝこゝとゝくゝん！」

手を振りながらニコニコとやってくるのは、やはりこの間の少女だ。

「蓮^{れん}！」

隣をみると、京極が少女に手を振っている。

何よ何よ！目の前でいちゃついてみせて別れようっての！？

我慢の限界に達した園子が怒鳴ろうとした時、少女が到達した。
少女は園子を見ると目を輝かせて

「あなたが園子さんね!？」

「え、ええ」

少女、蓮と言っらしいが、のキラキラした目におされてうなずく。

「お兄ちゃんの彼女の!」

「ええ、まあ。・・・ってお兄ちゃん!？」

誰が!？誰の!？と驚いてる園子に蓮はクスクス笑いながら告げる。

「はじめまして、園子さん。」

私は京極蓮。ここにいる京極真の妹です」

ついでに言っなら中3です!とか明るく言っ蓮をみて、園子は京極を見る。

「あ、あの。真さん・・・?」

「すみません、園子さん。蓮のヤツどうしても園子さんに会いたい
って」

「だってすっごい興味あつたんだもん!

真くんみたいなのを彼氏にするなんて奇特な人だと思って」

「真くん・・・?」

「おい、蓮！家の外でその呼び方はやめろっっていただろ！？」

園子が京極を見るとかなり焦ってるのが見て取れた。

ちよつとおもしろいかも・・・

浮気疑惑も自分が疑心暗鬼になってただけだとわかった園子は蓮と一緒に成って京極をからかう。

「いいじゃん、真くん！」

「ほら、園子さんだっていってるよ、真くん」

「な、だから・・・！」

ひとしきり騒いだ後、蓮が兄をみる。

「で？例のモノは渡したの？」

「例のモノ？」

首をかしげる園子に、京極は小さな包みを差し出す。

「園子さん、メリークリスマス！・・・です」

「あっ！」

忘れてた。そうだ、今日はクリスマスだ。
だから蘭はデートだったんだ。

「あの、開けてみてください」

「う、うん」

小さな包み紙をはがすと出てきたのは

「わぁ・・・！」

雪の結晶の指輪だった。

「こ、コレ・・・」

「私が選んだんですよ」

驚いてる園子に蓮が告げる。

「お兄ちゃんたら『園子さんにクリスマスプレゼント買うの手伝え』
って、

お陰で先週1日中連れまわされちゃって・・・」

では、先週のアレは、浮気なんかではなかったのだ。

「園子さん、指輪^{ソレ}、はめてもらえますか？」

そう言った京極に、園子は両手を差し出す。

「ねえ、はめてもらえる？」

真さんが、どの指を想像して買ったのか、知りたい。
そんな想いをこめて見つめると、京極は一瞬ためらった後、
園子の右の薬指に指輪をはめる。
ぴったりだ。だけど

「あれ〜？お兄ちゃん、左手じゃなくていいの〜？」

丁度園子が思ったことを、蓮が口にする。

「な、蓮！」

頬を赤くした京極は妹の名前を叫ぶと、園子の方を見て言う。

「すみません、園子さん。」

自分にはまだ、園子さんのその指に指輪をはめるだけの力がありません。

「ただ、いつか必ずその指に指輪をはめてみせます！
それまで、待ってていただけますか・・・？」

ちよつとまで、これってもしかしくなくても

プロポーズ！？

内心の動揺を押し隠した園子は、いつもの様に強気で言う。

「早くしてくれないと待てなくなるからね！」

でも、

「待てなくなったら、私が真さんの指に指輪をはめるわよ!？」

だから、覚悟しといてね？真さん!と、園子はこの日一番の笑顔で笑った。

冬物語（後書き）

ああ、予想外に長くなりました。

それにしても蓮ちゃん、最後空気化・・・

京極の妹の名前は昔兄が空手を習ってた「錬心館」ってところから錬 蓮です。

兄に君づけするのは作者がそうだからです・・・

ではまた次回！

新一君のお料理修業（前書き）

今回は・・・うん。ギャグです。

またもやキャラ崩壊な工藤氏の話・・・

「幸せの音」で蘭が妊娠中、お料理を覚えた新一君。
その過程を書きたいと思います。

新一君のお料理修業

彼、工藤新一はガスコンロの前で呆然としていた。

その前にあるのはどこにでもあるような片手鍋。

だが、その鍋の中身は明らかに“どこにでもある”モノではなかった。

鍋の中身は到底食べ物とは思えない、真っ黒な物体。

さらに鍋からは黒い煙がもくもくと噴き出て、

よく火災警報器がならないな。というほどである。

「~~~~~はあ」

新一は、目の前の惨状にただため息をついた。

そもそもの始まりは、彼の妻、工藤蘭の妊娠が分かったことだ。

そして蘭はつわりに悩まされることとなった。

それじゃあ、蘭に無理をさせられない、と思った新一は

それまで、妻に任せっきりだった料理をしよう。と決意したのである。

じゃあまず、簡単な料理、お粥とかならできるだろ・・・

そんな風に軽く考えた新一は心配する妻を寝かせて、

自分は台所にたったのだが……

その結果が現在鍋に入ってる黒い塊である。

誰にでもわかる。これは人間、いや、生き物の食べる物ではない、と。

結局、その日の夕食は、蘭がつくった。

そして翌日。

新一は再び台所に立つ。

大鍋に大量の湯を沸かし、スパゲッティを投入。

そしてその結果は
どろどろのスパゲッティだった。

「俺はちゃんとこの袋のとおり茹でたぞ!？」

などと主張しているが、実際のところはどうか……

さらにまた翌日。

今日は蘭が食欲がない、と言ってるので果物を買ってきた。

果物なんて切るだけだから、カンタンだろ……

と余裕の表情でメロンをまな板にのせた新一は早速メロンを切ろうとする。

が・・・・・・・・

「あれ？」

意外と切りづらい。

なかなか切れないもので、さて、どうしたものか。と思案顔の新一は思いつく。

「そっか、スイカ割りと同じにすればいいんだ！」

スイカってウォーターメロンっていうもんな！と

新一は包丁を高く振り上げメロンに向かって振り下ろす・・・・！

ドッシャーン！ガラガラ・・・・

そんな音に驚いた蘭が寝室から飛び出して見たものは、ふつとんで壁にぶつかり潰れたメロンと、ふつとんだメロンが倒した調味料入れ。

そして、包丁を片手に呆然としている夫の姿だった。

それでも、新一はめげずに（懲りずにとも言う）

毎日料理に挑戦した。

後に彼は当時を振り返り、

「事件を解決するよりも、料理をする方が何倍も困難だった」

と述べる。

1月後、

新一はフライパンの前で感動にうち震えていた・・・

ようやく、焦がさずに、きれいな卵焼きを作ることになったのだ。
お米もいい感じに炊けてるし、今日は自分1人で全部ご飯つくったぞ。

と、上機嫌な新一は食卓の準備を進め、妻を呼ぶ。

「蘭！今日は俺が全部1人でつくったぞ！」

どうだ、とドヤ顔でテーブルをさす夫に、蘭は一言。

「新一、ご飯と卵焼きだけで食事しろと・・・？」

新一君のお料理修行はまだまだ続く・・・

新一君のお料理修業（後書き）

はい。明らかにふざけてますね・・・
ゴメンなさい

っていうかメロンの件、新一怖い！

ではまた次回もよろしくです！

幸せがおっこちてきた日（前書き）

新蘭出産話。

さてどうなることやら・・・

幸せがおっこちてきた日

「・・・・・・・・・・」

工藤新一は先ほどから病院の廊下を行ったり来たりしていた。
見かねた彼の母親、工藤有希子が口を開く。

「ねえ、ちよつと新ちゃん。落ち着いたら？
まるで檻の中のクマよそれじゃ・・・」

「だって母さん、蘭が」

そう、彼が先ほどからうろうろしている壁の向こうでは、
彼の妻、蘭がいて、そして

「大丈夫よ。蘭ちゃんは強い子だから、きっと丈夫な子を生むわ・・・
蘭ちゃん自身にも問題ないわよ！」

「でもなあ！」

気楽に構える母親に対し、これから父親となる息子は心配顔だ。

「まったく、新ちゃんったら、もうすぐお父さんになるとは思えな
いわねえ。」

「そんなんでこれからやってけるのかしら？」

「んなこと言ったって、心配なもんは心配なんだよ！
母さんはお気楽すぎるんだよ・・・」

「あら、あなたを生んだ母親の言葉が信じられないっていうの？
私が気楽に見えるのは、蘭ちゃんを信じてるからよ！
なのに夫である新ちゃんには信じてないのかしら？」

そういわれると、新一はぐうの音もでない。

「そりゃ、信じてるけどよ・・・」

そう呟くと、新一は扉を見つめる。

その扉のむこうには、彼の妻がいるはずだ

「はい、大きく息を吸って〜
お母さん、頑張って下さい！」

扉の向こうでは、蘭がたたかっていた。

子供を生むのは大変だと聞いていたが、まさかこんなにだなんて

それでも蘭は必死でたたかった。

なぜなら、彼女はまだ見ぬわが子をすでに愛していたから。

それから、どれぐらいが経ったか・・・

何時間も経ったようにも思えたし、数分と言われればそんな気がする。

そんな時、赤子の泣き声が部屋に響いた。

オギヤア　オギヤア・・・

「はい、工藤さん、元気な女の子ですよ!」

そう言つて、手渡された小さな命を、蘭は慎重に受け取る。

まだ目もつぶつてて、泣いてるだけだけど、

「かわいい・・・」

この子は私たちの幸せだ。と蘭はわが子をそつと胸に抱く。

新一はガチガチに緊張していた。

彼の手には、生まれたばかりのわが子。

いつものどうどうと推理を披露している時の姿からは、想像もできないほどの緊張っぷりだ。

そんな新一の姿をみて蘭はしょうがないわね、と微笑み
新一の手から子どもを受け取る。

「あらあら、新ちゃんだったらしょうがないわね
で？この子の名前はなんていうの？」

クスクス笑いながら訊く有希子に蘭が答える。

「りん、です。鈴^{すず}って書いてりん」

「あらゝかわいい名前ね！どっちが決めたの？蘭ちゃん？」

「はい。新一ったらなかなか決められなくて、私が」

「意味をきいてもいいかしら？」

「えつとですね、意味は・・・なんていうんでしょう？」

鈴^{すず}って“鈴を転がすよう”とか“鈴を張ったよう”とかって
キレイなものを形容する時に使うでしょう？

だからこの子にもそんな風になって欲しいなって、この漢字にした
んです。

そしたら新一が・・・」

「鈴^{すず}って名前にすると園子のヤツ想像しちゃうから
りん、にしたんだ」

「ってわけです」

最後の新一の言葉を蘭が締めくくると有希子が笑う。

「素敵な名前ね。安心して！」

私の孫なんだから絶対キレイになるわよ！」

「母さんの孫だからじゃなく、蘭の子どもだからキレイになるんだ！」

「ちょっと新一！」

「まあ、新ちゃんったら！母親の前でどつどつとノロケちゃってえ！」

午後の優しい陽の差し込む病室に、幸せな笑い声がこだまする。

今日、

若い工藤夫妻に、新たな家族ができた日

幸せがおっこちてきた日（後書き）

書いてて気づきました。

優作さん、不在・・・

まあ彼は忙しいってことで！

子供の名前はWISHO2様が考えて下さりました。
ありがとうございます！

ワッペン(前書き)

「おちゃわん」の後日談。

コナンが本当は仮面ヤイバーが好きではない、と気づいた蘭は・・・

ワッペン

コナン君はどうやら仮面ヤイバーが好きではないらしい・・・

蘭がそう気がついたのは、コナンに新しいおちゃわんを買ってやってから1週間ほど後だった。

ある日の夕食前、コナンが自分の新しいおちゃわんを見て、ため息をついてるのを見た蘭は、ようやく気付いた。

・・・もしかしたら、コナン君、仮面ヤイバーが嫌なのかな？

そうかもしれない。

そういえば、あの少年は少年探偵団こどもたちが

ヤイバーショーを嬉々として見ている時も

興味がなさそうにしていたし、

テレビで仮面ヤイバーをみても、面白くなさそうだった・・・

今まで、ヤイバーグッズを買ってあげた時、嬉しそうにしていたのは演技だったのかもしれない。

あの聡く幼い少年は、『居候』という己の立場を理解していて、それでわがままを言うてはいけない、と我慢しているのだ・・・

本当は好きでもないものを好きと言って・・・

さて、どうしようか。と蘭は思案する。

今まで買った物はしょうがないにせよ、これからもあの子供に演技をさせ続けるわけにはいかない。

コナン君の好きな物と言えば

考えている蘭の視界に1冊の本が入った。

シャーロック・ホームズ全集？

そうだ、あの子は自分の幼馴染のホームズ馬鹿に負けないホームズファンだった。と蘭は思い出す。

でも、ホームズグッズなんてそうないし・・・

もうすぐ衣がえで、秋用のパジャマを買ってやらねば、とは思っているが

今度こそ、ちゃんと喜んでもらいたい。

どうしよう、と悩んだ蘭は家をでて、その足で手芸屋にむかう。

それからインターネットで画像を検索し、何かを懸命に作り出す。

「できた！」

“何か”がやっとできた時にはすでにすっかり日が暮れていたので蘭は慌てて夕飯の支度にとりかかる。

翌日、米花デパートに出かけた蘭は子供用の、無地のシンプルなパジャマを買い、
前日につくったモノをそれに縫い付ける。

「はい。コナン君。新しいパジャマだよ！あけてみて？」

その日の夜、蘭は居候の少年にパジャマを手渡す。

「ありがとう、蘭ねえちゃん」

受け取ったコナンは（どうせまた仮面ヤイバーだろ？）
とか思いつつ包みを開ける。

と、でてきたのは

「・・・・・・・・・・」

胸元に誰が見ても手作りと分かる、ホームズのワッペンをつけた
無地のシンプルなパジャマ。

「どう？コナン君。気に入らなかった？」

蘭が心配そうにたずねる。

「コレ、蘭ねえちゃんが・・・・？」

「うん。コナン君、仮面ヤイバーあんまり好きじゃないみたいだから・・・」

それにホラ、コナン君ホームズ好きでしょ？

あんまり上手くできなかったんだけどどうかな・・・？」

無言のコナンに蘭がもしかしてきにいらなかったのでは、と不安になった時、

コナンが顔をあげる。

「ありがとう、蘭ねえちゃん！すごくうれしい！」

その顔に浮かぶのは、演技ではない、満面の笑み。

「ホント？気に入ってくれた？」

「うん。大事に着るね！」

笑顔で言った少年は「それに」と続ける。

「蘭ねえちゃんが、ボクのためにわざわざ作ってくれたことが一番うれしいんだ！！」

ワッペン(後書き)

なんか、今日暑くてボーっとしてるので、変なトコがあるかもです。

けんか中のメッセージ（前書き）

夫婦平和です。

服部は大阪府警に勤めています。

関西弁わからないので、変なところがあるかと・・・

けんか中のメッセージ

「アホオ・・・」

朝、台所で和葉がつぶやく。

「平次のあほ」

彼女は昨晚、夫である服部平次と喧嘩をしたのだ・・・

昨日、非番だった平次がどこかに連れてつてくれる。

という約束をしていたのだが、でかける直前、彼に電話がかかってきて、

「スマン、和葉。事件みたいや！」

と言が残すと和葉をおいて、家を飛び出てってしまった。

当然和葉はおもしろくなく、夜、帰ってきた夫に嫌味をいい、喧嘩になってしまったのだ。

「なんや、事件ばつかで・・・
それならアタシじゃなく事件と結婚すればよかったんや・・・」

平次のお弁当を作りながら、昨日の出来事を思い出し、
ムカムカしてきた和葉はある考えに行きついた。

弁当で復讐したる！

そう決意すると和葉は海苔とキッチンバサミを手に取ると、
白いご飯の上に海苔で言葉を書く。

すごく

きらい

や！！

ふん、平次のヤツ、弁当食べる時に皆に見られて恥かいてしまえ！

和葉は弁当を包むと平次の鞆にいれる。

そして、怒ってる態度をくずさず夫を仕事へ送り出す。

昼の1時頃

和葉の元に夫からメールがきた。

なんや、弁当の文句か？

職場の同僚に見られて恥でもかいたか？

と和葉がにんまりとメールを開くと・・・

あほ！いつまでも

いじけんな！

しゃーないやろ

とんでもない事件が起き
るのがわるいんやから！

なあ、平次。コレも縦に読んでええんやろか・・・？

すっかり機嫌のよくなった和葉は、夫の好物をつくるため、
近くのスーパーに買いものにかけた・・・

けんか中のメッセージ（後書き）

ちよつと強引すぎますね・・・^^；

彼の撮る写真(前書き)

「幸せがおっこちてきた日」続編
WISHO2様よりのリクエスト
生後1か月というリクでしたが、すみません
10か月くらいとさせていただきます
ご了承下さい>m(____)m<

彼の撮る写真

新一と蘭の間に長女、鈴りんが生まれてから10か月、
今日も工藤家には幼子のあどけない笑い声が響く

「りん、鈴ちゃん。
こっちむいて〜！」

そんな甘い声で呼びかけるのは、若き父親、新一。

彼は立派な一眼レフのカメラをわが子に向けてニコニコしている。
新一はわざわざこのために、このカメラを買ったのだ。

一方、カメラを向けられている鈴と言えば、
母親である蘭に抱っこされてご機嫌で、満面の笑みを浮かべて、父
親に手を振っている。

「新一、写真とれた？」

娘を腕に抱いたまま、蘭がたずねると

「あー撮れた撮れた。あーもう、なんでこんなに可愛いんだろ？」

答える新一はデレデレしている。

新一が出かけた後、ベビーベッドに鈴を寝かせた蘭はふっとため息をつく。

「まったくもう、新一ってば・・・」

新一は、鈴が生まれてからずっとこの調子なのだ。

蘭とて娘は可愛いし、本当に愛しく、大事に思ってる。しかし、ずっとこのままでは流石に面白くない。

「ホントに、新一ったらこの頃鈴ばっかで、私の事はどうなのよ・・・」

そりゃあ、大切にされてるのはわかるし、自分のことも想ってくれてるのは、わかる。だけど・・・

「もう、一番は私じゃないのかな・・・？」

ああ、子供に嫉妬するだなんて、私は重症かもしれない・・・

蘭がそう落ち込んでいると、新一が帰ってきた。

鈴の写真を写真屋で現像してきたのだ。

「蘭、鈴。ただいま」

「あ、おかえりなさい。今、鈴が寝たとこなの。どう？写真、うまく撮れてた？」

そつききながら蘭が新一の持つてる袋に手を伸ばすと何故かさつと背中に隠された。

「なによ、鈴の写真、私には見せたくないってワケ？」

「い、いや別にそうじゃなくて・・・」

「ならどうして隠すのよ？」

やっぱり、新一は鈴が一番大事なんだ、もう私はどうでもいいんだ！？」

そう言い捨て、蘭がかけだすと新一が追ってきて腕をつかむ。

「おい、まてよ蘭！」

「いや！はなして！」

「騒ぐなって、鈴が起きるだろ！？」

「ならはなしてよ！」

2人でもみ合ってるうちに、新一の手を袋がはなれる。

パッサ！

床に落ちた袋はそのまま中身をばらまける。

「「あっ！」」

ばらまかれた写真は

鈴、鈴、蘭、鈴、蘭、蘭、蘭、鈴・・・・

「なによコレ！？鈴の写真ばっか撮ってるかと思ったら・・・」

鈴と同じくらい、蘭の写真もある。

どうして、と尋ねる蘭に、新一は頬を掻きながら答える。

「いや、だって、鈴も可愛かったけど。その・・・」

鈴を抱く蘭があんまり綺麗だからさ、と新一がつぶやく。

「なっ・・・／／／／／」

突然のことに蘭は真っ赤になる。

そんな蘭に新一はさらに言う。

「あとさ、鈴には悪いけど、俺の1番は蘭だから」

「私も・・・」

「ん？」

「私も、鈴には悪いけど、新一が1番だから」

そう言った蘭は鈴の寝ているベッドに近づき、その寝顔をみる。

「でも、これじゃあ鈴がかわいそうね・・・」

そう悲しげな顔をする蘭に、新一は言う。

「大丈夫さ、きっと鈴にもいつか現れるさ、
鈴のこと、いつも1番に想ってくれるヤツが・・・」

「そう、ね。きっとそうよね!」

そう同調しながら蘭は思う。

そんな人が現れたら、また新一が大変かもね・・・

彼の撮る写真（後書き）

あれ？10か月じゃなくてもよかったかも？
でも、やっぱり手を振るのってそれくらいだね？

作者は週一で保育園でバイトしてるのですが、
そこで見てる子が、だいたい10か月でバイバイしてたから
多分あってます。はい。

次回もよろしくです！

豪雨（前書き）

リクエストの前に、コナン死ネタで・・・
苦手な方はback please！

豪雨

「はあ、はあっ……」

コナンは地面に座り込んだ。

パシャリ、と音がする。下は水たまりだ。

でも、もうそんなこと、気にする必要のないくらい、小さな体は濡れ、冷え切っていた

その腹部からは、止まることなく赤い、命の水が、あふれ出ていた

組織のアジトがわかったのは、つい1週間前の事。

FBIの反対を押し切ったコナンは、組織壊滅の作戦に同行することとなった。

コナンは蘭たちに「海外で両親と暮らすことになった」

とつげ、探偵事務所を後にし、そして今日、組織のアジトに向かった。

激戦の中、コナンはジンと対することとなった。

ジンは冷たい銃口を、まっすぐコナンにむける。

その姿には隙がなかった。麻酔銃を撃てるような隙が……

コナンの手にも、FBIから持たされた拳銃があった。

しかし、コナンにはどうしても、撃つことができなかった。

例え、相手が何人も人を殺してきたような人間でも。

例え、自分の身を守るためだとしても。

拳銃は、人殺しの道具。

それを相手にむけて撃った時点で、人殺しと同じになってしまう。それが、相手を傷つけた時点で・・・

例外はある。

前にコナンが蘭を守るために蘭を撃ったような時。

しかし、今回は全く違う。

このまま撃ったら、間違いなく殺人者と同じになってしまう。探偵として、人間として、それだけはできなかった。ただこのままではジンに撃たれる

その迷いがコナンを捕えている間に、ジンは容赦なく発砲してきた。その弾は狙いをそらすことなく、コナンの腹部に命中する。

「ぐっ」

うめき声をあげたコナンをジンは嘲笑い、背を向け立ち去ろうとした。

まるで、無力な子猫に背を向けても、何も問題ない、と言うかのよう。

実際、今のコナンは無力だった。

ジンの放った弾はコナンの胃を貫通していた。放っておいても、すぐに息絶える。

そんなものに何時までもかまってる必要はない、そう背を向けたジンに、

コナンは力を振り絞って麻酔銃をうちこんだ。

バタリ、と倒れたジンを確認したコナンは最後の力をふりしぼり、その場を後にする。このままここにいたら、時期にFBIの誰かが気付いて自分を病院に運ぼうとするだろう。だけど、この状況で1人でも抜けたら、それだけで戦況はひっくりかえる。

それに、とコナンは思う。

今から病院にむかっても、自分は助からないならば誰にも迷惑をかけない所にいこう。そう思い、組織のアジトのビルから外に出る。

外は南国のスコールかと思まがうほどの、豪雨だった。激しく降る雨粒は、小さな体から体温を容赦なく奪う。足の力が抜け、コナンはその場に座り込む。

雨はますます強くなっていった。

腹部からどれほどの量の血が流れたか、もうわからない。

だんだんとかすむ視界のなか、コナンの脳裏には1人の少女の顔が、はつきりと浮かんでくる。

「蘭・・・・・・・・」

彼女は今どうしているだろうか、笑っているだろうか？

そんな簡単なことすら、もう、考えられない。

「ごめん、な・・・・・・・・」

そんな小さな声と共に、コナンの体から力が抜ける

雨はただ、強くなるばかりだった

おまじない(前書き)

こんにちは！

週間ユニークアクセスを見てびっくりしてます青葉です！

まさかあんなにいくとは・・・><；

みなさん、ありがとうございます>m(_____)m<

WISH02様のリクより、コ蘭でコナンが正体をばらします。

おまじない

夕方の、毛利探偵事務所

事務所の主である小五郎は今、麻雀に出かけている。

出かける時のあの様子では、夜遅くまで帰ってこないだろう。

西日がさす、事務所では、小五郎の娘、蘭と居候の江戸川コナンが向かい合っている。

「どうしたの？コナン君。大事な話って何？」

蘭が事務所で留守番をしていると、なにやら思いつめた様子のコナンが

「大事な話がある」と入ってきたのだ。

しばしうつむき、沈黙していたコナンは顔をあげ、口を開く

「あのさ、蘭。聞いて欲しい事があるんだ」

「こあら！『蘭』じゃなくて『蘭ねえちゃん』でしょ！

まったく、コナン君たら、年上を呼び捨てにしちゃだめよ！」

そう言うと、コナンの額に軽く拳骨をぶつけた蘭に対し、コナンはなおも続ける。

「ちがうんだ、蘭！聞いてくれ！

俺は、俺は江戸川コナンでも、小学１年生でもない！

俺は本当の俺の正体は……！工藤新一なんだ！

お前の幼馴染の、高校２年生の工藤新一なんだよ！」

最後まで、一気にコナンが言うと、返ってきたのは沈黙だった。

「蘭……？」

やっぱり怒ってるよな、今まで散々騙してきたんだし……

そうコナン、いや、新一が自嘲ぎみに思っていると、蘭が動く気配がした。

新一が再び顔を上げ、蘭の方を見ると、丁度、蘭が手を振り上げたところだった。

なぐられる！

覚悟はしていたものの、思わず新一が目を閉じる。

ふわり

いつまでたっても衝撃が来ないので、新一がそつと目を開くと……

蘭の頭がすぐそばにあった。

蘭は新一を抱きしめていたのだ。

「やっと……」

震える唇で、蘭が言葉をつむぐ。

「やっと、言ってくれたね。私、新一が言ってくれるの、ずっと待ってたんだよ？」

「蘭……」

「ねえ、新一はどうしてこんなに小さくなっちゃったの？
今まで、教えてくれなかった事と関係あるんだよね？
どうして、今教えてくれたの？」

立て続けにきた蘭の疑問に、新一は一つ一つ、答えていった。
あの日、トロピカルランドで毒薬を飲まされたこと、
目が覚めたら、体が縮んでいたこと。

そして……

「蘭、俺はこれから組織ヤッラと決着をつけに行く。

だから行く前に、お前にだけは真実を話しておきたかったんだ……

」

蘭の顔が、不安にくもる。

「それって危ないんじゃないの？
どうしてもいかなきゃダメなの？」

「ああ。危険なのは承知の上さ。
それにこれは俺の事件だ。最後まで、解く。

あと、心配すんな！絶対に生きて帰ってくるから……！」

そうきつぱりと言い切ると新一は蘭の瞳を真っすぐに見つめる。

その瞳をみた蘭は悟る。

これは、引き留めても、無駄だ。彼は絶対に行く。と

そして蘭は、自分を見つめ続ける少年に顔を近づけていった。

蘭が唐突に顔を近づけてきたので焦った新一は、思わず目を閉じる。
と、

ちゅっ、と額に柔らかい感触。

「へっ？」

新一の額に口づけた蘭は、相手を見据えていう。

「今のは、おまじないよ・・・」

「おまじない？」

「そ、新一が、無事に帰って来るように、おまじない。

新一が、さっき期待したようなのは、帰ってきたら、する。

どう？何が何でも帰って来る気になったでしょ？」

「な、ちゅっ、期待って・・・！俺は別にそんな！」

動揺し、赤くなった新一は、やがて観念して口を開く。

「わかった。絶対、帰ってくる。

だから、もう少しだけ待っていてくれるか？」

「いやだよ。ホントは待ちたくない。

だけど、相手が新一なら待ってる。いつまでも待ってるから・・・

」

そんな蘭に、新一は感謝の笑みを浮かべて

「ありがとう、蘭。じゃあ俺、行ってくる！」

そして新一は探偵事務所を後にする。

「蘭！絶対帰ってくるから！

だから、帰ってきたら“期待”、叶えてくれよな！」

その言葉と共に、新一は走り出す。

最後の決着をつけに・・・

おまじない（後書き）

なんかよくわからん文になった気が・・・

あゝどうしよう。歩美ちゃんの話の続きが思い浮かばない><

はじめましてのあいさつ（前書き）

暑いですね（＾－＾）

今回はちび新蘭で最初の出会いです。
短いです。

はじめましてのあいさつ

その日、毛利蘭は母親に連れられて訪れた工藤邸で初めて同じ年頃の男の子に出会った。

「はじめまして、もういらっしゃいます。よろしくね!」

「おれはくどうしんいち。よろしくな!」

子供2人があいさつをすませたのを見届けると、母親たちは

「じゃあ、あとは2人でできとーに遊んでね」

「新一くん、蘭のことよろしくね」

と2人でおしゃべりを始めてしまった。

残された2人はそれじゃあ、と庭で遊び始める。

「ねえ、しんいちくんはいつもなにしてあそんでるの?」

「たんでーゴツコ」

「たんでーゴツコ?なにをするの?」

訊いてきた蘭に、新一は本を1冊見せて言う。

「この本にかいてあるようなじけんがおこったとして、

そのじけんをたんでい役になってとくんだ」

「ふーん。おもしろいの？」

「あつたりまえだろ！？ たんていはすごいんだ！」

「じゃあ、わたしもやる！」

その後2人は“たんてーゴツコ”と称して、庭中を駆け回った。

夕方、英理と有希子の長すぎるおしゃべりが終わり、

「蘭、かえるわよ！」

と英理の声がかかった時、蘭は新一に言う。

「今日はたのしかったよ！ しんいちくん、ありがとう！」

「あ、ああ」

「ねえ、しんいちくんはわたしのこと名前でもんでくれないの？」

「いや、そんなことないぜ、らん！」

新一のことばに蘭は首をかしげる

「らん？」

「あ、いや・・・らん、ちゃん」

あわてて言い直した新一に蘭は首を振ってこたえる。

「らん”でいいよ！だからわたしも“しんいち”ってよぶ！」

「ああ、わかった。じゃあな、らん！」

「うん、またねしんいち！」

そう言って母親の元へかけだそうとした蘭は

「あ、そうだ」

と振り返ると、新一のほっぺに『ちゅっ』とした。

「え！？なにするんだやらん！」

赤くなつてうるたえる新一に蘭はにっこり笑つて

「おともだちのしるしだよ！だってわたしとしんいちはおともだちでしょ？」

そう告げると、まだ赤いままの新一に

「しんいちは何？わたしのこと、おともだちとおもってくれてないの？」

そう悲しげな目をむけるので、新一は頭をかきむしって

「あゝもう、んなわけないだろ！？」

大声でそう言つと、よりいっそう赤くなりながら蘭のほっぺに『ちゅっ』とする。

すると蘭はますます笑顔になって新一に抱きつく。

「しんいち、だ〜いすき！」

彼女がその言葉の意味を、「好き」の意味をちゃんと理解するようになるのは
まだまだ先の事。

はじめましてのあいさつ（後書き）

なんだか大分はしょった気がする・・・

はじまり（前書き）

「おまじない」の続編。
新一が帰って来ます。

はじまり

〔帝丹高校〕

もうすぐ5限目が始まるかという頃、園子は振り返り、後ろの席に座る親友に声をかける。

「ねえ、蘭、最近新一君と連絡とってないの？」

「えっ？」

「『えっ？』じゃないわよ！新一君よ！あんたたち、今どうなったんのよ！？」

大きな声で聞いてくる園子に、蘭は困ったように答える。

「どう、って、別に・・・ここ2カ月くらい連絡ないし・・・」

コナンが正体を明かし、組織を潰しにいつてからもう2か月がたっている。

そしてその間、1度も連絡はない。

「はあ！？2か月も！？あんの馬鹿ナニやってんのよ！

もう蘭、あんな推理オタク、忘れちゃいなさいよ。

ホラ、あんた昨日、こないだ転校してきた菊池くんに告られてたじゃない？

カレと付き合った方が幸せなんじゃない！？」

「園子・・・私は別に・・・」

そう、蘭は昨日の放課後、1週間ほど前に転校してきた少年に告白されてたのだ。

もちろん断ったのだが、相手はあきらめる素振りはない。現に今も、

「あ、毛利さん！次の数学のプリント、やってきた？
オレ、今日あたるんだよね」

そう蘭に話しかけながら隣の席 新一の席なのだが、に腰をかける。

「あ、そこはダメ！座らないで！新一の席なんだから！」

いきなり声を上げた蘭に驚きながらも菊池は口を開く。

「新一、って工藤新一だよな？ずっと休学してるっていう。
毛利さん、ソイツから2か月も連絡ないんでしょ？
そんな薄情なヤツの席なんかどうだっていいじゃん」

「ちょっとアンタ！人の話、盗み聞きしてんじゃ・・・」

パンツ！！

園子が菊池に文句を言おうとした瞬間、鋭い音が教室に響いた。
蘭が菊池を平手打ちしたのだ。

「も、毛利さん？」

「新一のこと、そんな風に言わないで！新一の事何も知らないくせに、

薄情者とか、そんなヤツとか言わないでよー!!」

蘭のあまりの剣幕に菊池が黙り込む。

教室中も、普段は温厚な蘭の変化にとまどっている。

「ちょ、蘭、落ち着きなよ・・・」

園子が蘭をなだめ、荒い息をついた蘭が、ふ、と窓の外に目をやる。
と、

「新一!？」

そう叫ぶと蘭は、教室をとび出して行った。

「工藤!？」

「え、ウソ？」

「工藤君!？」

驚いた2年B組の生徒たちが窓にはりつき外を確認すると、そこには確かに、彼らの級友、工藤新一が校門から歩いてくるのが見えた。

歩いてくる新一が丁度、校庭の真ん中あたりに来たとき、蘭が駆け寄った。

「新一！」

「蘭！」

「夢じゃないよね？ホントに、ホントに、新一なんだよね！？」

「バーロー、当たり前だろ？ただいま、蘭。またせたな！」

「おかえり、新一！」

夢じゃなかった、と安心した蘭は新一に抱きつく。

新一も、蘭を抱き返す。と、その耳にささやく。

「帰ってきたら、俺の期待、叶えてくれるんだったよな？」

「な・・・！？」

瞬時に赤くなつた蘭は、それでもうなずく。

「う、うん」

そしてそのまま目を閉じると、新一の“期待”にこたえる。重なつた唇を離すと、あらためて言う。

「新一！お帰りなさい！」

「ただいま！蘭！」

と、2人が見つめあっていると・・・

「おうついにひつついたぞ、あの2人！」

「いや、いいモンみたわあ」

「帝丹高校の名物夫婦、復活だな！」

「・・・・・・・・」

新一と蘭は黙って顔を見合わせる。

忘れていたが、ココは校庭のど真ん中。

つまり、2人のラブシーンは帝丹高校の生徒の皆様にしっかり、ばつちり、見られていたのだ。

校舎から降ってくる、冷やかしの嵐の中、園子がきつぱりと宣言する。

「・・・という訳で今日、ここで、帝丹高校の名物夫婦、あらたな始まりよ！」

そして園子は振り返ると、頬に手形をつけたまま呆然としている菊

池少年に告げる。

「まあそう言う訳だから、蘭はあきらめることね!」

それを受けた菊池少年は

「そんなもん、アレ見りゃ嫌でもわかるっつーの・・・」

ふて腐れた様につぶやいたのであった。

はじまり（後書き）

この話は、続きはありませんね。

多分、続き書いたら他のと同じになっちゃう・・・

にしても、気の毒ですねー菊池少年。（お前のせいだろ・・・）

次回はちび新蘭かな？

1等賞（前書き）

ちび新蘭で、運動会
どうぞ！

1等賞

「う、ヒック・・ぐすん・・うう」

人気がない、体育館脇に少女の泣き声がこだまする。

耳を澄ませてみると、校庭の方からガヤガヤとにぎやかな声が聞こえてくる。

今日は、帝丹小学校の運動会だ。

そんな時に、なぜ少女

蘭が泣いているのかというと、理

由は簡単である。

先ほど行われた「3年生女子100M走」にて、

スタート時はトップだった蘭は、半分ほど走ったところで転んでしまったのだ。

結果、1位は返上、ビリつけになってしまった。

ショックを受けた蘭はそのままコケタ時のケガと手当もせず、

その後に控えていた「3年生男子100M走」で走る幼馴染の様子も見ずに今、ここにいます。

どうしよう、1等の赤いリボン、もらえなかった。

運動会の競技において、1位をとった生徒に与えられる赤いリボンは子供たちにとって自慢すべきものだった。

もっとも、

去年もその前も、赤いリボンをお母さんにあげてたの

に・・・

蘭は別に自慢の為にそのリボンが欲しかったわけではない。
1年生の頃、家を出て行ってしまった母親の誕生日に
そのリボンをプレゼントしたかったのだ。

これじゃあお母さん、喜んでくれないよ。

そしたらお母さんも当分帰ってこないかもしれない、とますます蘭
が涙ぐんでいると、
目の前に人の気配を感じた。

「・・・・・・・・・・？」

今はまだ運動会中なのに誰がこんなところに来たんだろう？
と不思議に思い顔をあげると、そこにいたのは・・・・

「まったく、やっぱり泣いてたな・・・」

「新一！」

そう、彼女の幼馴染の少年、工藤新一だった。
彼の胸元には、1等賞の証である赤いリボンがついていた。

「新一、なんでこんなところに・・・・？」

「お前の姿がみえないから探しに来たんだよ！
どーせ、人気のない所で泣いてると思ったからよ！
そんなに1位じゃないのがいやだったか？」

「ちがうもん！」

新一の言葉に蘭は猛然と反発する。

「ビリだったのが嫌なんじゃないもん！ただ、ただ……
お母さんに赤いリボンプレゼントできなかったから……」

「……………」

言ってる途中でまた悲しくなってきた、涙をにじませた蘭を
新一は黙って見つめると、おもむろに自分の胸元のリボンを外しだ
した。

「ちょ、新一！？」

戸惑う蘭をよそに新一は自分のリボンを蘭の胸元に付け替えた。

「よし、これでオッケー！」

満足そうに手をパンパンとたたき新一に蘭はくいかかる。

「ねえ新一！何なのよコレ！私の事バカにしてんの！？
そんな、新一のリボンなんて貰ったってうれしくない！
お母さんにだって、あげられない！」

そう声を荒げる蘭に新一は言う。

「べつにおめーのことバカになんてしてねーよ……」

「じゃあなんなのよ！私はビリだったんだから、

赤いリボンをもらえるわけないでしょ！」

「ソレは走った順位にあげたわけじゃない」

「えっ？」

「走った順位だったら確かにお前はビリだぞ？
だけど、お前はこけても最後まで頑張つて走り切っただろ？
だからソレはその頑張りに対してつけたんだ」

「頑張り・・・？」

「ああ、お前は頑張りは1等賞だ！
だからそのリボンを貰う権利があるんだ」

「新一・・・ありがとう！」

蘭はそう言つと新一に抱きつく。

「わ、なんだよ！はなせつたら！ほら、運動場に戻るぞ！」

「うん！」

元氣よくうなずいた蘭は新一と運動場にむかう。
そこでふと思いたった。

「ねえ、新一。私にリボンあげちゃったら、新一のなくなっちゃう
けどよかったの？」

そんな蘭の問いかけに、新一は何故か目をそらして答える。

「いいんだよ、別に。俺が欲しかったのは赤いリボンじゃないし・・・」

「え？何？最後のほう聞こえなかった！」

「あゝもう、別になんも言ってるよ！さっさともどるぞ！」

そうかけだした新一を蘭は慌てて追う。

「あー待ってよ、新一ー！」

その顔にさっきまでの涙はない。
それを見た新一は満足げに笑う。

「俺が欲しかったのは蘭^{ンレ}の笑顔だよ・・・」

名前で呼んで？　くC&Aく（前書き）

コナンと哀、2人がお互いを下の名前で呼びます。
でもコ哀ではない、かな？

名前で呼んで？　くC&Aく

くとある朝、とある旅館の食堂でく

朝、目を覚ました哀は自分の部屋を出て、階段を降り、食堂に向かう。

今朝目を覚ましたのは、何時もの、彼女が居候させてもらっている阿笠邸ではなく

×旅館、という小さな旅館だ。

昨日、たまには星でも見ようかという阿笠博士の提案でココにきた。あまりにも急すぎたため少年探偵団の子供3人はおらず、今回は、阿笠博士、哀、そして江戸川コナンだけの外出である。

哀が食堂に着くと、もうそこにはすでに、メガネの少年、江戸川コナンが腰をかけていた。

哀はコナンの隣のイスをひき、腰かけると口を開く。

「おはよう。こ、コナン」

「あ、ああ。おはよう。・・・哀」

そんな挨拶を交わしあう2人はお互いの目を見ず、とても下の名前で呼ぶ仲には見えない。

それもそのはず、普段はこの2人、「灰原」「江戸川君」と言った風に

互いを名字で呼び合ってるのだ。

そんな2人が今、下の名前で呼び合っているのは1つの理由がある。

それは昨日、この旅館に着いた時までさかのぼる。

「1日前、旅館の受付で」

「大人1名にお子様が2名ですね。
申し訳ありませんがただ今3人部屋が空きがありません。
どうなさいますか？」

受付の女性の言葉に阿笠博士は少し困ったように後ろをむく。
彼の視線の先には“見た目”小学1年生の男女が2人。

しかし彼らは“中身”17歳と18歳（自己申告）である。

彼らを2人部屋に入れて、自分が1人部屋。といていいのだろうか？

しかし、男2人、女1人になると今度はそれも心配だ。

“見た目”小学生の少女が1人部屋に泊まるのはやはり、いただけ
ない。

さて、どうしたものか？と博士が頭を抱えていると
問題の2人が話し始めた。

「おい、灰原、お前、どうする？」

「“どう”って江戸川君。貴方私と同室になる気？」

「いや、別に・・・」

ただおめーを1人部屋にするわけにもいかないだろ？」

と、この2人の会話を聞いた受付の女性従業員が口を開く。

「おやまあ、最近の子はずいぶん大人びてるんだねえ！

そんなに小さいのにお互いを名前じゃなくて名字で呼ぶのかい？

ちよつと子供っぽさが足りないんじゃないの？

ほら、下の名前で呼び合ってごらんよ！」

「・・・・・・・・・・」

コナンと哀、2人は無言で互いの顔を見やる。

そうか？常々「子供っぽいしぐさ」をそれなりに心掛けてはいたが、足りなかったのだろうか？

米花町^{普段}ならば、いい。

皆慣れているから。

しかしここは米花町ではない。

ここではこのままだと「子供っぽくない子供」^{いつも}と思われてしまう。

米花町ではそんな事気にも留めないけど、

他所では流石に少し気になる。

だから2人は「子供っぽさ」を出すために

「あ、哀」

「こ・・・・・・・・コナン」

この場ではお互いを名前で呼ぶことにする。

それを見た従業員の女性は満足そうにうなずく。

「そうそう、やっぱり子供はそうじゃなくちゃ！」

結局、博士と哀が2人部屋、コナンが1人部屋を使うこととなった。若干、その女性に不審がられたが・・・

「なあ、哀、博士は？」

「まだ高イビキよ、えど・・・コナン」

互いを下の名前で呼び始めてから、一晩経つがまだ慣れない。

しかし旅館「リ」ではソレを続けなければならないだろう。

「「はあ~~~~」」

博士が起きてきて、帰るまでコレが続くのか、と2人は盛大なため息をついた。

なれないことは、
するもんじゃない。

名前で呼んで？　くC&Aく（後書き）

次はコレの高佐バージョンで！

名前で呼んで？　く W & a m p ・ M く　由美の作戦（前書き）

名前で呼んで？の高佐版

長くなりそうなので、2つに分けます。

名前で呼んで？　く W & a m p ・ M く　由美の作戦

く 警視庁にて く

「佐藤さん、コレ、この間の事件の資料です」

「ありがとう。助かるわ、高木君」

いつもの、いつも通りの、上司と部下の何気ない会話。

「・・・・・・・・」

そしてその会話を、扉の向こうで聞いている人影が2つ。

「まあゝつたく、美和子も高木君もいつまでたってもお互いを『高木君』

『佐藤さん』って名字＋君・さんづけで呼んじやって、いい加減名前で呼び合えって！ねえ？千葉君？」

「ちよつと由美さん！なんで僕までこんな所で聴き耳をたてなきやいけないんですか！？」

「あら、丁度通りかかったんだからいいじゃない」

人影の1つは、交通課の宮本由美。

そしてもう1つは扉の向こうにいる高木・佐藤両刑事と同じ捜査1課の千葉刑事である。

由美に腕をつかまれたまま、千葉が抗議する。

「だいたいあの2人は一応上司と部下なんですよ!？」
“君”とか“さん”とかつけてもいいじゃないですか!」

だが由美は千葉の言葉には耳を貸さない。

「あまいわね、千葉君。あの2人はもうすでにキスまで済ませてるのよ？」

いい加減、『涉?』『美和子?』とかって呼び合っても何ら問題はないんじゃない?」

「・・・でも、今は仕事ですし・・・」

「じゃあ、勤務時間以外にお互いをどう呼んでるか、確かめてみましょう!」?

じゃああとでね、と自分の職場に戻っていった由美の背中に千葉が問いかける。

「ちよつと、『あとでね』って僕もいくんですか?由美さん!」

当然、由美は戻ってこなかった。

〽夜、警視庁の駐車場にて〽

「今日も1日お疲れ様、高木君」

「あ、佐藤さんもお疲れ様です。あの、佐藤さん。
この間ウマイラーメン屋見つけたんですけど、一緒にいきませんか？」

「行く行く！高木君、案内して！」

と、仲良く会話する2人をコンクリートの柱の影から覗く人影が、
またもや2つ。

「ほおらご覧なさい！千葉君、あの2人はやっぱり下の名前で呼び合っていないじゃない！」

「はあ」

元気いっぱい由美に、その由美に無理やりひっぱられてここにきた千葉がやる気なげに相槌をうつ。

まったく、高木のヤツがちゃんとしなからこんな目にあつたじゃないか

千葉がそう投げやりに考えていると、由美の声が届く。

「よし！こうなったら『高木・佐藤の2人を名前で呼ばせ合おう作戦』の開始よ！」

「はあー！？」

「もちろん、千葉君も協力するのよ？」

その言葉に千葉は誓う。

もうなんでもいいから、速やかにあの2人に名前で呼び合ってもらおう！

そして自分の平和をとりもどすのだ！

と。

そして翌日、2人は早速“作戦”にうつる。

名前で呼んで？　　く W & a m p ・ M く　　由美の作戦（後書き）

この続きは明日には投稿しようかと思っています。

名前で呼んで？　く W & a m p ・ M く　千葉の作戦（前書き）

昨日の続きです。

今日もあつかったですね・・・

名前で呼んで？　　く W & a m p ・ M く　　千葉の作戦

く翌日、昼く

由美と千葉は早速行動に移った。

この2人の“作戦”は極めて単純だった。

「他のヤツが名前で呼べば自分たちもそうするだろ」という安易すぎる考えの下、この作戦は実行される。

「じゃあ、千葉君。高木君の方、ヨロシクね。

私は美和子のヤツンとこ行ってくるから！」

「はあ・・・」

なぜ自分がこんなことやらなきゃならんのだ、という不満を押し隠し、千葉は高木の元へむかう。

ようは佐藤刑事のことを「美和子さん（ちゃん）」とよんでるところを聞かせればいいんだろ・・・

そんな刑事は警視庁こくに大勢いる。

何せ、佐藤刑事は警視庁のアイドルなのだから。

「おい、高木。昼飯食べに行こう」

千葉がそう誘うと、高木刑事はすぐにきた。

「ああ。さつき由美さんが佐藤さんを連れてったし、今日は千葉おまえと食べるか・・・」

そんな高木刑事を連れて、千葉はすぐ近くのファミレスへむかう。そこは、よく警視庁の刑事達が利用しているところだ。

昼食後、高木刑事は黙ったままで考え込んでいた。

千葉が連れていったファミレスには、やはり「佐藤美和子絶対防衛線イン」の面々がいて、

佐藤刑事の話をしていた。

呼び方は「美和子ちゃん」

それを聞いた高木刑事は「自分も佐藤さんのこと、名前で呼んでいいか？」と

先ほどから考え込んでいるのである。

それを見た千葉は「後は高木こいつが自分でどうにかするだろう」と結論付ける。

一方由美は

「大学の時の彼氏、裕也って言うんだけどさあ。『由美は賑やかで退屈しない』

って言われたのよ！？ちょっとレディに対して失礼だと思わない！？だいたいね、裕也のヤツはいつも・・・」

昼食中、話したくもない元カレの話を佐藤相手に延々と話していた。
さあ、美和子。ここまでやったんだから、そろそろ高木君の事名前
で呼びなさい！！

最後にそう念を送ると、自分の職場に戻っていった。
佐藤刑事もまた、なにか考え込んでいるようだった・・・

〽夜、勤務終了後〽

いつもの様に佐藤と高木は2人で、車の傍でしゃべっていた。

「今日も1日お疲れ様でした。・・・・・・佐藤、さん」

うわゝ、「美和子さん」って呼びたいのに呼べないゝ！

と高木が内心、頭を抱えていると

「なんか、今日は少し様子が変じゃない？
それとも、私と話したくないのかしら・・・？」

佐藤の言葉がなげかけられる。

「そんなわけじゃないですか！……佐藤さん！」

慌てる高木の様子を見た佐藤はふと思ったつ。

もしかしたら、彼も私と同じこと考えてたりして、ね。

目の前にいる相手を名字ではなく、名前で呼びたい、呼んで欲しい

それは、由美の話を聞いてから佐藤がずっと思っていたことだ。

ちよっち、呼んでみるか

覚悟を決めた佐藤は、息を吸い込み、口を開く。

「渉」

「へっ！？」

目の前の先輩刑事の口からでた単語にキョトン、とする高木に佐藤はさらに言う。

「今日から私、貴方の事『渉』って呼ぶから。いいわよね？」

そんな佐藤の言葉に高木は顔を赤らめ、

「じゃあ僕も」

「何？」

「僕も佐藤さんのこと、『美和子さん』って呼んでもいいですか？」

ああ、やっぱり彼も同じことを考えていたのね。

ふっ、と顔をほころばせた佐藤は、相手に告げる。

「ダメよ」

「えっ」

一瞬で悲しそうな顔になった高木に更に言葉を重ねる。

「私を呼ぶなら『美和子』にしなさい。いいわね！？涉！」

今度は目をパチクリとさせた高木は、嬉しそうに言う。

「はい。わかりました！美和子！」

そんな2人をまたもや柱の影から盗み見……いや、見守る人物が2人。

「いやあ、作戦大成功ね 千葉君！」

「って、なんで俺がここまでつきあわなきゃいけないんですか？」

由美さん！」

由美に文句を言った千葉は心の中で堅く誓う。

今度絶対、高木に夕飯おごらせてやる！！

名前で呼んで？　く W & a m p ・ M く　千葉の作戦（後書き）

なんか話ぐちゃぐちゃになっちゃったなあ・・・

あ、由美さんの元カレの名前はテキトーにつけました。

ねがいごと（前書き）

リクで新一と蘭が娘の鈴と星を見に行く話。
ごめんなさい、ラブ要素少ないです。
鈴ちゃんは4、5歳くらいかな？

ねがい」と

ボタン

夜の闇に、車のドアを閉じる音が響く。

「着いたぞ。暗いから足下に気をつけろ」

ここは人口の明かりのない、暗い場所。

ボーっとして歩くと転んでしまう。

車の助手席から降りた蘭が、後部座席にまわって娘の鈴^{りん}を抱きあげ
る。
が、

「おかあさん、りん、一人で歩ける」

「でも暗いから危ないわよ。転んじゃうわよ?」

「だいじょうぶだもん!りん、そんなにドジじゃないから!」

と、蘭の腕からぴょんつと飛び降りた。

「あ、ちよつと鈴!」

蘭が慌てるが、

「大丈夫さ、蘭。行こう」

新一はあつさりと言い、蘭の手をとる。

それを見た鈴が、新一の手をつかむ。

「りんもおとうさんと手、つなぐ！」

今日は親子3人で天体観測だ。

「あの赤い星が1等星のアンタレス。さそり座の心臓なんだ。アンタレスっていうのはアンチ・アレス、つまり“火星に対抗するもの”って言葉からきてるんだ。」

新一が、空を指さしながら蘭と鈴に講釈する。

「さそり座？」

鈴の言葉に新一はさらに言う。

「そう、さそり座の神話って知ってるか？オリオンっていう乱暴者の巨人がいてな、それに困った大地の女神のガイアがオリオンの元にサソリを送りこんで・・・」

と、そこで新一は言葉をきった。

蘭がものすごい形相でこちらをにらんでるのに気づいたのだ。

「し・ん・い・ち？」

「はい？」

地獄の底から響くような低い声の蘭に新一は硬直しながら返事をする。

そんな新一にニツコリ笑って蘭は言う。

「鈴にそーゆー物騒いじやな話はしなくていいからね？」

「ハイ・・・」

そこで新一は別の星座に話をきりかえる。

「よし、じゃあさそり座のすぐ傍のいて座だ。コレは北斗七星を小さくしたような“南斗六星”が目印なんだ。ホラ、あそこ」

わかるか？と指さしながら続ける。

「いて座はケンタウロスって言って、半分馬で半分人間の生き物が、弓を引く姿だ。この星座の話も有名でな、このケンタウロス、ケイロンって名前んだけど、そいつと師弟関係にあるヘラクレスが放った毒矢が・・・」

またもや新一の言葉が途切れる。

よくみると蘭が拳を握り締めている。

まるで、それ以上その話続けたら殴る、といってるかのように。

「おとうさん？」

話の途中で口を閉じた父親に鈴が呼びかける。

ハツとした新一はまた慌てて、別の方向を指す。

「よし、じゃあ夏の大三角だ。コレはその名のとおり、一等星を3つ、つないだ大きな三角形で真ん中には天の川が流れてる」

アレとアレと、アレだよ。と新一はアルタイル、ベガ、デネブの順に指していき、蘭と鈴はその指先をおう。

「アルタイルはわし座の一等星で、牽牛星、つまり七夕の彦星だな。そんで、ベガはこと座の零等星。これも七夕の星で、織姫星。最後は、はくちょう座のデネブ。白鳥のシッポに当たるんだ」

そこまで新一の説明が終わると鈴が口を開いた。

「知ってるよ、ソレ！おりひめさまとひこぼしさまが離れ離れになっちゃって、その時に鳥さんがツバサで橋をつくって会わせてくれたんだよね？」

「お、よく知ってるな！鈴は」

新一が褒めると鈴は嬉しそうに笑い

「だって、この間幼稚園でやったもん！笹にお願い事ぶらさげたの！」

「何をお願いしたんだ？」

新一の質問に蘭が口をひらく。

「それが鈴ったら『ヒミツだよ！』って教えてくれなくて・・・」

「りゅん、おとうさんにも教えてくれないのか!？」

「だってヒミツだもん!」

鈴の言葉に新一と蘭はむむむ、と顔を見合わせる。
そんな2人の様子をみて鈴は言った。

「じゃあ、おとうさんとおかあさんのお話して!」

「「えっ!?!」」

同時に声をあげた両親に、鈴はさらに言う。

「前に園子おばさんが言ってたの!」アンタの両親は高校生の時は
七夕の織姫と彦星だったのよ!」って。それと「そんな状態でも2
人はラブラブだったわよ!」って。なにがあったの?」

その言葉に新一と蘭は顔を赤くする。

園子のヤロー!

園子ったらなんてこと言うのよ!?

少し後に、ようやく落ち着きを取り戻した2人は鈴に“高校生の時
のこと”を話した。

組織の事は除いて・・・

話を聞き終わった鈴は一言。

「ふうん。それじゃあおとうさん達はおりひめさまとひこぼしさまよりもアツいんだね！」

「はっ！？」

ちよつと待て、どうしてそんな感想になる？そもそも『アツい』なんてどこで覚えてきた！？

そう新一が激しく考えていると鈴がまた言う。

「だって、七夕みたいに“いつ会える”って決まっていなかったのに、おかあさんはおとうさんをまっていたでしょ？それで、おとうさんもおかあさんが待っていてくれるって信じてたんだ。だから園子おばさんが『あの2人はいつまでたってもおアツい』って言ったんだね！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

やっぱり園子か、“アツい”なんて言葉、鈴におしえたのは！

新一が無言で拳を固めていると、蘭が再び鈴にきいた。

「ねえ、鈴。七夕になんてお願いしたの？」

すると鈴はニッコリと笑って言った。

「“おとうさんとおかあさんがいつまでもなかよしでありますように”だよ！」

ねがいごと（後書き）

星座の神話って結構スゴイの多いですよね^^；

親友（前書き）

親友といっても、人間同士じゃありません！
今回の主役はあのヒト！
ややキャラ崩壊かも？

親友

『警部さんもしかして、人間のお友達少ないの？』

ふと、幼い声が彼の頭に去来する。

その声の持ち主は、東京からやってきた1人の少女だ。

ハァーっと彼は深いため息をつく。

あの少女が、悪意を持って前のセリフを言ったのなら、まだいい。
ところが少女は大真面目な顔で彼の心配をしてきたのだ。

彼 京都府警の綾小路文麿警部は己の指先にいる小動物
を見る。

その小動物、シマリスが、綾小路警部の親友だ。

親友がリスじゃアカンのか、そんな訳ないやろ、ほっと
いってくれ

リスに腕を走らせながらやけくそ気味に思う。

そこでふと、彼のライバルと言われている本庁の警部を思い出す。

白鳥だって変わってるやないか、なのに、なのになんでア
イツには……

恋人がおるんや！

先日、京都府内を騒がせている連続強盗犯の件で、本庁を訪れた時知った。

白鳥警部に恋人ができたことを・・・

本人に確認したら、堂々とノロケてきた。

後輩の刑事に冷やかされながら・・・

その様子を見た、綾小路警部は恋人の件とで二重に負けた気がした。そりゃ、自分だって後輩には慕われている、と思う。

けどあんな遠慮のない仲の良さは築けていない。

フン、と小さく鼻を鳴らす。

別にいいんや・・・僕にはこの子がいるんやし・・・

そう思いながら、肩にのったシマリスをそっとポケットにしまう。

京都府警のエリート、綾小路文麿警部。

今日も手のひらサイズの親友との絆を深めている

親友（後書き）

「迷宮の十字路口」での歩美ちゃんの一言、キッツ〜イと思いませんか？

真顔であんなこと言うだなんて・・・

綾小路警部の口調、1人称がわかりません。
ちよつと、今回はおふざけな話でしたね^^

服部平次の大捜査！（前書き）

— 応平和かな？

服部平次の大捜査！

「あああつ！」

学校から帰ってきた服部平次は冷蔵庫の前で、衝撃にかたまっていった。

「あんみつ堂のプリン、俺の抹茶黒蜜プリンが〜！」

そう、彼が先日、京都に行って買ってきた好物の抹茶黒蜜プリンが冷蔵庫から忽然と姿を消していたのだ。

ちなみにどれくらい好きなのかと言うと、平次はわざわざその為だけに京都にいつてきたくらいである。

「なんでないんや、誰が食ったんや！」

食べ物の恨みは恐ろしい。ましてや、それが大の好物ならば、なおさらだ。

「絶対犯人つかまえたる」

そんでもって、新たに買わせる！と決意を胸に平次は捜査を開始する。

幸いここは自宅。

犯人は、身内の者に決まっていた。

「オカン！」

「なんや、平次。落ち着きのない」

ドタバタと部屋に駆け込んできた息子に眉をひそめながら、平次の母、静華が返事をする。

そんな母親に、平次は尋問（？）を開始する。

「オカン、しょーじきに言ってもらおうか？」

「何をや？」

「俺の大事なあんみつ堂のプリン、食べたのはオカンか？」

「あゝあのプリンな・・・」

「なんや！？食ったんか！？」

おのれオカンめ、と平次が鬼人の形相でせまると、

「いや、食べてもよかったんか？なら貰えばよかったなあ」

なんや誰か先に食べてしもうたんか、とのんびりした返事がかえってきた。

容疑者1、服部静華、無罪。

「くっ、なら犯人はオトンか！」

寢屋川の自宅に住んでいるのは、平次と両親である。

さっきの様子からして、母はプリンのことを知らない。
ならば犯人は、父、服部平蔵しか考えられない。

今、父は仕事中でいない。

本人に直接聞いて確かめることはできない。

ならば証拠を探してやろう、と捜査を再開する。

1時間後……

「あゝどこにもない！オトンめ、証拠を隠滅しよったな！」

父の部屋を中心に、家中を探し回ったが、空のプリン容器はどこにもなかった。

「くそ、あんのキツネ目クソ親父、帰ってきたら耳の奥に指突っ込んで奥歯力タカタ言わせたる！」

父への復讐を決意した平次はそれまで部屋で寝てよう、と自室にある。

ガチャ

そこで平次が目にしたものは・・・

自分のベッドで気持ちよさそうに寝ている幼馴染の姿だった。

「なにしてんや？コイツ・・・」

そう言えば、帰ってきてすぐにキッチンの冷蔵庫に向かったから、
1度もこの部屋みていなかった。

そんな事実思い当った平次は、ベッドのふちに腰を掛ける。

「なんつーか、無防備なやつだな」

普通、主が不在とはいえ、男の部屋でこんなのにきに寝られるか？
と首をかしげた平次は、その瞬間、あるものを視界にいれる。
ベッドのわきの、ゴミ箱の中。

そこには、平次が何よりも楽しみにしていたあんみつ堂のプリンの
空容器。

「・・・・・・・・・・」

まさか、と平次はすぐそばで寝息を立てている幼馴染をみやる。

そのかわいらしい寝顔、の口元には黒っぱいモノ。

そう、それは、間違いなく平次の大好物、あんみつ堂の黒蜜抹茶プリンの黒蜜だった。

「~~~~~」

平次はその場で脱力した。

まさか和葉が犯人やっただなんて・・・

これじゃ、怒るに怒れないやないか・・・

こんな可愛い寝顔をみたら怒れない、と平次はあきらめる。

けれど、このままじゃ自分がかawaiiそうじゃないか。

そう思った平次は、ならばせめて、と

チュツ・・・

自分の唇で、和葉の口元に残る黒蜜をぬぐった。

ソレは、いつもより、甘い気がした。

服部平次の大捜査！（後書き）

多分次回も平和です！

冬のダイヤ（前書き）

ごめんなさい

平和から予定変更、恋人快青でいきます> m () m <
夏に冬の話かくってどうよ・・・

冬のダイヤ

「ねえ快斗！アレがオリオン座だよね！？」

「ん？ああ、良くわかったな、アホ子」

「何よ！青子だってオリオン座くらいしってるもんバ快斗！」

「あんだとアホ子！」

2人の元気のよい声が辺りに響く。

普通ならこれだけ大声を出すと近所迷惑なのだが、2人は全く気にしていない。

それもそのはず、ココは自然豊かな山の中なのだから。

今日は快斗が急に「星でも見に行くか」と言い出したため、ここまで来た。

「じゃあ快斗、青子の事バカにするなら星の事詳しいの？」

「は？」

「『は？』じゃないわよ！『良くわかったな』なんて言うくらいなら、星の説明ぐらいしてみなさいよ！それともできないの？」

「ンな訳ねーだろ！いいぜ、教えてやる！」

そう言うと快斗はビシッと夜空を指さして話し出す。

「いいか？まず、オリオン座だろ？そんでもってアレがおおいぬ座」

アレだ、アレ。と夜空の方を指す快斗。しかし青子は、

「で？」

「『で？』ってなあ・・・」

「だって快斗、ただ星座を指してるだけじゃない。工藤君と星見に行くとき詳しい説明までしてくれるって蘭ちゃんが言ってたよ？」

チクショウ、名探偵め。と快斗は内心小さく舌打ちする。

「俺だってそんなくらい出来るさ！教えてやるから黙って聞けよ？」

「うん」

「まず、オリオン座。左上の方の明るくて赤っぽい星が1等星のベテルギウス。コレとおおいぬ座のシリウス、こいぬ座のプロキオンでできた三角形が“冬の三角形”だ」

「ふーん、きれいな三角形だね」

「ああ。あと冬の空にはダイヤモンドもあるんだぜ？」

「え！？ダイヤ？星の事？」

でも星1個だけならわざわざ冬限定じゃなくても・・・とつぶやく青子に快斗は言う。

「星を1つ指して言うんじゃないよ。冬は1等星が多いんだ。それを6個、つなげる」

いいか？と青子に聞くと、快斗は再び夜空を指す。

「オリオン座の右下、足の部分だな・・・あの青白い明るい星がオリオン座のもう1つの1等星、リゲル。そんでもってあそこにある双子座、あの橙色の星がポルックス。あっちにある黄色い星がぎよしや座のカペラ。・・・ここまでいいか？」

「ええつと、アレがりゲルであっちがポ・・・ポルックス？それでそっちがカペラだよね？」

自信なさげな青子に快斗は笑ってうなずき、解説を再開する。

「あそこにあるのがおうし座、おうし座にはV字型のヒヤデス星団とプレアデス星団・・・日本では“すばる”の方が有名だな。があるんだけど、ヒヤデス星団にある橙色の1等星が、アルデバラン。それで、今言った、リゲル・シリウス・プロキオン・ポルックス・カペラ・アルデバランの6つの1等星をつなげてできた六角形が“冬のダイヤモンド”ってわけさ！」

「へーっ、スゴイね！冬って明るい星がいっぱいあって綺麗！夜空って星がいっぱいあった宝箱みたい！」

そう無邪気に声をあげる青子に快斗が両手を広げて見せる。

「ハイ、ここで1つ、マジックをおみせしましょう」

そう言うと、右手を開いて青子の顔の前にかざし、

「ご覧の通り、この右手はただの右手です。ですが、魔法を使つてこの右手で夜空の星をつかんで見せましょう。1・2・3！はいっ」

ポンツという軽い音がすると、快斗の手のひらには本物のダイヤ、の指輪。

そして、ソレは次の瞬間、青子の左手の薬指にはまっていた。

「快斗・・・」

驚いた青子が快斗を見ると、彼は照れ臭そうに頭を掻きながら言った。

「なあ、青子。指輪^{それ}受け取ってくれないか？」

「ええええっ！快斗！ちょ・・・それって・・・けっ！！」

驚きのあまりまともにしゃべれなくなった青子に快斗はうなずき、

「青子、オレ、黒羽快斗と結婚してください」

青子はこれ以上ないほど赤くなると、やがてうなずいた。

「はい」

と、その時、青子の視界を何かが走った。

「あつ、見て快斗！流れ星！」

「お、ほんとだ！」

「お願いしなきゃ!!」

真夜中過ぎの2人の恋人たちの頭上では、流れ星のショーが繰り広げられていた。

まるで、これからの2人の幸せを予感させるかのよう

冬のダイヤ（後書き）

最後のは双子座流星群です。

怪盗キッドのお魚遭遇記（前書き）

今回はキッドです。

キッドファンの皆様は読まない方がイイかも・・・

怪盗キッドのお魚遭遇記

〽夜、米花美術館〽

「へっへっん、相変わらず甘いなあ中森警部も。毎回毎回あんな偽物にひっかかって・・・名探偵の姿も見えないし、この分じゃ、今日も楽勝だな！」

いつものごとく中森警部を出し抜いたキッドは上機嫌で目的地にたどり着いた。

今日の標的はビッグジュエル、^{ターゲット}“湖の光”。

名前の由来は色々と言われているらしいが、キッドにはそんなモノはどうでも良かった。

ようは無事に盗めればいいのだ。

“湖の光”を展示している部屋まで着いたキッドは上機嫌のまま、宝石に近づく。

「よし、じゃあ頂くとしますか」

そう言うと、ガラスケースに手をかけ、“湖の光”に手を伸ばし、持ちあげる。

と、次の瞬間、

「ぎゃ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~っ!!--!!」

静かな部屋に、キッドの悲鳴が響き渡った。

暗くてよく見えなかったが、宝石の下にひいてある布にはある絵が描いてあったのだ。

怪盗キッドの最も苦手とするもの、すなわち、魚

そう、この宝石“湖の光”には、キッドが気にも留めていなかった名前の由来があるのだ。

1つは、宝石の輝きが湖の水面に反射する、太陽の光の样だから。そしてもう1つは、湖を泳ぐ魚の鱗の輝きに似ているから。

なので美術館は、この宝石を展示するにあたって、名前の由来にふさわしく、魚の泳ぐ柄の布を宝石の下にひいたのだった。

そんなことは露も知らず、無防備にヒョイと宝石を掴んだキッドは、魚の絵を直視してしまった。

常に冷静な平成のアルセーヌ・ルパン、怪盗キッドもこの時ばかりは冷静ではいらなかった。

『ポーカーフエイスを忘れるな』と言う父の言葉も忘れた怪盗は、悲鳴を上げ、宝石も放り出してその場から逃げだした。

彼は逃げたかった。一刻も早く、魚の、絵から

その後、逃げ出した怪盗キッドは、偽物ダミーに気がついて引き返してきた中森警部と鉢合わせして、いつもより辛い鬼ごっこをするはめとなった。

「どうしたんだ？アイツ……」

キッドがいなくなった後の部屋に、小さな子どもの声が響く。

キッドキラー、江戸川コナンだ。

彼はキッドがダミー人形を使うことを見越し、警察の様に騙されることなく、先にこの部屋でキッドを待ち伏せしていたのだ。

コナンは今まで身を潜めていた柱の影から出てくると、辺りをキョロキョロと見まわす。

そこには別になにもない。

キッドの放り投げていったビッグジュエル以外は。

「ヤバイ奴でもいたのかと思ったけど、そーゆー訳でもないみたいだし……」

コナンは首をかしげる。

「なんだったんだ？」

彼はこれから1週間ほど、頭を悩ませることになる。

怪盗キッドのお魚遭遇記（後書き）

ああ、キッドファンの方、すみません>m(_____)m<

小五郎犬

「もー、お父さん！ちゃんと野菜も食べなきゃダメでしょ！？」

「うつせーな、蘭。野菜なら食ってるじゃねーか！・・・まったく、英理みたいなこと言いやがって」

「そんな切れ端が“食べる”に入るわけないでしょ！？コナン君を見習いなさいよ！好き嫌いせずにちゃんと食べてるわよ！」

夕飯時、毛利家の食卓。

肉ばかりで野菜を食べようとしない父に蘭は注意するが、小五郎はのらりくらりとかわしている。

「おーコナン、おめー玉ねぎ好きだろ？俺のやるから食べていいぞ」

小五郎はそう言いながら自分の皿のサラダから、玉ねぎだけを箸でとり、コナンの皿にどさっと移す。

蘭がすかさず雷を落とす。

「もう！コナン君に押し付けしないで自分で食べなさい！子供じゃないんだから」

すると小五郎はわざとらしくシナを作る。

「えー、小五郎ちゃん、中毒おこすから、玉ねぎ食べられな〜い？」

「何バカなことやってんのよ！？玉ねぎで中毒なんておこすわけな

いでしょ！」

「蘭は平気でも、小五郎ちゃんはおこしちゃうんです」

「んもう！知らない！勝手に言ってれば！？」

あくまでもふざけ続ける小五郎に蘭は怒りを爆発させ、夕食の時間が終わった。

「まったくもう、お父さんたら、子供みたいに好き嫌いするんだから・・・」

「蘭ねえちゃん」

夕食後、小五郎は風呂に入り、蘭がぷりぷりしながら食器を洗っていると後ろから声かけられた。

「コナン君」

「おじさんってば、大変だね」

苦笑いしながら言う居候の少年に蘭は詫びる。

「ごめんね、コナン君。結局お父さんの野菜食べてもらっちゃって・
・。」

そう、小五郎が押し付けた野菜を結局コナンは全て食べたのだ。

「まったく、なぐにが『小五郎ちゃん、玉ねぎ中毒なの〜』よ！お父さんたらバカじゃないの？」

そこで蘭はエプロンを引っ張られる感覚に視線を下に向ける。
するとコナンが蘭のエプロンを軽く引っ張っていた。

「どうしたの？コナン君」

「蘭ねえちゃん、あのね・・・」

コナンはたくらみを含んだ笑顔で蘭に何事かをささやく。

そして、コナンの口元から耳をはなした蘭の顔にも、同じ笑みが広がった。

深夜の毛利家の1室で、1つの大きな影と、小さな影がうごめく。
彼らは、己の企み事を実行している。

翌朝

「なんじゃこりゃー!？」

驚きに満ちた小五郎の悲鳴が毛利家に響く。

小五郎が目覚めると、彼は己のベッドの上に置かれた、床のない段ボール製の犬小屋にいたのである。

おまけに首に違和感を感じると思ったら、首輪らしきものまではずっている。

と、部屋のドアが開き、蘭とコナンが顔をのぞかせる。

2人とも、ニヤニヤしている。

その顔を見た瞬間、小五郎は悟った。

「おい。コラ！コレはおめーらの仕業だな！？なんてことしやがんだ！」

だが2人とも意に介しない。

「あら、どうしたのワンちゃん！」

「ずいぶん大きな犬だね」

「そうね、コナン君。危ないかもしれないから、近寄っちゃダメよ？」

「蘭ねえちゃんもだよ」

そんな2人の会話に小五郎はキレる。

「誰が犬だってえ！？だ・れ・が！！」

しかし蘭はビシツと小五郎に指を突きつけ言い放つ。

「お父さんがよ。決まってるでしょ？」

続いて、小五郎が口を開く前にコナンが言う。

「おじさん、知ってると思うけど、玉ねぎ中毒を起こすのは犬や猫だよ。玉ねぎに含まれている成分が赤血球を壊しちゃうんだ。当然だけど、人間ではそんなこと起きないよね？だから昨日自分で『玉ねぎ中毒だー』って言ったおじさんは、人間じゃなくて犬か猫ってことだよな？」

またこのガキ、どこで仕入れたか知れない知識を・・・と、小五郎はコナンに食ってかかろうとしたが、間に蘭がいるためそれが出ない。

仕方なく、小五郎はフンと鼻を鳴らすかわりに天井てんじょうにむかって1声鳴いた。

「ワン！」

小五郎犬（後書き）

普通、寝てる間に首輪付けられたら起きますよね・・・
まあ小五郎だから起きなかった、ってことで！

実は「玉ねぎ中毒」発言は私の身内のものです。
しよっちゅう押し付けられました（-”-）
好きだからいいんですけどね

となり（前書き）

今回はシンゴ様のリクエストで、「今はまだ遠い、背中」の続きです。

大変長らくお待たせしました>m (——) m<

となり

「きゃあ~~~~~!!」

幼い少女の悲鳴があたりにこだまする。

少女と、その連れの目の前に横たわっているのは、ぐったりと四肢を床に投げだしている、体。

うつろに見開かれた瞳には、一切の光も感じられない。

悲鳴をあげたのは、吉田歩美。

そしてその連れはお馴染みの少年探偵団と阿笠博士だ。

事の始まりは、連休の始めに「どっか連れてって」と少年探偵団の面々が博士に頼んだことだ。

それじゃあ、と博士が選んだのは、山奥にあるバンガローだった。

そして今日、博士の運転で目的地までやってきた。

もともと、車で来れたのは、ここから1キロほど離れた管理人の小屋までなのだが。

管理人の小屋から歩いてきて、さあやつと着いた。とかなり息切れしている阿笠博士を最後尾に、借りたバンガローのドアの前に立った時、コナンが気付いた。

鍵が、こじ開けられている、と

コナンが警戒しながらドアを開くと、真っ先に視界に飛び込んだのが、先の光景だ。

「おめーらは下がってる！入ってくんなよ！？」

思わぬ事態に腰を抜かしている歩美・元太・光彦に叫ぶと、コナンは目の前に横たわる人間に近づく。そつとその手首に手を当て、首をふる。

「ダメだ。もう亡くなってる・・・」

「そんな・・・」

「とにかく、警察をよばねーと」

コナンはバンガローから外に出ると、未だへばっている博士に声をかける。

「なあ博士、ここって電話あるか？見当たらねーんだけど」

「いや、ないそうじゃよ。それにここは携帯電話も圏外じゃし」

その答えにコナンは少し考えて言う。

「なら警察を呼ぶにはさっきの管理人の小屋まで行くしかねーか・・・」

そこでコナンは振り返ると、腰を抜かしたままの歩美たちに声をかける。

「なあ、おめーら。わりーけどちょっと博士と下に行って警察を呼んできてくんねーか？」

「お、おう」

「ええ、まあ。いいですけど」

元太と光彦は、突然のショックがまだ覚めないのか、すぐに承知した。

博士はと言うと、

「そんな、わし、また歩くのか？」

しかし、コナンはそれを無視して、

「歩美ちゃんは？」

先ほどから黙ったままの歩美に問いかける。

やっぱショックが大きかったのか、とコナンが考えていると、

「コナン君は？ いかないの？」

「え？ まあな。ここに誰もいなくなるわけにもいかねーし、現場も保存しとかねーと」

予想外の質問に驚きながらも答える。

と、灰原が

「そうね、全員がここを離れるのは良くないわ。じゃあ私も残ろうかしら？ 1人になると誰かさんがまたムチャしかねないし、ねえ？」

「おまえなあ」

「じゃあ私もここに残る！」

「えっ!?!」

いきなりの歩美の言葉にコナンと灰原が声をあげる。

「コナン君と哀ちゃんは、警察くるまでに調べ物するんでしょ？歩美もここで、哀ちゃんと一緒にコナン君の手伝いする！」

「歩美、でも……」

先ほど、ショックを受けたはずの少女を心配して、コナンが止めようとする。

だが、

「そう、それじゃあ吉田さんにも残ってもらいましょうか、私とあなただけじゃ手が足りないかもしれないもの」

「灰原！」

OKサインを出した灰原にコナンが驚く。

「あら、いいじゃない？吉田さんがそうしたいって言うんだから」

「哀ちゃん！」

ありがとう、と歩美が灰原に抱きつく。

それを見たコナンはしょうがない、といった感じで認める。

「あの、僕たちは・・・」

おそろおそろ、と言った風に聞いてくる光彦に灰原が答える。

「あなたたちは、江戸川君が言ったように、博士と一緒に警察を呼んできてちょうだい」

「あ、はい」

わしも残るゝという叫び声とともに博士たちが消えた後、コナン達は調査を開始した。

コナンは死体に触れ、硬直の度合を確かめる。

「もう、全身が硬直してるから、死後、半日はたってるな・・・」

「外傷は？」

「特にないな。ちょっと、俺、この辺を探して、この人がだれか、手掛かりになるような物がないか探してくる」

そう言うと、コナンはその場をはなれる。

「ねえ、哀ちゃん」

「どうしたの、吉田さん？」

コナンと死体を見ながら会話を進めていた、灰原に歩美が聞く。

「硬直って、死後硬直のことだね？歩美、この前本で読んだんだけど、どうしてそれで死んでからの時間がわかるの？」

『本で読んだ』、その発言に目を見張りながらも、灰原は答える。

「あのね、生き物は死んでしまうと、グリコーゲンが分解されて、乳酸をつくるの。そしてpHが下がる。そしてそれに伴い筋源繊維タンパク質であるミオシンとアクチンが強く結合してアクトミオシンを生成し、筋肉は硬い状態になる。これが“死後硬直”ね。死後硬直は普通、死後2時間程で、脳や内臓、顎や首から始まって、約半日で全身に広がるのよ。」

江戸川君はそれを元に判断しているの」

「なんか、難しい言葉がいっぱいだね。歩美、全然分かんないよ」

「そうね、吉田さんにはまだ難しいかもしれないわ。でも、時間を積みめばきつとわかるようになるわよ」

「ホント？歩美でも、哀ちゃんみたいになれる？」

「・・・私みたいに、じゃなくて、江戸川君を目標にした方がいいわよ」

自嘲気味に答える灰原に、歩美が反発する。

「どうして！？歩美はコナン君も憧れただけど、哀ちゃんみたいになりたいの！」

「な、んで・・・・・・・・？」

驚く灰原に、歩美はなおも言う。

「歩美はコナン君の隣に立ちたいの！いつも背中に守られてばかりだけどそれじゃ嫌なの。・・・この間だって、結局、コナン君に守られたただだし。だから、歩美、哀ちゃんみたいにいつもコナン君の隣で役に立ちたい！」

「・・・・・・・・」

数秒、灰原は沈黙すると、ゆっくりと1回、瞬きをし、口を開く。

「私は、別に、彼の隣に立ってるわけじゃないわ・・・」

「え！？」

「傍から見ると、そう見えるのかも知れない。だけど、危ない場面になると、彼はいつだって私をその背中を守るうとする。だから私は、いつも彼の隣にいるわけじゃないのよ」

けどね、と灰原は続ける。

「もし、吉田さんが彼の隣に立ちたいなら、立てばいいのよ。今はそうでなくても、いつか立てる日が来るわ。私も手伝うわよ？そのために頑張ってるんでしょ？」

「哀ちゃん・・・」

頑張ってるの、わかってくれたんだ。と歩美は思った。
やっぱり、哀ちゃんは私の事、わかってくれてるんだね、と。

そこへ、コナンが戻ってきた。

その手には、さっきまでなかった赤いリュックが1つ。

「おい、その人、誰かわかったぞ」

その林の中にあつたこのリュックに免許証が入ってたんだ、とコナンが告げる。

「そう、よかったわね」

「あとは警察だな」

「元太君たち、まだかな？」

そう3人が話していると、

「おい、警察呼んできたぞー！」

「元太君だ！」

その声に3人がバンガローから飛び出すと、

元太・光彦、それに管理人のおじさん、警官らしき人物。

そしてへ口へ口になった阿笠博士がこちらに向かってるのが見えた。

事件終了まで、あともう少し

約束（前書き）

久方ぶりの更新。

今回は72巻、252の話のあと、コナンが帰宅してからの話

約束

阿笠博士を誘拐した犯人が捕まり、事情聴取はまた後日、と言うことでコナン達はすぐに帰宅した。

「ただいま」

もうすっかり日も暮れ、遅くなってしまった帰りにおそろおそろドアを開けたコナンは言う。
すると奥から心配顔の蘭が出てきた。

「コナン君！おそかったじゃない！
こんな時間までいったい何してたのよ！？」

「ご、ゴメンなさい。元太達と缶けりしてたらしい・・・」

馬鹿正直に『廃ビルの中で解体業者を装った誘拐犯に遭遇しました』なんて言う蘭が心配するとわかったので、コナンはウソをついた。

すると蘭はやや呆れたような表情になり、

「もー、遊ぶのはいいけど、あんまり帰りが遅くなっちゃだめよ？」

心配するでしょ？と言う蘭にコナンは素直にはい、と返事をする。

と、蘭がコナンの頬に目をとめる。

「あら？コナン君、どうしたの？ほつぺた」

ああそうだった、とコナンは思い出す。

犯人目がけて蹴ったサッカーボールが、急に開いたドアに反射されて自分に返ってきたんだ、と。

これまた正直に言えないため、誤魔化す。

「ちょっとボールぶつけちゃって・・・」

「コナン君って結構ドジよね。気をつけるのよ？」

蘭はそう言っていると、救急箱をとってきて、コナンの手当を始める。そんな蘭にコナンはさっきから気になっていたことを訊ねる。

「ねえ、オジサンは？」

てつきり帰ったら、腹を空かせた小五郎から拳骨を食らう、と思っていたのに、小五郎の姿が見えない。

「お父さんなら出かけてるわよ。
・・・どうせ麻雀でしょうけど」

そう言ってる間に、蘭は鮮やかな手つきでコナンの手当を完了させる。

「さ、コナン君、晩御飯にしましょ！
準備してくるから、手、洗ってきてね！」

「はい」

台所に向かいながら言う蘭に返事をしたコナンは、洗面所に向かう。手を洗っていると、電話の音が聞こえてきたが、すぐに止まったことからして、蘭が受話器をとったのだらう。

手を洗い終えたコナンがちゃぶ台の前に座り、蘭を待っていると、電話を終えた蘭がやってくる。

その顔を見たコナンはギョツとする。

蘭の顔は、静かな迫力をたたえていた。

蘭はだれがどう見ても不機嫌だった。

そりゃもう、台風並みの低気圧である。

そしてその怒りは、その目からしてコナンに向けられている。

「ら、蘭ねえちゃん・・・？」

恐る恐る声をかけたコナンに、低い声で蘭は言う。

「聞いたわよ・・・」

「な、何を・・・？」

まさか自分の正体ではないだろう、と思いながらも、ビクビク訊ねるコナン。

そんなコナンに蘭は大きな声を出す。

「さっき高木刑事から電話できいたのよ！

コナン君、今日廃ビルで缶けりしてて阿笠博士を誘拐した人に捕まっただんですって！？」

「えっと、あの、その・・・」

「ってことはそのほっぺただって、その時怪我したんでしょ!？
なんでウソなんかつくの!？」

「だいたいどうして廃ビルなんかで遊ぶのよ!」

蘭のあまりの剣幕に、おどおどしながら答える。

「いや、ほっぺはボールぶつけたのは本当だよ？」

あのビルだって、まさかそんな、悪い人がいるなんて思ってたなくて。
・・・」

「じゃあ、なんでウソなんかついたのよ？」

冷やかな声にびくりとしながらも、コナンは口を開く。

「や・・・その・・・」

「その!？」

「ホントの事言ったら、蘭ねえちゃん心配すると思って」

その瞬間、蘭のカミナリが落ちる。

「心配するに決まってるでしょ!？何考えてるのよ!」

ビクッと肩をすくめたコナンは、蘭の顔をみて言葉を失う。

たった今コナンにカミナリを落とした蘭は、両目に涙をためていた。

「心配、するわよ・・・」

でもね、本当の事言ってくれない方が、ずっと心配なのよ。

アイツみたいに急にいなくなっちゃうんじゃないかって」

「蘭、ねえちゃん」

アイツがだれを指すかなんて、聞かなくても分かった。
コナンは情けなさに齒を食いしはる。

なにやってんだ、俺・・・

新一は心配をかけてばかりだから、
せめてコナンだけでも心配をかけさせないようにするべきだったの
に・・・

それすら出来てないじゃないか、とコナンは自嘲する。

それでも、今、新一には出来なくても、コナンになら出来ることが
1つだけある。

コナンは自分の手を伸ばすと、ソレを実行する。
その小さな手で、蘭の涙をぬぐう。

「コナン君・・・」

わずかに驚き、こちらを見る蘭に、コナンは必死に伝える。

「蘭ねえちゃん、大丈夫だから・・・
僕は新一にいちちゃんみたいに、急に消えたりしないから
だから・・・だから・・・」

心配しないで？と蘭を見上げる。

「本当に？」

疑わしそうな眼差しで問ってくる蘭に、コナンはうなずく。

「うん、本当だよ」

「・・・約束してくれる？」

「うん、約束する」

それじゃ、指きりしましよ、と蘭が小指を差し出す。
コナンはその小指に自分のそれを絡ませる。

あとの文句は2人でそろえて言った。

「「ゆーび切りげーんまん、ウソついたら針千本のーます！指切つた！」」

文句を言い終えると、絡ませていた指を放し、そつと笑いあう。

「じゃあコナン君、晩御飯にしようか？」

「うん！」

そうして2人は、いつもより遅い夕食を開始したのだった。

それは、2人だけの約束
守られるかどうか、それがわかるのは、
まだ先の事

今夜は眠れない　くいびき　（前書き）

短い！

眠れないコナン君のお話

今夜は眠れない　いびき

午前2時、

グゴォ、ゴォ、と言う音が部屋中に鳴り響いている。部屋、と言う事は、家の中である。

強い風が洞窟に響いているわけではない。

音の出所は、この部屋の主、毛利小五郎である。

このビル風のような音の正体は、小五郎のいびきである。

午前2時とは、どうがんばっても早朝とは言えない。深夜である。

世の中にはそんな時間でも起きている人はいるだろう。

追い詰められた受験生や、レポートの〆切間近の大学生、昼夜の逆転した人間 etc・・・

だが受験生もいない健康的な毛利家には、そんな時間に起きている人物はいない。

ただ1人を除いては・・・

「・・・つうるせえ」

そのただ1人の人物、江戸川コナンは耳をふさぎながらばやいた。彼は先ほどから一睡も出来ていない。

原因は、この部屋に響く猛獣・・・いや、小五郎のいびき。

この家に居候するようになって数か月、

当初コナンは、毎日の様にこのいびきに悩まされていた。

流石に最近は慣れてきたのだが、今夜のは特にヒドイ。

「・・・・・・・・」

とうとう耐え切れなくなったコナンは、むくりと起き上がるとタオルケット1枚を持つて部屋をでる。

そして居間に行くと、そこにあった座布団を3枚縦に並べ、自分はその上に横になる。

あとは持参したタオルケットを上からかければ、寝心地は良くないが、布団の完成だ。

幸い、今夜はどちらかと言えば暑い。

タオルケット1枚だからといって風邪をひくような事はないだろう。重要なのはここが魔の部屋じゃないことだ。

これでやっと眠れる、とコナンが上機嫌で目を閉じたとき、彼の耳にはあの音が聞こえてきた。

グゴォ、ガ・・・

慌てて起き上がったコナンは、小五郎の部屋のドアを確認する。ドアは、しっかり閉まっていた・・・

それなのに、ここまで聞こえてくる、この音

「カンベンしてくれ・・・」

コナンは頭を抱えて、タオルケットをかぶる。

ふと時計をみると、午前3時。

どうやら今夜は、眠れそうにない

今夜は眠れない　く抱き枕く（前書き）

眠れないコナン君のお話、第2弾

今回はどうして眠れないのでしょうか？

今夜は眠れない　く抱き枕く

草木も眠る、丑三つ時、コナンは布団の中でそつと寝返りを打った。視線を真つすぐにすると、正面にくるのは、少女の寝顔。

スースー・・・

眠れねえ・・・

かわいらしい寝息の主を起こさないように、コナンは小さくため息をつく。

少女は熟睡^{らん}していて、ちょっとやさそつとでは起きそつにもなかった。

なぜ普段は別室で眠っている2人が、今日に限ってこんなに近くで横になっているか、それは、夕方にまで遡る・・・

昨日から休日であり、毛利家の面々は小五郎の運転するレンタカーで少し遠くの山まで出かけた。
そこまでは良かったのだ。

まだ暑さの残る最近でも、山の中は幾分涼しく、過ごしやすかった。

「暑いときは海ってイメージだけど、山も結構いいわね！」

「うん、そうだね！」

蘭ねえちゃん、その川、水が冷たくて気持ちいいよ」

「わー、ホントだ！気持ちいいわねえコナン君！」

「・・・おめえら、ここに連れてきてやった俺への感謝はどうした！？」

「はいはい、ちゃんと感謝してますってば」

そんな風に3人で楽しく過ごし、夕方になって『さあ帰ろうか』と
帰路についた。

その途中で問題が発生したのだ。

「ねえ、お父さん、さっきからどこ走ってるの？」

「なんか行きと景色がちがくない？」

「うつせえ！横と後ろからゴチャゴチャ言っくんじゃねえ！」

焦った顔で悪態をつく小五郎に、蘭とコナンは疑わしげな視線を向ける。

「・・・もしかして、おじさん道分かんなくなっちゃったんじゃない？」

「ちょっとお父さん！？まさかこんなどこか分かんないところで、迷っちゃったの！？」

事実を指摘するコナンと、問い詰める蘭に、小五郎は渋い顔をむける。

「だー、お前らがゴチャゴチャ言うのが悪いんだよ！」

「私たちのせいにしないでくれる！？」

と、親子喧嘩が始まりそうになった瞬間、車がガクンと止まる。

「まさか・・・」

コナンが車を降りて確認すると、案の定タイヤがパンクしていた。

慌てた小五郎が携帯を確認すると、圏外であった。しかも、スペアのタイヤがない。

「しょーがねえな、今日は車で野宿するしかねえな」

「えー、嫌よ！こんな山中で野宿だなんて、お化けでもでてきたらどうするの？」

「そんな時は空手でどうにかしろ」

「お化け相手に空手が通じるわけないでしょ！」

「ねえ」

小五郎と蘭のやり取りに、コナンが口をはさむ。
どうしたのか、と親子2人がコナンを見ると、

「あそこに明かりが見えるよ？行ってみない？」

と、コナンが指さした先には確かに明かりが1つ。

それなりに大きいから、街灯がポツンとある、というわけでもなさそうだ。

そこにあるのは、古びた、しかし大きな和風の家だった。

毛利家の3人はすぐさまその家にむかい、家の住人になんとか泊めてくれるように頼みこんだ。

幸い、相手は“眠りの小五郎”を知っていて、快く承諾をしてくれたのだが、

夜、眠る前に家政婦が余計なことを言ってきた。

「本当に大変でしたね、道に迷った挙句、パンクまでしちゃうなんて」

気さくに行ってくる若い家政婦に、蘭とコナンが答える。

「はい、ありがとうございます。」

もう1時はどうなるかと思って・・・」

「ここに泊めてもらえなかったら、野宿だったもんね」

コナンの口から出た『野宿』の言葉に家政婦は眉をひそめる。

「まあ、それはいけませんよ。」

このあたりで野宿だなんて・・・」

「クマでもでるんですか？」

「いいえ、クマなんて可愛いものじゃありません。実は・・・」

と、その先、家政婦が語った話に蘭がおびえる。

その話とはこうだ。

このあたりには昔、人食い鬼が住んでいて、山中を通る人間をよく襲っていた。

人食い鬼は特に若い女人にょにんの肉が好物で、それは酷い食べられ方をしていた。

そしてある時、その話を耳にした高名な僧が、その鬼を退治した。だが、その後も時々、山中で人が行方不明になり、無残な姿で発見される。

ソレを見た人々は、こう噂した。

『僧の退治した鬼が幽霊になってもなお、人を襲っているのではないか』と。

だからこの辺には、住む人があまりいないし、この辺の家の門には鬼除けのお札が貼ってあるのだ、と。

「でもまあ、昔話ですから・・・
気にせずゆっくりお休みになって下さいね」

そう言い残し、家政婦は去って行ったのだが、蘭の脅え様はすさまじかった。

「ど、どうしよう？ 鬼が来たら・・・」

「おいおい、本当にこの世に鬼なんているわけねーだろ？」

「大丈夫だよ、蘭ねえちゃん」

しかし脅えきつた蘭は、何を考えたか、いきなりコナンの布団にもぐりこんできた。

「え、ちよつと、蘭ねえちゃん！？」

「コナン君、さっきの話怖かったでしょ？」

怖いよね、だからお姉ちゃんが一緒に寝てあげる」

それじゃあおやすみー、と自分のすぐ横で眠ってしまった蘭を、コナンは驚きの目で見ると、布団からはいだして、隣の、本来は蘭が寝るはずだった布団まで行こうとする。

が・・・

すでに熟睡モードに入った蘭の手は、コナンのパジャマ（家の人に借りた）の裾をしっかりと握っている。

観念したコナンはそのまま自分も眠ろうとした。
だが、

寝れねえ・・・

なんせ、1つの布団を2人で使っているのだ。

当然、2人の距離もかなり近い。

好きな女の子の寝顔が間近にある、というのは健全な高校生男子には刺激的なもので、ドキドキして眠れないのである。

いや、とにかくなんとか寝るんだ

そうコナンが寝ようとした時、

「ん、ううん……」

小さな声をあげた蘭が、コナンの体を、その両腕で抱き寄せた。

「!!」

驚きのあまり、コナンは声を出せずにいる。

心拍数もドンドン上がってきている。

心臓の鼓動の音で、蘭が目覚ますんじゃないかというくらいに・

・

だが、蘭はぐっすりと眠っていて、目を覚ます気配がない。

それどころかコナンという抱き枕を得て、ますます快眠状態である。

それと正反対に、コナンの目は余計に冴えてしまった。

どうやら、コナンは今夜、一睡もできなさそうだ。

今夜は眠れない　小説（前書き）

眠れないコナン君のお話 part 3

今回は“眠れない”というより、“眠らない”ですが・・・

今夜は眠れない　小説

バラリ、

深夜、毛利探偵事務所の1室、家主である小五郎の寝室に響いた軽い音は、その部屋の主がたてた音ではない。

探偵事務所に居候している、小さな少年の出したものだ。

その居候の少年

江戸川コナンは、もう日付もかわり、夜も深まったというのに、パツチリと目を覚ましていた。

普通の子供が起きている時間ではない。

そして今回は、小五郎のイビキがうるさくて眠れていない、と言う訳でもない。

にも関わらず、コナンが起きている理由はただ一つ。

本日、いや、もう昨日のことだ。

昨日発売された推理小説、新名香保里の新作、『探偵左文字』0の犯行』。

その本を早速買ったコナンは、すぐにでも読もうとしたのだが、帰宅後、読み始める前に急に事務所に依頼が舞い込み、『家族全員で来て下さい』と言う依頼人の要望のため、読み損ねた。

依頼人の家から帰るともう11時を回っており、入浴を済ませると同時に蘭に早く寝るよう促された。

もちろんコナンは、買ったばかりの小説を読まずして眠る、なんて気は毛頭なかったので、ひとまず寝たふりをしその場をしのぎ、家の者全員が寝入ったところ、布団から起き上がった。

起き上がったその後は、卓上ライトを小五郎の机から拝借すると、

その明かりの下、読書を開始した。

読書好きとはたいていそう言うものだが、小説をいったん読み始めると止まらなくなるのはコナンも同じだった。

あつという間に小説の内容にはまり、時間が経つのも気にならなかつた。

そして、新刊を読み終えると、それだけでは止まらず、以前買った本も読み返した。

こうなると、もう止まらない。

コナン自身にも止められない。

もう今晚は、コナンは眠らない。

（コナンにとって）あつという間に一夜が過ぎ、気がつくと、朝の爽やかな日差しが部屋に差し込んでいた。

寝不足の1日が始まる。

チョコレート・レシピ（前書き）

またもや季節感マル無視な話。

ホワイトデーの前日、コナンがお返しのチョコ作りに挑戦。

チョコレート・レシピ

3月13日の昼過ぎ、江戸川コナンは居候している毛利家の台所に立っていた。

小五郎は仕事で夜遅くまで帰ってこない。

蘭は夕方まで部活の練習だ。

つまり、今の毛利家にはコナン以外の人物はいない。

コナンが自らの計画を実行するにはちょうど良かった。

コナンの計画

それは明日のホワイトデーにバレンタイン

ンのお返しとしてチョコレートを作り、蘭に渡すというもの。

“新一”としてはもうすでにお返しの準備は終わっていたが、“コナン”が新一と同じように大そうな物をあげるわけにはいかない。

小学生が贈るものとして、不自然でないものを選ばなければならない。

それは、何か

考え抜いた末、決めたのが『手作りチョコレート』である。

と言っても、料理が苦手なコナンにはトリュフや生チョコ、フォンダンショコラといった洒落たモノは作れない。

作るのは、板チョコを溶かしてハート型に固める、といういたってシンプルなものだ。

材料も買いこんだし、さあ、開始しよう、とコナンは腕まくりをした。

（数時間後）

コナンは困り顔で台所に立っていた。

チョコを溶かす、という簡単な作業のはずなのに、上手くないのだ。

何が起きたかと言えば、何回挑戦してもチョコレートが焦げてしまった。

チラ、と材料の入ったビニール袋に視線を向ける。

あんなにあった板チョコはあと2、3枚しか残っていなかった。

どうしようか・・・

台所どころか、家中に漂う甘い香りの中、コナンが思案していると、その耳に玄関のドアが開く音が届いた。

「ただいまあ！コナン君」

明るい声は蘭のものだ。

「コナン君、お腹空いたでしょ？」

待っててね、今ご飯作るから・・・ってあら？」

強く香る甘さに気がついた蘭が怪訝な顔をしながらコナンのところまでやって来た。

コナンは慌ててチョコレートの残骸入りの鍋を隠そうとしたが、一

足遅く、蘭に見つかってしまった。

「コナン君いったい何やってるの？」

鍋に焦げ付いたチョコレートにやや顔をしかめながら蘭が聞く。
言い訳の使用がないので、コナンは仕方がなく白状する。

「えっとね、明日、ホワイトデーでしょ？
だから・・・僕・・・」

「歩美ちゃんと哀ちゃんにでも贈るの？」

チョコを贈る相手が自分だとは思っていない蘭にたずねられて
首をふる。

「ううん。蘭ねえちゃんにあげたかったんだ」

「え？」

「こないだのバレンタイン、蘭ねえちゃん、僕にもチョコレートく
れたでしょ？」

すっごくおいしかったから、だから僕も蘭ねえちゃんに作ってあげ
たかったんだけど、うまくいかなかった・・・」

と、指で鍋を指したコナンは少しだけうなだれていた。

蘭はそんなコナンを見て優しく微笑む。

「なんだ、そうだったの。ありがとう、コナン君！
コナン君の気持ち、嬉しいな」

そう言いながら鍋をつかむと、背を曲げて視線をコナンに合わせた。

「でもね、コナン君。これだけは知ってなきゃ。

チョコレートは湯煎しないと！直接火にかけたらこげちゃうのよ？」

そう、なぜコナンが何回も失敗したか、それはチョコレートを直接鍋に放り込み、そのまま火にかけたからだった。

「へ？」

一瞬、キョトンとしたコナンは次の瞬間赤くなる。

己の失敗の理由を悟ったのである。

真っ赤になったコナンに明るく笑いかけた蘭は、シンクの下からもう一つ鍋をとり出し、

「じゃあ一緒に作ろっか！」

それから1時間後、毛利家のテーブルには綺麗なハート型のチョコレートと、ちよっといびつなハート型のチョコレートが仲良く並んでいた。

シャワー（前書き）

試験前最後の投稿

次回はおそらく来週の金曜日の夜、または土曜日になるかと・・・

シャワー

蘭は窓の外を見てわずかに顔をしかめた。

外はものすごい雨と風である。

おまけに今日は傘を持ってきていなかった。

朝は晴れていて、雨が降る気配など微塵もなかったのだ。

学校の玄関口でしばらく様子を見てみたが、雨がやむ様子はない。

父、小五郎は今日は友人と麻雀をしようとっていたので迎えは期待できない。

最も、あの小五郎に迎えを期待すること自体が間違いなのだが・・・

仕方がないので濡れて帰るか、と決意して歩きだそうとしたその瞬間。

「蘭ねえちゃん」

聞きなれた、幼い声が蘭の耳に届いた。

その声のした方へ顔を向けるとそこには

「コナン君！どうして高校に？」

弟のように可愛がっている少年が立っていた。

小さな子ども用の青い傘をさしたその反対の手には大きな赤い傘。いつも蘭が使っているものだ。

それを見た蘭は悟る。

コナンが高校まで来た訳を。

傘を忘れた自分の為にわざわざ来てくれたのだと。

この強い雨と風の中、小さな体では大変だったろうに・・・
もう薄暗いのでわかり辛いですが、よく見ると体のほとんどがぬれている。

小さな体では強風にあおられるままで、傘もあまり役に立たなかったのだろう。

それでも自分の為に来てくれた、と言う嬉しさから蘭はニッコリと笑うと手を差し伸べる。

「ありがとう、コナン君！それじゃあ一緒に帰ろっか！」

「うん！」

元気よく返事をしたコナンと手をつなぎ、2人仲良く帰路についたのだが、その道のりはやさしいものではなかった。

道全体が川の様になっており、どんなに注意して歩いても結局靴の中まで濡れていった。

大粒の雨は横殴りで、頑張つてさしている傘も甲斐なく体も濡れた。特に強い風は傘をひっくり返し、コナンに至つては蘭と手をつないでいなければそのままどこかへ飛ばされていただろう。

苦労しながら探偵事務所に帰りついた蘭とコナンだが、その頃にはすっかり濡れてしまっていた。

まさに濡れ鼠とはこのこと。

頭のとっぺんから足のつま先までびしょぬれである。

「ごめんね蘭ねえちゃん。傘持ってきたのに結局濡れちゃって」

「ううん。コナン君こそわざわざ来てくれてありがとね」

申し訳なさそうに謝るコナンに蘭は首をふると靴を脱いで立ち上がる。

「よし、コナン君。シャワー浴びるわよ」

「え!？」

「『え!？』じゃなくて、シャワーよシャワー!

お風呂入れてたらその間に体冷えちゃうし、コナン君、風邪治ったばかりじゃない!」

「ぼ、僕はあとでいいよ! 蘭ねえちゃん、先に入ってきなよ」

「ダメよ! ほら、入るわよ!」

真っ赤になってじたばたもかくコナンを捕まえた蘭は、手早く着替えやバスタオルを準備すると風呂場へ直行した。

その後、

「ほらコナン君! 風邪ひくから大人しく浴びなさい!」

そんな蘭の声とコナンのもかく声、シャワーの音が毛利家の風呂場に響いていた。

シャワー（後書き）

台風、すごい雨と風でしたね

あの中をバイトに（歩いて）出かけたため、傘が壊れました。

高1の時から使っていたものだったので・・・

見事に骨が折れまくりまして・・・

実際にずぶ濡れになったのは私です（><）

スーツも靴も完全に濡れました。

寮母さんもびっくりな濡れ具合でした。

お陰で風邪ひいた気がするのですが、あと1週間は気が抜けませんね。

それではまた来週

ウェーブと馬のしっぽ（前書き）

天国へのカウントダウンの後、大阪で

ウェーブと馬のしっぽ

「なあ、平次、コレ見てみ！」

和葉はそう言うのと目の前にいる男に携帯をつきだした。

画面に映っているのは、東京にいる2人の友人だ。

いつもよりお洒落な格好をした彼女たちは仲良く肩を並べて笑いあっている。

1人はお馴染みの少女。

黒いロングヘアが特徴の蘭。

そしてもう1人は、

「ん？なんや、コレ、鈴木のねーちゃんか？」

蘭と一緒にいる茶髪の少女といえば、園子だろう。

が、いつもの彼女とは少し、いや、かなり違った。

いつもはヘアバンドでおでこをむき出しにしたヘアスタイルなのだが、この写真はそうしていない。

その代りに、

「園子ちゃん、ウェーブかけたんやって！」

パーティの間だけで、またもとに戻しちゃったらしいんやけど」

「へー、それで？それがどうしたんや？」

この変化が蘭のものだったら、ソレをネタに彼女の傍にいる新一をからかえるのだが、そうでないのなら別に興味がない、と言った風に反応する平次に和葉が頬を膨らませる。

「なんやもー、他に言うことないん？」

つまらない、と言うようにそっぽを向いた和葉は平次を放置しあらためて携帯の画面を見やる。

「この写真の園子ちゃんかわええな」
いいな、アタシもウェーブ、かけてみよかなー」

そう和葉が独り言を言った時、

「やめえや」

「は！？」

平次の唐突な言葉に和葉が聞き返す。

「和葉、おまえはウェーブなんてかけんくていいやろ」

「な、なんでや？」

「別になんでもや！」

とにかくダメだ、と言い張る平次。

もしかして、今の髪形の方が平次の好みなんやろうか、と思い、

「平次、アタシ、今のまんまの方がええ？」

少し期待しながら聞くと、返ってきたのは

「ああそうや。お前みたいなじゃじゃ馬は馬のしっぽのがいいやろ
！」

その言葉に、

和葉はやや頬をそめたまま一瞬かたまり、次の瞬間

パツチーンツと乾いた音と、

「平次のアホ！」

そんな声が服部家の1室から飛び出していった。

ウェーブと馬のしっぽ（後書き）

和葉はポニーテールが似合いますよね

優しい手

朝起きると、どうにも体の調子が悪かった。

頭が重く、ボーっとするし、時折、目まいの様なものもある。

良く考えてみれば、昨日の夜からその前兆はあった。

それでもまあ、少し頭痛がするかな、と言った具合だったのだが・

・

それでもコナンは布団から起き上がるともぞもぞと着替えをし、顔を洗うと蘭のいる居間へとむかう。朝の早い蘭はもうすでに朝食を作り終え、ちゃぶ台に並べているところだった。

蘭は起きてきたコナンに気づくと、

「あら、おはよう。コナン君」

「おはよー蘭ねえちゃん」

「ねえ、お父さん起こしてきてくれる？ご飯冷めちゃうから」

「うん、いいよ。今日は焼き魚なんだね」

今朝の朝食のメニューは雑穀を混ぜたご飯、豆腐と葱の味噌汁、そしてサバの切り身という和風なものだった。ちゃぶ台の中央には昨夜出たほうれん草のお浸しの残りもある。

「そうよ、コナン君、サバ嫌いだったっけ？」

「うっん。僕、サバ好きだよ。じゃあおじさん起こしてくるね」

ボーっとしたコナンの表情が、気乗りしない様に見えたのか、少し悲しげに聞く蘭に慌てて否定すると先ほどまで自分も寝ていた寝室へと入っていく。

そこで『ヨーコちゅわ〜ん』など言いながら鼻の下を伸ばし、涎を垂らして眠る小五郎を揺り起こすとまた居間へと戻る。

夢から覚まされてふて腐れている小五郎が身支度を整えて席に着けば朝食の始まりだ。

だが、コナンの箸は一向に進まなかった。

段々と頭の重みが増してきて、グラグラする。

いつもはおいしく食べられる蘭の手料理なのに、今日は味が全く分からない。そこどころが油断すると込み上げてくる吐き気に負けてしまいそうだ。

「お父さん、今日は何か依頼はあるの？」

「ああ昨日の夕方きた依頼人の家に行ってくる。

どうも遅くなりそうだから夕飯は勝手に食ってていいぞ」

「そんな事言っただけどこかに飲みに行くんじゃないでしょうね！？」

「今日はちげーよ！少しは父親を信用しろってんだ！」

蘭と小五郎のしているそんな会話も理解することが出来ない。

周波数の合わないラジオの様に音が聞こえなくなったり、大きくなったりする。

（やべえ、耳鳴りまでしてやがる・・・）

キ
目の前に現れた。

「コナン君どうしたの？あんまり食べてないみたいだけど、やつぱりサバ、いやだった？それともおいしくなかった？」

「い、いや、そんな事ないよ、おいしいよ」

「ふん！居候のガキが、好き嫌いなんて言うんじゃない！」

否定したコナンに、それでもまだ何か聞きたそうな顔をしていた蘭だったが、食事を終えて出かけるために準備を始めた小五郎の言葉に鬼の形相になる。

「ちょっと！お父さん！何よその言い方、コナン君がかわいそうでしょ！？」

「うるせえな、ガキが好き嫌いなんてしてたらデカくなれないんだからいいだろ！？」

父娘でギヤアギヤアと言いながら居間を出ていく。

小五郎が出かけるので、蘭は見送りにたったのだ。

いつもは蘭やコナンの方が先にでかけるのだが、今日の依頼はかなり早いらしい。

しかし、今のコナンにはそんな事を気にする余裕はなかった。

先ほどの2人の声が大きすぎて、頭にガンガンと響く。

「・・・うつく・・・」

内側から突き破るような頭の痛みに加え、吐き気がまた酷くなり、うめき声をあげたコナンは箸をとり落とす。と、そこへ蘭が戻ってきた。

「まったく。ごめんねコナン君。あんなお父さんで」

まだ小五郎に対してぼやきながらコナンの方を見た。

コナンのわきに落ちている箸に気がつくとそれを拾い上げる。

「あらコナン君、お箸落してるわよ・・・ってコナン君!？」

箸を手に取りコナンに話しかけた蘭はそこでようやく異変にきがつく。

顔色が、悪い。さっきまでよりももっと

蘭はとっさにコナンの額に手をあてる。

気持ちの悪い汗でぬれたそれは

「やだ、すごい熱!調子悪かったの!？」

そう言いながら蘭は急いで体温計を取りに走る。

その様子をぼやけた視界にとらえながら、コナンは意識を失った。

体が、熱い。

気分が悪くて、何も食べてないのに吐いてしまいそうだ。

一体、自分はどうしたのか。

ひっきりなしにする耳鳴りのせいで思考がまとめられない。

熱のせいか、体の節々が痛む。

そんな、激しい苦しみの中、

額にヒヤリ、とした感覚が訪れる。

ひんやりと冷たくて気持ちがいいのに、どこか温かくて落ち着くソレに苦痛が少し和らぐ。

そのわずかな安らぎをきっかけに、ようやく落ち着いた眠りへと入る。

数時間後

再び、遠慮がちに触れたあの落ち着く感覚にコナンは目を開けた。

「・・・・・・？」

目を開いて、まず映ったのは、

「コナン君！起こしちゃった？どう、体は？大丈夫？」

その手を自分の額に当てて心配そうにのぞき込む蘭の姿だった。ということはこの感覚の正体は、蘭だったのだ。

「ら、んねえ・・ちゃん」

声がかすれて上手く出ない。

一体何があつたのだろう、とコナンが疑問に思つてるとそれが顔にでたのか蘭が答える。

「覚えてない？コナン君、朝ごはんの後倒れたの。すごい熱なんだもん。びっくりしちゃった。

いつから具合悪かつたの？我慢しちゃだめよ？」

言いながら、コナンに体温計を渡し、検温させる。

コナンが体温計を脇に挟んだのを確認すると今度は冷えピタを準備する。

そんな蘭の様子を見ながらコナンは訊ねる。

「蘭ねえちゃん・・・今日、学校は？」

時計を見ると、今は昼の1時過ぎ。通常は学校にいる時間だ。なのに家（うち）にいる、ということは・・・

「今日はお休みしたのよ。あ、小学校にもちゃんと連絡したから大丈夫よ、気にしないで」

ピピピッという電子音とともに検温を終えた体温計をコナンから受け取りながら事もなげに蘭が言う。しかし、コナンとしては

「僕のことじゃないよ！蘭ねえちゃん、僕のせいでお休みしたの！？」

自分のせいで高校を休ませてしまうなんて、と悔しい気持ちだった。コナンのそんな気持ちを解しないのか、蘭は体温計の示した体温を見て眉をひそめる。

「39.3・・・少し下がったけどまだまだ高いわね。病院行った方がいいかな？」

「そんなのどうでもいいよ！ねえ、蘭ねえちゃ・・・っゲホッゲホッ・・・！」

無理に声を上げてせき込むコナンを見て、蘭がコナンと視線を合わせる。

「コナン君。コナン君は学校か、私か、っていったら迷わず私の事を優先してくれるでしょ？」

私だって同じなんだよ。私はコナン君が大事。

だからコナン君は『僕のせい』なんて気にしないで早く元気になってくれればいいの」

「でも・・・」

「でも、じゃないの！ほら、病人は大人しく寝なさい！あ、そうだ、ご飯、食べられる？お粥、作ったんだけど」

ついにコナンは抵抗を諦めて大人しく布団に横たわる。

そして最後の質問の答えにはゆっくりと首をふる。
まだ、何かを食べることはできそうにもない。

「そっか・・・それじゃあまだお薬は飲めないね。
ポカリは？ 飲める？ せめて水分補給しなくちゃ」

そう蘭が差し出したペットボトルを受け取ると、コナンは少しだけ
身を起してそれを口へ運ぶ。

高熱で汗を流し、失った水分を体が求めている。

飲み終えると、また横になる。

蘭はそんなコナンの様子を確認するとコナンのおでこに冷えピタを
貼ると、安心させるように優しく微笑んだ。

「おやすみ、コナン君。 いっぱい休んで早く良くなってね」

そう言うとき最後にコナンの頬をそっとひとなでした。

その手の感覚の心地よさにコナンは再び安らかな眠りへと落ちてい
った。

次に目覚めた時は、熱ももつと下がっているだろう。

優しい手（後書き）

10月1日は手負いの日！だそうで・・・

それに合わせて書こうとしたら間に合いませんでした orz

風邪ひきコナンと看病する蘭。

でも、私は手負い好きなのですが、自分じゃまともに書けないので難しかったです><

遊園地！ 1（前書き）

あゝネズミーランド行きたいかも・・・

遊園地！ 1

10月のある秋晴れの日のこと

蘭とコナンは鳥矢町に新しくできたアミューズメントパーク『鳥矢ドリーミーランド』に来ていた。この間の日曜日に、蘭が持ち前の強運を発揮して、福引きで特賞の『鳥矢ドリーミーランドペアチケット』を当てたのだ。

蘭は最初、園子と行こうと考えたらしいのだが、園子と蘭、2人の都合がなかなか合わず、2人の予定の合う日にはチケットの有効期限が切れてしまう、ということだったので、園子を誘うのを諦めた。

『ごめん、蘭。じゃあ今回はパス。あの遊園地、ウチも少しは建設に手を貸してるからいつでも行けるからまた今度いこうね』

諦めたのはいいのだが、そこからが問題で、それじゃあ今度はだれを誘おうか、となった。

そう、それこそが大問題だったのだ。

蘭は当初、真っ先に園子を誘った。

鈴木財閥の令嬢なら、このようなチケットなどなくとも、いつでも好きな時に行けると分かっているながら。

なぜなら蘭の本当に誘いたい人は・・・新一は、いないから。

“厄介な事件”に関わっていると言い、たまにふらっと姿を見せるだけであとは電話だけ。

そんな相手など、誘えるわけがない。

誘っても、「行けない」と言う人間など・・・

（だから、園子に声をかけたのに・・・）

園子との電話を切った後、蘭は夕日の差し込む自室で深いため息をついた。

なんだか悲しくなってきた、涙が出てきそうだった。

「バカだな・・・こんなことくらいで泣くなんて」

そつと言った独り言が、蘭以外誰もいない部屋におちる。

蘭は、その独り言は誰も聞いてないと思っていた。

しかし、聞いている者がいた。

聞いた人物はわずかに開いたドアの向こう側で物憂げな顔をしていた。

コナンだ。

コナンは蘭と園子の電話を聞いていたわけではない。

だが、先日さきの福引き、その後の蘭が園子と何回か電話をしていたり、朝、登校中にも何か話している様子。また、先ほどの蘭の呟きから何があったのかは安易に想像できた。

悲しい思いをさせているのが新にい一であるということも。

（結局俺はアイツのこと、泣かせてばっかだな）

最低だな・・・そう自嘲しながらドアの前で佇んでいると、唐突にそのドアが開かれた。

「あら？コナン君。どうしたの？私の部屋の前で。何か用？」

「わー！蘭ねえちゃん、え・・・いや、その・・・何でもないよ」

いきなり蘭が現れたので、慌てまくったコナンは意味もなく両手をバタバタさせ、あやふやなことを言う。しかし蘭はそんなコナンの不審な挙動には気にも留めずに、

「あ、そうだ！コナン君。よかつたら今度私と一緒にドリーミールンドに行かない？」

「へ？」

「ほら、私、この間の福引きであそこのペアチケットあてたでしょ？園子と行こうかな、とも思ってたんだけど予定合わなくてね。それでコナン君と一緒に行ってくれたら嬉しいなあって」

「あ、あの新一にいちゃんは？」

そう言った瞬間コナンは内心で己を毒づき、激しく後悔した。よりにもよって自分がその名前をだすなんてどれだけバカなんだ、と。

案の定、蘭の顔が曇る。だがそれは一瞬の事ですぐに明るさを取り戻すと言った。

「いいのよ！あんな大バカ推理ノ介なんて！遊園地よりも事件が好きなヤツと行ったって面白くないもの！アイツなんかよりもコナン君と行った方が断然楽しいわよ。ね、ダメかなあ？」

随分と言えば随分な言われようにコナンは瞬間、絶句するも最後の
方の蘭の甘えたような、おねだりする時の顔と声にやられてうなず
く。

「ダメじゃないよ！僕も蘭ねえちゃんと行きたいな！」

「ホントに？コナン君はいい子ね。ありがとう！」

「僕と蘭ねえちゃんデートだね」

最後にコナンがいたずらっぽく言い加えると、蘭も心底楽しそうな
顔に変わった。

「もう、コナン君ったら、マセてるんだから」

こうして2人の遊園地行きが決まった。

遊園地！ 1（後書き）

遊園地編は次回にします。

遊園地！ 2（前書き）

わゝ、すみません！

ものすごく間が空きました！

遊園地！ 2

ドリーミーランドに着くと、蘭とコナンはペアチケットをエントランスで提示し、中に入る。

ここから、2人のデートの始まりだ。

「コナン君！まずは何にする？」

「うーんとねえ・・・あ、ジェットコースターに乗りたいな！」

「ジェットコースターかあ。結構たくさんあるね。じゃあコレにしようかな」

蘭は入り口で渡されたマップを見ながら歩きだすが・・・

「よし、ここだよ！」

「・・・蘭ねえちゃん、これはヴァイキングだよ？」

巨大な船のアトラクションの前でどうどうと宣言する蘭にコナンが冷静に告げる。

呆れているのか、コナンの額には汗が流れている。

「えっ、あれ！？」

ちゃんと地図通りに来たはずなのに、と慌てふためいている蘭に手

を伸ばす。

「蘭ねえちゃん、地図貸して。僕が見るから」

「・・・コナン君、私の事方向音痴だと思ってるでしょ？」

「そんな事ないよ。ほら、どのジェットコースターに行こうと思ったの？」

内心ではあたりめえだろ？等と思いながらもそんなことは顔に出さずに受け取ったマップを見ると、蘭の指した指先を見て言葉に詰まる。

そこに書かれていたのは、

『夢と希望のカエルさんコースター』

小さなお子様でも乗れる安心設計！と書かれているそれは、明らかに子供むけのものだった。

また、蘭がコナンを子供扱いしたのだ。

（なんで高2にもなってこんなガキっぱいのに乗んなきゃなんねーんだよ・・・

つか、夢と希望のカエルさんってなんだよこのネーミングセンスは！？）

遊園地の名前がドリーミー、だからだろうか。だとしても、やはり意味がわからない。

「ね、ねえ。ホントにこれに乗るの？」

他にもなんかいいのがあるだろう、そんな想いをこめて訊ねると蘭はそれを知ってか知らずか、あっさりと肯定してくる。
しかも、満面の笑みで。

「うん！そうよ。コナン君こーいうの、好きでしょう？」

好きなわけねーだろ、とこの時コナンはどんなにそう言いたかったことが、だが彼はそれを我慢して、蘭と共に『カエルさんコースター』の所まで歩を進める。

「着いたよ」

「わー、可愛いね！このジェットコースター。
じゃあコナン君乗っておいで！」

かわいらしい、いかにも子供向けに作られた外見のジェットコースターを見て歓声をあげた蘭はコナンに手をふる。
慌てたのはコナンだ。

「えっ、蘭ねえちゃんは乗らないの？」

「うん。だって高校生わたしが乗ったらちよつと恥ずかしいかなって」

「・・・・・・・・」

もはや反論を頭の中でだけ言うのすら諦めたコナンは黙って列に並ぶ。

本当に小さい子ばかりで、小学1年生のコナンですら大きい方の列

だった。

幸い、待ち時間は短くすぐに順番が来る。

「どう？楽しかった？」

「・・・うん。楽しかったよ」

ニコニコと聞いてくる蘭に抑揚のない声で答えると、今度はコナンが次のアトラクションを決める。

さあ、どれにしようかな、とマップを見ると、ソレを見つけた。ニヤツとあやしい笑みを浮かべたコナンは

「蘭ねえちゃん！次はココに行こう！」

子供らしく、無邪気に言いながら蘭の手を引っ張って目的地に向かう。

10分後、

「ちょっとコナン君！ここってお化け屋敷じゃない！」

「そうだよ。蘭ねえちゃん好きでしょ？ほら、並ぼうよ！」

逃がすものかとばかりにがっちりと蘭の手を掴み、列に並ぶ。

数十分後、蘭の悲鳴が遊園地全体に轟いた。

「もう、コナン君のいじわる」

その後も2人は目一杯、ドリーミーランドを楽しんだ。

コナンでも乗れるようなジェットコースター（カエルさんコースターではない）に乗ったり、コーヒークップでぐるぐる回ったり。

蘭がお化け屋敷の仕返し、と恥ずかしがるコナンと一緒にメリーゴーランドにも乗った。

楽しい時間とはあつという間に過ぎてしまうもので、気がつけばもう閉園間際だった。

「コナン君急ごう！閉まっちゃう！」

お土産屋さんで園子や小五郎へのお土産を買った蘭は、同じく灰原や少年探偵団へのお土産を買ったコナンを引っ張る。
周囲の人々も出口へと向かっている。

園内を出る際、蘭が今日、入る時に見せたペアチケットを係に渡す。
実は、このペアチケット、出る時に見せると限定アイテムがもらえるのだ。

「ペアチケットご利用のお客様ですね。本日は鳥矢ドリーミーランドにお越し下さり、誠にありがとうございます！それでは、こちらが限定アイテム、『星の夢』でございます」

そう渡されたのは、2つ繋ぐと星が出来る、銀色のストラップだった。

蘭は外に出ると、嬉しそうに早速携帯につけている。

「はい、これはコナン君の分ね」

自分の分をつけ終わると、星の片割れをコナンに差し出す。しかし、コナンは中々受け取らない。

「コナン君？ いらないの？」

不思議に思った蘭がコナンの顔をのぞき込む。目が合うと、コナンが口を開いた。

「・・・っていいの？」

「え？」

何を言ったのか、よく聞こえなかった蘭がもう一度聞き返す。

「僕がコレをつけちゃってもいいの？」

予想外の言葉に蘭が目丸くする。

「どうして？ つけちゃいけない訳ないじゃない」

何故、そんなことをコナンが言うのか心底理解できず、蘭は不思議顔だ。

コナンが小さく言う。

「だって・・・蘭ねえちゃん、ホントは僕より別の人とこのストラップ付けたかったんじゃないかなって・・・新一兄ちゃんとか」

それを聞いた途端、蘭が笑いだす。

あんまり大笑いするので、前を歩く人が何事かと振り返る。

「なんだ、コナン君たらそんなこと気にしてたの？ほら、言ったじゃない！私は新一より、コナン君とココに行きたいって！ね？だから新一のことなんて気にしないで、それ付けようよ。私とコナン君とでお揃い！」

今日2人だけで出かけた記念だよ、と蘭はコナンに微笑みかける。それを見たコナンもようやく笑顔になり、ストラップを自分の携帯に付ける。

その日から2人の携帯で揺れている銀の輝きは、2人が一緒に楽しい時を過ごした証だ。

アンドレ・キャメルの苦勞日記

彼、アンドレ・キャメルFBI捜査官は公園のベンチに腰をかけていた。

その手にはコーヒーの缶。

ただ今、ジョギングの休憩中だ。

FBIという職業柄、日々の鍛練は欠かせない。
毎日、時間を見つけてトレーニングをしている。
それにはここ、米花中央公園はうってつけの場所だった。

ただ、難点が1つ。

この公園には階段がほとんどと言っていいほどない。
あっても、子供やお年寄りを考慮してか1段1段が低く、短い。
その為、階段を使ったトレーニングが出来ないのだ。

以前なら、とキャメルはふと考える。

以前なら、ニュー米花ホテルでトレーニングが出来たのに、と。
あそこの階段は高さも長さも理想にかなっており、トレーニングには最適だった。

が、あそこで会社社長の殺人事件が起きた時に、運悪くその場にはち合わせて犯人と疑われた。

『お前のその顔が殺し屋だっていつてんだよ!』

『国際指名手配犯とか?』

『FBI！？人相の悪いその男がかね！？』

あの時に言われた言葉を思い出す。

自分の顔が優しい顔ではないのは分かる。

だがいくらなんでもアレはあまりにも酷くはないだろうか？
とどめはコナン君の言った一言。

『キャメルさんが実はFBIだったように、見た目で決めちゃダメ
つてことだよ！』

フォローしているようで、その実、フォローになっていないあの一言。

つまり、“FBIには見えない”つてことだよな・・・とショック
を受けた。

あれ以来、あのホテルはトラウマとなつて行っていない。
だからこうして公園でトレーニングをしているのだ。

と、物思いに耽っていたキャメルの足下にコロコロとボールが転が
ってくる。

視線をあげたその先には、就学前くらいの小さな子どもがいた。

ああ、あの子のボールか、とキャメルはそのボールを手に取り子供
の方へ転がしてやる。

するとそれまで警戒心に満ちた眼で自分の方を見ていた子供は笑顔
になり、

「ありがとう、おじさん！怖い人がいるからどうしようって思っ
ちやった！」

最後の方は余計だと思わなくもなかったが、なんとか笑顔をつくり、

その子に向かって手をふる。

その子も手を振りながら、来た道をもどって、若い女性の元へむかう。

おそらく母親だろう。

次の瞬間、金切り声が耳に届いた。

「ナオ君！知らない人とお話しちゃダメっていつも言っているでしょう！？」

「でも、あのおじさん、ボールとつてくれたんだよ？」

「だからなんだって言うの？見てみなさい！あんなゴリラみたいな顔の人、悪い人に決まってるじゃないの！」

そう言いながら、手を引いて子供を連れ帰る母親。

キャメルはその背中を呆然と見送ることしか出来なかった。

なぜ、人は見た目で人を判断するのだろうか？

そんな事を思いながら、帰るために腰を上げる。

今日はもう、トレーニングをする気にはなれなかった。

とぼとぼと歩き、公園出口に差し掛かったころ、ふいに呼び止められる。

なんだろうと、振り返るとそこには制服を着た警官。

その警官は猜疑心のこもった眼でキャメルを見、言った。

「すみません。ここ最近、この公園周辺で不審者が多発していました、申し訳ありませんが、身分を証明できるような物を見せていただけないでしょうか？」

言葉こそ丁寧だったが、顔には“お前が不審者だろ”と書かれている。

しかも、トレーニング中だったのでキャメルは手ぶらだ。

その後、キャメルは疑いを晴らすのに1時間かかったとか……

流れ星（前書き）

コ蘭。

少年探偵団＋蘭、園子で泊まりがけで出かけた設定。

流れ星

日が落ちるのが今までと比べ圧倒的に早くなり、朝夕の寒さが身にしみるようになってきたある日、コナン達は腰を痛めた博士の為に温泉に来ていた。

当初、メンバーは少年探偵団と博士だけだったのだが、直前になって蘭が博士を心配して同行を申し出た。すると今度は『蘭がいくなら私も混ぜなさい!』と園子も付いてきて、賑やかな一行の出来上がりとなった。

深夜、

隣の部屋から誰かが出た気配を感じたコナンは寝間着の上から薄いカーディガンをはおり、そっと部屋を抜け出した。

音をたてないように静かに部屋のドアを閉じると、旅館の中庭へと向かう。

温泉が売りの宿とはいえ、流石にこの時間は温泉も閉めていると見え、辺りは暗かった。

顔を上に上げてみれば満天の星。

一晩中明るい東京の空と違い、ここでは星がよく見える。

輝く星々を目を細めてみた後、今度は視線を庭先にむける。思った通り、そこには見慣れた人影がある。

「蘭ねえちゃん」

1人、庭で佇む愛しい少女に声をかける。

その少女は一瞬、ビクリと肩をふるわせた後、コナンの方を見、ふつと笑う。

「まあ、コナン君。おどかさないですよ。いきなり人の声がしたからお化けかと思っちゃった」

どうやら肩が上下したのは、誰もいない庭で人の声「お化け、と思ったかららしい。

安心したような笑みを見せた後、蘭はふと気が付く。

「コナン君、ダメじゃない！子供がこんな遅くまで起きてちゃ！」

今は丁度12時を過ぎたころ、確かに小学生の子供が活動している時間ではない。

だが、中身高校生のコナンは内心、そう言われるのが面白くない。

（俺は17だぜ？・・・まったく、蘭のヤツ、ガキ扱いしやがって）

それでもコナンは内心の不満を隠して逆に蘭に言う。

「蘭ねえちゃんこそ、こんな時間にこんな所でなにやってるの？」

「星を見てたのよ」

「星？」

確かにきれいだが、何故、このような時間に見ようとしたのか、その疑問を口にするると蘭は懐かしそうな顔になって語り始めた。

「昔ね、そう、今のコナン君くらいの頃だったっけな？」

コレぐらいの時期に新一と、新一の両親と温泉旅行に来たの」

「新一にいちちゃんたちと？」

はて、そんなことあったらどうか、とコナンは記憶の糸を手繰り寄せる。

「そう、あのころ、お母さんが出て行っちゃったばかりで私寂しくてね。

それでよく泣いてたんだけど、そしたらおばさま・・・新一のお母さんが連れてってくれたの」

そこでやつと思ひ出す。

父、優作が原稿（と担当編集者）に追われていて、息抜き兼、逃亡に小旅行に出かけたのだ。

すると有希子が『どうせなら蘭ちゃんも連れていきましょ』と出発直前に蘭を連れて来たのだ。

確かあの時、自分は珍しく父親の仕掛けてきた我慢比べにのって、のぼせて夕方から寝込んでいた。

蘭は話し続ける。

「新一ったら、お風呂の入りすぎでのぼせちゃって夜まで寝てたのよね・・・」

クスクス笑いながら言う蘭に、余計なことまで覚えてやがる、と思いいながらも、同調して笑い、先の言葉を待つ。

「寝ようとしたら、元気になった新一が突然やって来て、その時泊まってたホテルの裏の方まで私を引っ張ってね、どうしたのかと思ったら『空を見てみる』って」

そこで1度、言葉をくぎると蘭は頭上に広がる夜空を仰ぐ。
そこには、あの日と同じように星空がキラキラと輝いている。

「凄くキレイだったなあ。今日みたいに、雲1つなくて、ホントに綺麗だった。」

それで夢中になって見てたら、流れ星がたくさん見えたの」

思えばあれが初めて見た流れ星だった。
だけど、それよりも嬉しかったことは

「でね、新一が『あんだだけ流れ星があれば、1個ぐらい願い事は言えるだろ？お前の今の1番の願いを頼めよ』って。・・・私がお母さんに帰ってきて欲しいって思ってること、分かってたのね」

七夕の笹に短冊をぶら下げた時は、母は少しだけ戻ってきた。
ならたたくさんの星に願いを込めれば、今度は前よりずっと長くいてくれるのでは、と思った。

「それで？英理おばさんは帰って来たの？」

コナンの質問に蘭は少し悲しそうに笑った。

「ほんのちよつとだけ、ね。私の学芸会の日だけに」

そこでもう1度空を見上げると、ため息をつく。

「でも、今日は見えないわね。流れ星。
・・・あの時は結構見えたのに」

それを聞いたコナンは頭の中のカレンダーを確認する。

あの日はたしか、オリオン座流星群が極大だった。

だが、今日はまだ、流星群は見えない。

あきらめて部屋に帰ろうとする蘭にコナンは慌てて呼びかける。

「待つて、蘭ねえちゃん！流れ星ってね、普通の日でも探せば見えるんだよ。

諦めないで、待つてみよう？」

コナンの必死な声に、蘭は感じるものがあつたのか、足を止めて、そこにとどまる。

1時間後、

上を見続けるのに疲れたころ、蘭が小さな声をあげる。

「あつ、見えた！」

「え！？ホントに？」

「うん！」

「お願いごとは？」

「できたよ、ちゃんと」

ほんの一瞬の間によく願えたな、とコナンが感心していると、蘭が手を差し伸べてくる。

部屋に戻ろうと促しているのだ。

大人しくその手をつないだコナンは、歩きながら訊ねる。

「蘭ねえちゃん」

「ん？なに、コナン君？」

「さっきのお願いって、英理おばさんのこと？」

あれだけ粘ったなら、母親のことだろうと考えた。だ、

「ううん。ちがうよ、新一のこと」

「・・・新一にいちやんの？」

一体自分の何を願ったのだろう。

まさか今度会ったら胴回し回転蹴りを喰らわせることが出来ます様に、とかか？

等考えたが、違った。

「早く、新一が無事に帰ってきますようにって、お願いしたの」

蘭は笑いながら、あの時のお母さんみたいにまたすぐにいなくなっちゃうかもしれないけど、と小さく付け加える。

「どうして？すぐにいなくなっちゃってもいいの？」

いつも、新一しんいちが戻っても、すぐに消えると泣いていたのに、と疑問を抱く。

だが蘭はあっさりと頷いた。

「うん。どうせアイツを引きとめておくなんて無理なもの。

事件があれば、ボールを追う犬みたいにすっ飛んでっちゃうわよ。それでもいいから、できるだけ早く会いたいよ」

いなくなってもいいから、早く会いたい？

不可解な発言にコナンがますます混乱していると、それが顔に表れたのか、蘭が言った。

「直接会って、言ってやりたいのよ。アイツに。

・・・ロンドンでの、返事」

ロンドンでの返事、すなわち告白の返事。

それを解したコナンは赤くなるが、辺りが暗いため、蘭は気がつかない。

そこで丁度、それぞれの部屋の前に着く。

「じゃあおやすみ、コナン君。遅くまで付き合ってくれてありがとう」
「う」

「う、うん。おやすみなさい、蘭ねえちゃん」

パタン

各々の部屋で床に就いた2人は間もなく安らかな眠りに着く。

そんな2人のはるか頭上では相変わらず、星たちがキラキラ瞬いていた。

恋は・・・（前書き）

流れ星の裏話

コナンと蘭が2人にいる時、あの2人は・・・

恋は・・・

パタン、と夜中に響いた軽い音に哀はむくりと起き上がった。

先ほど、人の動く気配のした隣の布団に目をやると案の定、そこには誰もいなかった。

隣にいたはずの彼、コナンがどこに、何の為に行ったかなんて、想像するまでもなくわかった。

コナンが動き出す数秒前に隣の部屋から誰かが出てくるような気配があった。

きつと彼はその“誰か”を追いかけて行ったのだろう。

そう、彼が彼女を追いかけるなんて、よくあること。

だから、気にする必要はないのに・・・

気がつくとき哀はコナンを追って部屋から抜け出していた。

そしてその先で見たものは

仲良く星空を見上げる2人の姿。

何を話しているのか、とても楽しそうに見えた。

『昔ね……』

『新一と……』

時折聞こえてくる単語からして毛利蘭と工藤新一の思い出話らしい。それを話す蘭は懐かしさでいっぱい笑顔で、聞いているコナンも同じような表情をしていて、どう頑張っても自分にはあの2人の間に入れないのだな、と哀に思い知らせた。

こんな気持ちになると分かってコナンを追いかけるだなんてバカだな、と自嘲気味にため息をつく。哀は部屋に戻ろうとコナン達に背を向けた。

その瞬間、驚きで息が止まる。

コナン達に背を向けた哀の真正面に園子が立っていたのだ。

突然の出来事と、自分が園子の存在に気がつかなかったことに驚いている哀に園子は人差し指を己の口にあてて、

「シ ツ、気づかれちゃうでしょ？」

そう言うと、哀をコナンや蘭からは見えない木陰に連れていく。園子の出現に戸惑いながらも哀は目下、1番の疑問を口にする。

「ちょっと貴女、いつからいたのよ？」

「1分くらい前からかな。蘭がいないから探しに来たの。そしたら蘭のヤツ、あのガキンチョと楽しそうに話してたからね、そつとしいてあげようかなって」

「そう……」

言いながら哀は隠れている木陰から顔だけをのぞかせて、コナン達を見る。

相変わらず、2人は楽しそうに話している。

と、そんな哀の様子を見た園子が口を開いた。

「ねえ、アンタ、あのガキンチョの事好きでしょ？」

「なっ、もごっ」

不意をつかれて声をあげかけた哀の口を園子が慌ててふさぐ。

「ちょっと静かにしなさいよ！蘭たちが気付いたらどうするの！？」

「貴女が変なこと聞くからでしょう？だいたいなんでそんなことを・
・・」

「だって蘭と話してるガキンチョの事、じっと見てたじゃない。悲しそうな顔で」

頭が軽そうに見えて、実はこの手のモノに関しては色々とみている園子はずばりと言う。

それに対し、そう言ったモノに強くない哀がとっさに切り返せずにいると、

「でもアンタにもチャンスは十分にあるでしょ」

「どうしてそう思うのかしら？」

のん気な意見に切り返すと園子は彼女にとっては正論をだす。

「だって蘭には新一君がいるのよ？」

あのガキンチョの気持ちは所詮、一方通行で終わるわよ」

江戸川コナン「工藤新一の真実を知らない者にとってはまさに正しい答えなのだろう。

だが、知っている者にとっては・・・

「さぁ・・・本当にそうかしらね？」

冷たく言い捨てると、哀は園子を置いて立ち去ろうとする。
すると園子が小走りで追いかけてくる。

「あ、ちよつと待ちなつてば！」

「なによ？」

そう冷やかに見返す小さな少女に臆することなく園子は言う。

「アンタさ、あのガキンチョの事、そんなに気になるんなら、言ってみたら？」

ガキンチョ本人に。

・・・蘭のこととか気にしないでさ！」

哀が蘭のことを口にする前に、それを防ぐように園子が付け加える。
それを聞いた哀は口を開く。

「もし、仮に私が江戸川君を貴女の言う様な意味で好きだとしても、私はそれを彼に伝えるつもりはないわ」

「どうしてよ？」

「私には、その権利がないから」

「はあっ!？」

園子としては小学1年生の口から“権利”などという言葉が出てきたのも驚きだったのだが、それよりも解せなかったのは、

「それって権利とかいるもんなの？」

「え？」

「だからさあ、誰かを好きになったり、その想いを伝えるのに権利なんていらないじゃない」

現在の恋人、京極真に出会うまで、多くの恋を求めてきた園子はその中で思ったこと、感じたことをそのまま言葉にする。

「恋つてのはね、権利だのなんののだの、そんなもの関係ないの。頭で考えてするもんじゃないのよ。心がね、勝手にするの。だから難しいこととか考えなくてもいいのよ!」

学校の勉強とは違ってね、と最後に言い添えた園子を哀は黙って見つめる。

明るく言い切った園子の顔は、『恋の1つでもしろ』といった時の姉と雰囲気が似ていた。

顔は似ても似つかないが・・・

ふっ、と笑うと哀は園子に言った。

「ま、覚えておくわ」

「ったく、アンタもあのガキンチョに似て生意気ね」

今からそんなじゃ、将来が不安だわ。

そう言った園子と、哀はそれぞれの部屋に帰って行った。

恋は・・・（後書き）

ちよろつと哀ちゃんがいつもと違いますね。
書くのが難しいんです。哀ちゃんってば。

お菓子とイタズラ（前書き）

新蘭でハロウィン

お菓子とイタズラ

西日の差し込む放課後の教室。

受験勉強の為、幼馴染の少女に数学を教えてた新一は目の前の彼女に声をかける。

「なあ、蘭」

「ん？何？どつか間違ってた！？」

今まで黙って自分が問題を解く様子を見ていたのに、急に話しかけられた蘭は慌てた声を出す。

これはどこか間違いがあるのでは、と。
だが、

「レモンパイ食いたい」

返ってきた返事はどこまでも予想を裏切るもので、蘭は思わずイスから転げ落ちた。

「おい、どうしたんだよ？大丈夫か？」

「大丈夫な訳ないでしょ！？イキナリなんなのよ？」

『レモンパイ食いたい』だなんて急に言われても出せるわけないじゃない！」

教室の床に尻もちをついた自分に、心配そうに手を差しのべながら声をかけてくる新一に蘭は文句を言う。

まったくも、と言いながら新一の手を掴み立ち上がると、蘭はスカートに付いた埃を払うと再び椅子に腰かける。

そんな蘭に新一は猶も言い続ける。

「なあレモンパイ」

初めは無視してた蘭だがあまりにもしつこくレモンパイ、レモンパイと連呼されるので遂に怒りだす。

「んもう！新一、いい加減にしてよね！？」

だいたい何でそんなにレモンパイなんか食べたいのよ？

それにさっきも言ったけど、急に出せる訳ないんだからレモンパイはあげられません！」

怒り心頭、と言った様子で立ち上がり、机に両掌を乗せ、言いきると、

「蘭、今日なんの日か知ってつか？」

にやにやしながら新一が問いかけてくる。

今日は何の日か、と問われた蘭は顎に手を当てて今朝見たカレンダーの日付を思い出す。

今日は10月31日。

と言う事は・・・

「ハロウィンだぜ？」

蘭が答える前に新一が先に解答を口にする。

そう、10月31日はハロウィン。

秋の収穫を祝い、悪霊を追い出す古代ケルト人の祭りが起源と言われ、外国では仮装した子供たちが近所の家々からお菓子を貰う。だが、

「だからどうしたのよ？」

もう高3。

お化けの格好をして『trick or treat!』なんて言う歳ではないだろう。

そういう意味を込めて聞き返すといつの間にか席を立ち、すぐ傍まで来ていた新一が蘭の髪を手に取りながら言う。

「ハロウィンにお菓子をあげないとどうなるか、わかるか？」

その目はキラキラと、どこか妖しく光っていて

「そ、そんなの知らないわよ！」

新一の目に押されながらも蘭は言い返す。

まさか本当に『Trick or Treat!』と言いだすんじゃない、と思いつながら。

すると手にした蘭の髪にキスを落としながら新一は顔を上げ、そしてそのまま

「イタズラ、されんだよ」

「え？ちよ、し、新一！」

間近に迫ってくる幼馴染の顔に蘭は赤くなりながらその名を叫ぶ。

数秒後、

夕日に赤く染まった教室に、1つに重なった2人分の影が確認された。

その影が離れた後には、顔を赤くした少女と、同じく赤くなりながらも満足そうに笑う少年の姿があった。

『Trick or Treat』

お菓子かイタズラか、

あなたはどっちがいいですか？

お菓子とイタズラ（後書き）

ハロウィンですね〜

今日は授業が終わったら学校で学科の子たちとハロウィンパーティーします

参加資格はお菓子を作って持つてくること！

と言う事で、昨日はクッキーを焼いてました。

材料を目分量で入れた超おおざっぱなスノーボールクッキー。

ちゃんとできたからよしとします（＾o＾）

コスプレ
仮装はしませんが、楽しみです〜

ではまた今度！

candy kiss (前書き)

遅くなっただけど平和のハロウィンネタ

一応2人は付き合ってる設定

・・・にしてもタイトルのセンスねえ！(笑)

candy kisses

10月31日の放課後、改方学園のとある教室には甘い香りと少女たちの笑い声が満ちていた。

「あゝ、おいしかった!」

「ホンマ、愛のケーキなんて最高やったよ」

「梨花の生キャラメルもな」

教室内の机をいくつか繋げたその上には少しずつ残った、さまざまなお菓子。

紅茶のパウンドケーキや生チョコ、秋らしくカボチャを使ったケーキもある。

クッキーも、チョコチップ入りのものや、市松模様のもの、スノーボールクッキー、アイシングクッキーと種類が豊富だ。

あめ玉や、ポッキーと言った市販のお菓子もあったが、そこに並んでいる多くは少女たちの手作りのものだ。

彼女たちは放課後、空き教室にてハロウィンパーティーを開いた。

もちろん、学校にお菓子類は持ってきてはいけないのだが、見回りの先生に差し入れと称して賄賂のケーキをあげたので問題はない。

小1時間ほどお菓子を食べ、おしゃべりをするパーティはお開きとなった。

めいめいが残った持参のお菓子を包み、帰り仕度をする。

「じゃあまた明日な」

そう言つと皆、教室を後にする。

ところが最後に1人だけ、なかなか出ようとしなない少女がいた。

「あれ？和葉、帰らんの？」

「もう外は真つ暗なんやし、はよ帰ったほうがええで？」

「せやせや。和葉はウチと家近いんやし、一緒に帰ろうや」

鞆を机に置き、椅子に座つた和葉に友人たちが声をかける。

それに対し、和葉は小さく笑いながら少し申し訳なさそうに答える。

「ごめんな。平次のこと、待つとるんよ」

その答えに周りは『あ』と納得したように頷く。

彼女の幼馴染にして恋人である服部平次は今日、数日前に事件の捜査で欠席した分の補習を受けているのだ。

「それじゃ邪魔しちや悪いから帰るわ」

「じゅっくり」

そう口々に言つと友人たちは帰つていった。

廊下の方からがやがやと話し声が聞こえてきたが、それも次第に聞こえなくなる。

話し声が聞こえなくなると和葉はふっと息をついて頼杖をつく。

「平次にも、食べて貰いたかったなあ」

彼女の持参したチーズケーキは好評で、すっかりなくなってしまった。

一切れくらい残しておいて平次にあげようと考え、朝学校に行く時に平次にもそう言ったのだが、それはできなくなってしまった。しかし、ないものはしょうがない、と諦めると時計を見上げる。

教室の時計は午後6時を指していた。

もう少しで補習も終わって平次もくるだろう、と考えながら和葉は1つだけ貰った飴を口に入れる。と、

「おゝ、和葉！待たせたなゝ」

後方のドアが開き、待ち人が現れる。

和葉は振り返るとその待ち人に向かって口を開く。

「アンタを待つなんてもう慣れっこや！しょっちゅう人との約束忘れよって。

で？もう終わったん？」

いつぞや梅田にて延々と待たされたことをチクリと言いながら、内心で後悔する。

本当は待たされても、会えるだけで嬉しいのに、と。

だが平次はそんな嫌味など微塵も気にせず、

「ああ、補修ならばucci終わったで！

・・・和葉、お前の作ったちゅうチーズケーキはどこや？

今朝、食わしたる言うてたやろ？」

どこやゝ？と和葉の鞆の中をのぞき込む平次。

申し訳なくなってきた和葉は顔の前で手を合わせる。

「すまん平次。皆なくなってもうたわ」

すると平次はつまらなそうな顔になる。

「なんや、お前、全部食つてもうたんか。」

そんなんやから無駄なとこばつか肉がつくんやろ」

いくらこちらに非があるとはいえ、余りな言いようにムツとして言い返そうとした瞬間。

「代わりのモノ、貰うで」

と平次が和葉の唇に自分のそれを重ねる。

丁度言い返そうと開いた口からコロソ、とあめ玉が転がると平次の口へと入っていく。

「な、ちょおっ・・・!」

突然の出来事に困惑している和葉に平次はにやりと笑いかけると、

「あめ玉、貰ったで。・・・帰るぞ」

その後2人は仲良く並んで帰ったそうだ。

candy kiss（後書き）

飴はイチゴ味かな？（勝手な想像です）

はい、突然ですが「バラエティギフト」のアクセス数がPVが10万越え、ユニークも1万越え（これはだいぶ前からなのですが）しました。

ということで感謝を込めてリクエストを受け付けます

本当は9月くらいにやろうと思っていたのですが、なにやら忙しくて機会を逃しておりまして・・・

詳しくは活動報告をご覧ください。

O・B・E・N・T・O（前書き）

田沢舞矛さんのリクで高佐
高木刑事目線で。

「高木くん」

お昼時、昨日の事件の書類をなんとかまとめ上げた時、佐藤さんの声が聞こえてきた。振り返るとそこにはいつもの凛々しい彼女の姿。

「佐藤さん、どうかしましたか？」

これからお昼だし、一緒に食べにいかないか、と言う誘いだっただけ。と期待しながら訊き返す。まあ、そんなことしたら後で他の刑事達に尋問を受けるハメになるが。

それでもその価値はあるよな、と考えていると、

「お昼のお弁当を……って……ない？」

え？

今、佐藤さんは何て言ったんだろう？

佐藤さんが喋り始めた時に一課のドアが勢いよく閉じたからよく聞こえなかったけど、もしかして

『お昼のお弁当を作ってきたから食べない？』

とか！？

以前、白鳥さんが小林先生にお弁当を作ってもらってるのを見て、佐藤さんにも『今度作って下さい』と頼もうとしたら、聞き間違えた佐藤さんに『コンビニ弁当買ってきて！』なんて言われたけど、今日は作って来てくれたとか！？

そう考えると頭の中は期待でいっぱいになって、気がつくと答えていた。

「はい！喜んで！」

そう言った途端、佐藤さんの顔がパーっと明るくなる。

“刑事の顔”の時もいいけど、やっぱりこんな顔も可愛くていいなあ・・・なんて見とれていると。

「ホント！？ありがとう。やっぱり高木君は優しいわね。」

「いえ、そんな・・・」

そんなことはありません。貴女の手作り弁当を食べることが出来るなんてそんなの、誰だって喜ぶに決まっています。

脳内だけで続きを言う。今の気分は天にも昇る気分だ。

だが、そんな気分は次に放たれた佐藤さんのセリフで地に突き落とされる。

「今日はガッツリ食べたい気分だから、カツ弁当がいいなあ。

あ、あとデザートにプリンもお願いね。はい、お金」

「え・・・？」

思わず間拔けな声をだし、呆けたように佐藤さんを見てしまった。
そんな俺の様子を見て佐藤さんは首を傾げる。

「あら、どうしたの？高木君」

「あ、いえ・・・その・・・何でもありません」

自分のした勘違いに呆れて上手く言葉を紡げず、有耶無耶に終わらせようとしたが、佐藤さんはそれを許してくれなかった。

「なによ？何か言いたいんでしょう？男ならビシツと言いなさいよ！」

すっかり刑事の顔になって俺を睨みつけてくる。

その迫力に負けた俺は素直に白状した。

「えっと、佐藤さんが最初、お弁当作ってきたから食べないかって、そう言ったように聞こえて・・・すみません」

「・・・・・・・・」

案の定、返って来たのは沈黙。

おまけにまだこの部屋に残ってた刑事達からの痛いほどの視線。

ああ、あとで彼らに何をされるか・・・

それに佐藤さんだって呆れてるだろうな、と気が重く、顔があげられなかった。

が、

「何？高木君、手作りのお弁当が食べたいの？」

なら今度由美に頼んであげようか？アイツ、ああ見えてお昼はいつもお弁当持参だし」

ちがう、ちがうんです。

俺が食べたいのは、ただの手作り弁当じゃなくて

「佐藤さんのが、いいです」

「え？」

こんなこと言ったらあとでまた尋問受けるハメになるけど、でも・

「佐藤さんが作った弁当が、食べたいです」

とうとう言った、本音。

でも後悔はしていない。

あとは佐藤さんの反応を待つだけだ。

だがなかなか反応がない。

やっぱ、そういうのは嫌なのか？とわずかに不安が出てきた時だった。

「私、料理下手よ？」

だからお腹壊すかも知れないわよ？

そんな言葉と共に、返事がきた。

これはOKと取っていいんだよね！？

「大丈夫です！僕、お腹は丈夫なんで！」

周りからの視線がものすごく痛かったけど、そんなのは気にならな
いほど嬉しかった。

O・B・E・N・T・O（後書き）

高木目線ってなかなか難しい。

なんか変な文になっちゃいました。

後日、お弁当編も後で書こうと思います。

O・B・E・N・T・O ? (前書き)

O・B・E・N・T・Oの続きです。

O・B・E・N・T・O？

『佐藤さんの作った弁当が、食べたいです』

高木のそんな発言から数日後。

佐藤と高木、2人のデートの日。

「高木君」

2人で動物園に行き、さまざまな動物をたっぷり見た後の、昼。

佐藤は車の中から四角い包みを取り出した。

それを見た高木が一瞬、驚いた顔になり、その次には嬉しそうに微笑む。

その四角い包みの中身が、先日約束したお弁当だとわかったから。

「コレ、その公園で食べない？」

嬉しそうな高木に、佐藤もどこか照れた様な微笑を浮かべながら提案する。

「はい。じゃあ、奥の方にベンチがあるからそこで」

僕が持ちますよ、と高木は佐藤の手から包みを受け取ると2人で公園の奥へと歩を進めた。

と、そんな2人を見つめる影が4つ。監視する

毎度お馴染み、佐藤美和子絶対防衛線のメンバーだ。
だが流石に毎回毎回全員がそろって活動できるわけもなく、今日は
その中でも特に力を入れているメンバーだけが集まった。

「高木のヤロー」

「白鳥が抜けたからって調子にのりやがって！」

「僕たちの美和子さんを・・・！」

恨みのこもった眼で高木の方をじっと睨みつけながら文句を言う。
そして、火にかけた油鍋のように熱くなっている彼らの所へ、一石
が投げられる。

「情報によりますと高木は佐藤さんに手作り弁当を要求したとか！」

それが、点火のきつかけとなった。

「なにいいっ！それは本当か！？」

「はい！一課の田中がその現場に居合わせたそうです！」

その密告者（チクリ魔）であるところの田中刑事は残念なことに今日
はここにいない。

よって真偽を確かめることはできないのだが、

「じゃあ、高木の持っているアレはまさか・・・!」

「美和子さんの手作り弁当!」

うらやましい。うらやましすぎる。

佐藤の料理の腕前を知らない彼らは嫉妬の鬼と化する。彼らの脳内にはあるイメージが瞬間的に浮かぶ。

~~~~~

『はい、高木君。あーんってして?』

優しく微笑んだ佐藤が高木の口に箸を運ぶ。

箸につかまれたから揚げを口にした高木が幸せそうな顔になる。

やがてゴクンという音と共に唐揚げを嚥下した高木に佐藤が問いかける。

『おいしい?高木君』

『はい、もちろんです!』

『よかった。また作ってくるからね』

~~~~~

「~~~~~うわああ~~~~~!」「~~~~~」

4人揃って同じ想像をした彼らは頭を抱え、大絶叫する。

冷静になつて考えれば佐藤がそんなキャラではないとわかりそうなもののだが・・・

今の彼らにはそんな事を考える余裕はなかった。

周囲を歩く人々が突然絶叫しだした男4人組を気味悪そうに避けているが、そんなことにも気がつかないほどに。

やがて4人はずっと背筋を伸ばすと、高木達の消えた方へ顔を向ける。

「阻止するぞ！なにがなんでも！！」

「「「おー！！！！」」」

そんな雄たけびを残し、その場からかけだした。

しかし、

「遅かったかつ！」

時すでに遅し。

すでに高木と佐藤はお弁当を膝の上に広げ、ランチタイムに突入していた。

2人の口が動いていることから、もう食べているのは明白だったが彼らは知らない。

あの弁当の中身が、どう言つものなのかを・・・

時はほんの少し前、そう、4人の刑事が高木たちを発見する前に遡る。

お弁当の蓋を開けた瞬間、高木は言葉に詰まった。

黄色い、けど形の崩れた卵焼き

バターを使い過ぎたと思えない、ホウレン草のバター炒め
真っ黒な塊は、から揚げ、だろうか？

「なによ？下手って言いたいんでしょ？」

高木があんまり長いこと黙っているの佐藤が怒った風に聞く。

「い、いえ！そんなことはありません！いただきます！」

慌てて返事をする、高木は見た目の良い、この中で一番まともそうなおにぎりを口にする。

そして、固まった。

それを見て、

「もう、高木君！そんな反応しなくてもいいじゃない！」

眉を上げた佐藤が同じくおにぎりを一口齧る。

すると、佐藤もまた、固まった。

「え、ヤダ！甘いじゃない」

甘いおにぎりほどマズイものはない。

高木の硬直の理由を悟った佐藤は彼の方を見る。

そこで見たのは

信じられないことに、甘いおにぎりを黙々と食べ続ける高木の姿だった。

「ちょっと高木君、こんなの食べなくていいわよ！」

流石に失敗作を無理に食べさせるわけにはいかない、と止めようとするが、

「大丈夫です！僕、おはぎ好きなので！」

そう言うと、高木はそのおにぎりを完食した。

そしてその後、新たに発覚した事実。

見た目真っ黒なから揚げは中身は生焼けだった、ということ。

その事実にはひとしきり笑いあった後、2人は約束を交わした。

「次はもっとまともなのを作ってくるわ。由美に聞いて」

「じゃあその時は僕も作ってきますよ、お弁当」

「ならそのお弁当、交換しましょう？」

「はい！」

結局、食べることができたのは不格好な卵焼きと、ホウレン草のバター炒めだけだった。

それでも、高木にとっては何よりの御馳走だった・・・ハズ。

その一言が（前書き）

新^コ蘭・・・かな？一応

リクはもうちよっと待ってて下さいね。
必ず書くんで！

その一言が

それはある日の夕方の出来事だった。

遊びに行っていたコナンが毛利家に帰るとまず目に飛び込んだのは、幼馴染の、誰よりも大切な少女の後ろ姿だった。

「ら、ん、ねえちゃん・・・？」

その背中が、あまりにも悲しげで、帰宅の挨拶を言う事も忘れ、彼女の名前を呼んだ。

そして、己の名を呼ぶ声に反応して振り返った彼女の顔を見て、言葉を失う。

いつもの明るく、優しい笑顔が微塵も感じられない疲れきった悲しい顔。

コナンはなんとか口を開くと、訊ねた。

「蘭ねえちゃん、どうしたの？何かあった？」

その問いに対し、蘭は一瞬、躊躇うような間を見せてから、ぽつりと言った。

「ねえ、コナン君。新一はいつになったら帰ってくるのかなあ？」

「え・・・」

半分は予想していた、自分絡みのこと。

それでもどう答えていいのか分らずにいると蘭は一人で話し続ける。

「新一はさ、『必ず帰ってくるから待っていてくれ』だなんて言うてたけど、私はいつまで待ってればいいのかな？」

今の蘭の心の中にいるのは、かの幼馴染。

『待っていてくれ』その一言を残し、姿を消した彼。

やっと会えたと思えば、すぐにいなくなってしまう。

電話をしても『厄介な事件があるから帰れない』の一言。

告白の様なものもされたけど、結局、その後一度も会っていない。

蘭に残されたのは、未来の^{みらい}見えないまちぼつけ。

「待つてるだけってさ・・・心配することだけしか出来ないのって結構ツライんだよ？」

新一は、わかってるのかな？もう、疲れちゃったよ・・・」

「えっと・・・」

悲しそうに喋り続ける蘭にコナンは何も言えない。

蘭を苦しめている工藤新一はコナン^{じゆうん}なのだから、言える筈がない。

黙ったまま聞いていると不意に蘭の声が明るくなった。

「なぐんてね、コナン君に言ってもしょうがないよね、こんな事。変なこと言っちゃってごめんね。忘れて！」

さあゝて、晩御飯の支度しよっかな。コナン君、今晚は何かいい？」

先ほどと打って変わって、からりとした明るい声。

だけどその明るさは無理^{むり}だと分かる。

ウソだと分かるから、コナンは余計言葉に詰まって。

出てきたのは、

「ぼ、ボク、ハンバーグがいいな」

いつもの子供っぽさを意識した返事だった。

「また？コナン君はハンバーグが好きよねえ」

「うん！蘭ねえちゃんが作ったのは特別おいしいから」

その会話を期に、2人はいつもの2人に戻っていく

その日の夜、

宿題も済ませ、明日の準備も全て終わらせた蘭は、居間の電気を消すと自室に入っていた。

隣の部屋からはうるさいくらいのイビキが聞こえてくるから、父も、それよりも早く床に就いた少年ももう眠りにについているだろう。

今日は彼に変なことを言ってしまったな、とあの少年のことを考えながら少し反省する。

あの子に、コナンにあんな話をするべきではなかった。

きっと誰よりも優しいあの少年は、蘭がした話を、蘭の痛みを、まるで自分の痛みのように苦しむだろうから。

あの話は、蘭にですらどうする事も出来ないものなのだから。

自分の力でどうする事も出来ないのに、それを年下の彼に背負わせるようなことはしたくなかった。

あまり、気にしないでくれるといいのだが、と思いながら部屋の明かりを消すと、布団にもぐりこみ目をつぶる。

いつもはすぐに睡魔がやってきて、心地よい眠りへと入ることが出来るのに、今日はなかなかそれが出来なかった。

何とか眠ろうと布団の中で寝返りを一つ打ったその時、

T
r
r
r
r
r
T
r
r
r
r
r

突如、耳に届いた電子音。

慌てて音のした方向見ると、携帯がチカチカと点滅しながら着信を告げていた。

「もしもし？」

『あ、わりい。寝てたか？』

「うっん。平気。まだ寝てない」

携帯の画面を見るまでもなくわかった。

こんな時に電話をしてくるのは“彼”だということ。

きっと夕方の事をコナンから聞いたのだろう。

それで、電話をしてきた。

だが、今度は彼は何を言うつもりなのだろうか

また、『待つて欲しい』と言うのか、

それとも、いつ帰るかを言うのか

それとも

『あのさ、蘭』

「何？」

彼が言うのは

『もしも、お前が』

言うのは、

『待つのがつらいなら、苦しいなら』

その先は、

『お前が苦しかったら、もう』

次にくるのは、

『もう、待たなくてもいいんだぜ？』

やっぱり、ソレだった。

そう。新一も優しい。

蘭の事を苦しめると分かってて、それを強いるようなことは決してしない。

でも、それは優しい拒絶。

“ ツライなら、苦しいだけなら、待たなくていい ”

その言葉は、どこまでも優しく、相手の事を突き放す。

そんなのは嫌だった。

自分でツライだの苦しいだの言っておきながら、それは嫌だった。だから蘭はその想いを口にする。

「・・・そんな事いわれて『ハイそーですか、じゃあもう待ちません』なんて言う訳ないでしょ!？」

『ら、蘭?』

「何よ！1人で格好つけちゃって！

そうやって私のこと傷つけないように気遣ってるんでしょうけど大きなお世話よ！

私はねえ、新一のこと待つつて決めたの！だから待つよ！

見くびらないでよね、私は一度決めたことは簡単には覆さないんだから！」

待つ、と決めた。

だからどんなに辛くても、苦しくても、疲れても待つ。

「・・・私は新一がいつか必ず帰ってくるって、その事を支えに待つの！

だから『待たなくていい』なんて言わないでよ！

それと、それと・・・」

感情が高ぶりすぎて、言葉が途切れる。

「それと新一だって私が待ってること、支えにできるでしょ？

それを頼りに帰って来てくれるんでしょ？

だから待つよ、私は。いつまでだって・・・」

そこまで言うと、一息つく。そして、

『蘭。お前は・・・それで辛くないのか？』

携帯の向こうから聞こえてきた声に、

「大丈夫よ。私、そんなにヤワじゃないもの。

だから言って？『待っててくれ』って。

それさえあればいつまでだって待てるから」

すると逡巡する様な間が空き、それから再び声が聞こえてきた。

『わかった。じゃあ蘭、俺は何があっても、絶対に帰ってくる。今は無理でも、絶対にお前のとこへ帰ってくる。だからそれまで待っててくれ』

それを聞いた蘭はふ、と微笑む。

夕方に見せた疲れきった表情からは想像もつかないほど、満ち足りた笑顔で。

「うん。わかった。ずっと待ってる。
だから、帰ってきてね」

『ああ』

時計を見るともう1時を回っていた。

なので、もう少し話していたかったけど、ここまでにする。

「じゃあ、おやすみ。風邪ひかないようにね」

『おう。蘭もな』

それを最後にピッと通話を切る。

先ほどまでと違い、今の蘭の表情は穏やかだった。

布団に身を沈めながら、蘭は思う。
もう大丈夫だ、と。

どんなに長くても、きつくても、新一のことを待てる、と。

それから、居候のあの少年にもこの事をちゃんと話してやろう。
あの子のことも安心させて、笑ってもらおう。

そんなことを思いながら、蘭は安らかな眠りに就いた。

そばで（前書き）

遅くなりました！

星野由香里さんからのリクで、新蘭
季節外れですが体育祭ネタで。

そばで

チャラチャラララ〜

聞くも陽気な音楽が、校庭に設置されたスピーカーから流れている。それをBGMにして教師がマイク片手に蘭たちに指示を出す。

「はい、3年生、2クラス毎に男女別に並んで〜！」

今は学年合同での体育祭の練習の真っ最中だ。

流石に高3ともなれば何度も注意されることはなく、1度の指示で全員がキチンと並んでいく。

3年生だけの種目、フォークダンスの練習だ。

つまり全体の人数が偶数、さらに言えば男女の人数が丁度揃っているのがベストだ。

だが中にはそう上手くいかないところもあり、

「あれっ？ここって女子が2人多くない？」

「じゃあ1番後ろの子は男子の列に入るしかないね」

「え、じゃああたし、男役!？」

都合上、女子が男子の列に並んだり、その逆もあつたりする。

「え〜、やだあ。工藤君と踊りたかったのにい」

男子側で踊ることになった少女のぼやきが耳に入り、蘭は複雑な思

いで隣を見る。

蘭の隣にいるのは、恋人の新一。

背の順に並んだ結果、隣同士になれたのだ。決して園子が仕組んだわけではない。

「それじゃあ、入場の音楽に合わせてグラウンドの真ん中まで入ってきて！」

男子は女子の手をとって！」

そう言った声を合図に再び音楽が流れた。

手を差し伸べると、新一はしっかりと蘭の手をとる。

「ちょっと新一！手を握るんじゃない？重ねるのよ！」

こんな風に握ってるなんて私たちだけよ、恥ずかしいじゃない！」

軽く差し出した手がしっかりと握られ、周囲は冷やかかし笑いをして
いる。

恥ずかしさに蘭が抗議すると、返ってきたのは不機嫌な声だった。

「別にいいじゃねえかよ・・・

これから他の奴らとも踊ることになんだから」

「は？」

新一の言葉の意図が掴めず、蘭がポカンとしてしていると前を歩く女子
と、その前を歩く女子が振り返る。

「もー蘭ってば鈍いんだから。

工藤君はね、蘭と踊る他の奴らに嫉妬してんのよ！」

「ば、うつせー、田代！余計なこと言うんじゃないよ」

「否定しないってことは図星ってことでしょ？」

「日高までヘンなこと言ってるんじゃない！」

耳を赤くしている新一を見て、蘭はそうなのか、と思う。

もし本当にそうだったら嬉しいな、と。

だが同時に、少し嫌なことも思い出す。

先ほど、先生の号令がかかって並び始める前に耳にしまった会話を。

『もー、なんでフォークダンスなんてしなくちゃいけないわけ？』

不満げな声から始まったのはA組の女子数人から成る会話。

『マコは男子が苦手だからね』

『でもさ、A組ってB組と一緒によね！？ならいいじゃん！』

『何が？』

『ほらあ、工藤君よ！』

“工藤”

その名前が出てきた瞬間、聞くとはなしに聞いていた蘭の心臓が跳

ね上がり、次の瞬間には意識して聞き耳をたてていた。

『工藤君に手をとられて踊るなんて最高じゃない!』

『えー、でも彼って彼女いたよね?毛利さん』

若干予想はしていたが、自分の名前が出てきて、ドキリとする。

『そんなの関係ないわよ!どうせフォークダンスなんてすぐ相手が変わるんだしさ。』

ほんの少しの間独り占め出来るだけなんだから!

いくら毛利さんが彼女でもそれを止める権利はないでしょ?』

『そーかもしれないけどさあ』

『ってか英恵、まだ工藤君の事好きなんだ?』

『しつこいね』

『ありゃ、どう見ても彼女以外眼中にないわよ?工藤君』

『いいのよ!そんなの分かってるんだから』

ああ、この会話は最終的にどこまで行くんだろっ、そう思いながら蘭が聞き続けていると、衝撃発言が1人の口から飛び出した。

『ならこの機会に自分を売り出してみたら?工藤君に!』

蘭が聞いたのはここまでだった。
驚いて思わず彼女たちの前に飛び出しかけた時、号令がかかったのだ。

「・・・い、おい蘭!？」

不意に声をかけられて顔をあげると新一が蘭の顔をのぞき込んでいた。

気がつけば入場は終わり、周囲はもう踊る姿勢になっている。
どうやら自分の世界に沈みこんでいたため、ボーっとしていたらしい。

「あ、ごめん」

軽く詫びると、蘭も新一に背を向け、手を後ろに出す。
途端にあの軽快な音楽が流れだす。
フォークダンスの始まりだ。

が、蘭は踊った相手の顔を、ほとんど覚えていなかった。
最後に相手の顔を見てから変わるはずなのに、蘭は相手など見ていなかった。

ずっとずっと新一の方を見ていた。
それこそ、穴があくほど。

蘭と一緒に踊った男子達が気の毒なほど。

新一は大して面白くもなさそうな顔で踊っていた。

しかし相手の女子は違い、わずかに頬を染めている。

B組の人間はそうでもないのだが、A組の方は違った。

そしてとうとう、先ほどのA組の少女、英恵の番となる。

英恵は始終、幸せそうな顔で新一にもたれかかるようにしながら踊っていた。

さらに、悪いことは重なるらしく、丁度そこで音楽が止んだ。

それが意味するのは、退場。

つまり英恵は新一と共に退場するということだ。

と、唐突に英恵と蘭は目があった。

すると英恵は蘭の事を馬鹿にするかのような表情をすると新一の手をぎゅっと握る。

それだけ見ればもう、十分だった。

蘭は新一たちから目をそらすと、戸惑ったように手を出す相手を見もせず、また、その手を取りもせずに退場した。

「あ、あの、毛利さん・・・」

哀れな男子の情けない声が秋風にさらわれていった。

「らっん！」

放課後、まだ不機嫌な蘭の元に、園子がやってくる。

「あ、園子……」

園子は蘭の顔を見るなり苦笑する。

「またそんな不機嫌な顔しちゃって。」

「……どうせ今日のフォークダンスでしょ？」

「え、別に……」

「隠すなって！あのA組の子でしょ？」

やはり親友には誤魔化しがきかない。

「うん」

諦めて蘭は素直に認める。

「あの子、英恵さんってさ、新一のこと好きみたいなんだよね。それであんなことしてたからちょっと、ね」

新一の彼女はまぎれもなく自分なのに……

他の女子に見せつけられるように、新一の手をとられた。

それが悔しいし、そんな事で簡単に怒る自分自身にも悔しかった。

その事をぼつり、ぼつりと園子に話す。すると、

「バカね蘭は」

呆れたような苦笑とともに園子は言う。

「見てなかったでしょ？あのA組の子が新一君の手を掴んだ時、彼がその手を振り払ったの」

「え・・・」

「『俺は蘭以外の女と手は繋がらないから』ですって。言うわよね、アヤツも。だから安心しなつて！」

新一がそんなことを言うなんて、知らなかった。それでも、

「それでも、さ、私、やっぱり面白くないんだよね。

新一が私と離れた所で、私以外の誰かと手を取り合うなんて」

いいながら、やっぱりバカだな、と蘭は思う。

たかが体育祭、学校行事の1つだ。

そんなことでこんなにも妬くだなんて。と。

だが、蘭は決心する。

自分がこんなにも妬かなくてすむ方法を実行することを。

「園子！私、決めたよ！」

「へ、何を？」

そして、翌日からのフォークダンスの練習では、蘭が男子の列に並び踊っていた。

しかも、どうやったのか、新一のすぐ後ろで。

おかげで新一と踊る相手は彼女がすぐ傍にいるため、落ち着かなかったそうなの

そばで（後書き）

リクエストの内容は、新蘭でやきもち、でしたが・・・
蘭が暴走した・・・！

お陰でめちゃくちゃな内容になってしまいました。

では、遅くなりますが、次回もよろしくです！

敵わない(前書き)

智呂さんのリクで、平次vs静華！
平次と和葉はつきあってます。

おまたせしました>m(_____)m<

敵わない

昼下がりの米花町。

2丁目にずっしりと濃厚な存在感と共に構える工藤邸に1人の来客があつた。

「くう〜どお〜」

「服部！？どうしたんだよオマエ」

いつもの陽気な、陽気すぎる挨拶と打って変わった陰気な、抑揚のない声に家主の新一が本を片手に玄関に飛び出すと、親友、服部平次がいた。

が、そこにいたのは先ほどの声と同じくいつもの平次ではなかった。

げっそりとやつれた頬。

ボサボサの髪。

元が黒いのでわかり辛い、顔色もあまりよくない。

そしてなによりいつもの、迸る様な生気が感じられない。

そんな親友の様子に戸惑いながら、新一は珍しく追い返すことなく平次を招き入れた。

「んで？何があつたんだよ、オメーがそんなにやつれるなんて」

熱いコーヒーを出しながら新一は訊く。

本音を言えば、せつかくの休日、読書中だったのを邪魔されてあまり機嫌は良くない。

だが自宅に押し掛けられて、おまけにこんな様子を見せられてはほつとくこともできずに平次の話を聞くことにした。

「いや、実はな・・・」

差し出されたコーヒーに口をつけながら平次が語りだす。

「和葉のことなんやけど」

「和葉ちゃん？何かあつたのか？」

平次の口から飛び出した名前に新一は意外そうに訊き返す。

遠山和葉と言えば服部平次の幼馴染の少女で、少し前から平次の彼女となった子だ。

平次がやつれたのは父親の平蔵が関係しているのだろう、とばかり思ってたので、まさか彼女の名前が出てくるとは思っていなかった。

「いや、和葉やないんやけど・・・」

「じゃあどうなんだよ」

人様の大事な休日を潰しておいてハッキリとしないとはなんだ、と
新一は問い詰める。

すると平次は渋々ながらも口を開いた。

「オカンがな、俺が和葉と出かけようとする」と

「出かけようとする？」

平次のやつれている原因が彼の母、静華だと知り、若干驚きながらも訊ねる。

そして返って来たのは、

「ついて来るんや！ずうっと！

おまけにビデオカメラ持参で！おかしいやろ！？」

「・・・・・・・・」

ああ、そう言えば、と新一は思い出す。

平次の母、静華は息子の成長記録をビデオに納めていたな、と。

自分の母、有希子も同じようなことをしていたので、彼の気持ちはよく分かる。

流石に、蘭とのデートまでは撮られてはいないが。

「それだけか？」

確かに、デートの度に尾行され、撮影までされるのは気持ちのいいモノではないが、平次なら母を撒くことぐらい簡単にできるだろう、そう考えて新一はそれだけと言ったのだが、それが平次の鼻息を荒くした。

「それだけ、やとお？簡単に言いよってからに！
そりゃ俺やって努力はしたんや！

人の多いところ通ったり、和葉をバイクの後ろにのせたり！
それでも付いて来たんや、あのオバハンは！」

「え、いや待て、バイクについてきた？」

いくらなんでもそれは吃驚だ。

有希子だってそんな事はしない・・・多分。

だいたい、どうやってバイクに付いて来ると言うのだ。

その疑問をぶつけると怒鳴るような声で答えがきた。

「タクシーつこうて、こっちにカメラ向けてきたんや！

信じられるか！？こっちがどんな道つこうても必ず追いつくんや！」

何と言うか、その尾行スキルには感心するな。とか、タクシーの運転手もよくそんな事できたな、とかいろいろと思う事はあったが、

「他には？」

それだけのことをやってのける人なら、まだ何かありそうだと思い、
聞いてみる。

すると差し出されたのは、色黒の手が2本。

良く見ると、絆創膏が何枚か貼ってある。

これはどうしたのかと訊く前に平次から答えが来る。

「オカンがな、和葉と付き合うなら家事も出来んとあかんよって。
料理の特訓させられたんや！」

で、なれない包丁で指を切ったと。
そういうことか、と新一は苦笑いをする。

それなら自分も蘭と付き合い始めた頃に有希子と蘭に叩き込まれた
なと思いだしながら。

お陰で今ではある程度の料理は自分で作れるし、蘭が来ないからと
言って飢え死にすることもない。

それはさておき、

「結局、オメーがそんなにやつれてんのはどれが原因なんだ？」

母の尾行か、料理や家事の特訓か、

「オカンの尾行や・・・」

流石の高校生探偵、服部平次でも母親には勝てないらしい。
だが、

「でもな、今日は行けるでえ！
和葉ももうすぐ東京（とうきょう）に来るんや！
せやから、今日はオカンのカメラもなしや！」

平次はそう明るく言いきった。
その時、

ピンポン

玄関のチャイムが鳴った。

「お、和葉のヤツ、早いやんか」

余程楽しみにしていたのか、うきうきと玄関に向かう親友の背中を見ながら新一はふと考える。

彼女は工藤^{こう}邸に来たことがあっただろうか、と。

それにいつもは東京に來るとまず真っ先に毛利探偵事務所に行き、蘭と会ってなかったか・・・

そこまで考えた時、平次の悲鳴が新一の元まで聞こえてきた。

敵わない（後書き）

チャームを鳴らしたのはだれか、わかりますよね？

雪も溶けちゃう(前書き)

ちび新蘭

雪も溶けちゃう

珍しく、東京の米花町にも大雪が降った翌日のことだった。
雪に白く染められた庭には1人の大人と2人の子供。

泣いている少女。

「うつうつ・・・」

その様子を見て怒っている女性。

「ちよつと新ちゃん!？」

蘭ちゃん泣いてるじゃない!何したのよこのバカ息子!」

そして、

女性に叱られているのは、ふて腐れた様子の少年。

「・・・・・・・・」

「新一!白状しなさい!一体、何しでかしたのよ!？」

むすつとしたまま、答えようとしない息子に、有希子は声を張り上げる。

それでも頑固な子供は一向に口を割らない。

ただ、バツが悪そうに泣いている少女
らと見ている。

蘭の方をちらち

いつまでたつても新一が何も言わないので、とうとう堪忍袋の緒を切らした有希子の怒声が空を揺るがす。

「もういいわよ！

何があつたか知らないけど、蘭ちゃんに謝るまで家に入れてあげないんだからね！

そこで反省してなさい！！」

泣きべそをかいていた蘭がびっくりして泣きやむほどの大声でそう言つと、有希子は蘭の手をとり自宅へと入っていった。

後に残されたのは静寂と、仏頂面の新一。

そして頭の取れた雪だるま

どうしてこんなことになってしまったのだろうか？

冷えていく空気に身を震わせながら新一はぼんやりと思う。

その視線の先には、崩れた雪だるまの頭。

それは先ほどまで蘭と一緒に作っていたものだった。

そして、新一が壊したモノだった

そう、作っている時は良かったのだ。

こんなにたくさん雪が積もるなんて、そう滅多にないことなので
はしゃいでいた。

『ねえ、新一！雪だるま作ろうよ！』

蘭のそんな提案にのり、雪だるまを作ることになった。

どうせ作るなら大きいのを2人で作ろう、と言う事になり一緒に雪
玉を転がしていった。

そして完成したのが、ここにあった雪だるまだ。
そこまでは良かった。

出来あがった雪だるまの大きさに満足さえ覚えていたし、母有希子
にも見せて驚かせようと考えていた。

『わあ、すごい。おっきいね、新一！』

ねえ、新一のお母さんに言って写真撮ってもらおうよ』

写真を撮る。それもいいな、と考えていたのだが、次の瞬間、蘭の
した行為を見てそれは崩壊した。

『おっきいけど、かわいいー！』

そう言う蘭は、完成したばかりの雪だるまにそつとキスをしたのだ。

気がついたら、蘭が泣いていて、雪だるまも壊れていた。

蘭が泣きながら途切れ途切れに言う言葉から、自分が壊したんだな、と分かった。

すると、蘭の泣き声を聞いて有希子が家から飛び出してきた。

それで前の場面に至った、と言う訳だが・・・

自分が悪いのは十分に分かっている。

誰に非があつたか、と言えば間違いなく、100%自分だ。

だから素直に蘭に謝ればいい。

なのに・・・

さっき蘭がしていた行為を思い出すとどうしようもなくイライラして、謝る気が起きなくなってしまう。

かといって謝らないままでは家にも入れて貰えないし、蘭とも会えない。

どうしよう、と考えた末、彼は隣家へと足を運んだ。

1時間後、疲れたのか舟を漕ぎだした蘭に毛布を掛けてやりながら有希子は微笑した。

先ほど、庭で何が起きたかは蘭から聞いた。

そして分かったのだ。

どうして普段は物わかりのいい息子が蘭を泣かせ、だんまりを決め込んでいたのか。

「まあーったく、自分で作った雪だるまに嫉妬するなんて・・・」

まだまだ子供ね、と小さく呟く。

と、そこへ足音も荒く駆け込んできたのが1人。

「蘭！」

「しー、今寝てるわよ。」

で？家に入ってきたってことは蘭ちゃんに謝る気になったの？ヤキモチさん？」

「バ、バーロー！母さんには関係ねーだろ！」

有希子のからかい交じりの問いに、新一が顔を赤らめながら反駁すると、

「う、ううん・・・」

小さな声をあげて蘭が目覚めました。

「あら、新ちゃんがうるさくするから起きちゃったじゃない」

「・・・俺のせいだよ」

目を覚ました蘭は、目の前で繰り広げられる親子のやり取りを目をパチクリさせながら見、次にはあつと顔を明るくする。

「良かった、新一、家に入れて貰えたんだあ」

一寝入りしてスッキリしたのか、先ほどのことなど忘れて様子だった。

そんな蘭に新一は躊躇しながらも隠し持っていた1枚の紙を渡す。

「え、何？くれるの？見てもいい？」

瞳を輝かせながら蘭は受け取った紙を開く。と同時に有希子もそれをのぞき込む。

そこに描かれていたのは

「あ！雪だるま！・・・と私？」

描かれていたのは、どう見ても雪だるまにしか見えない物体と、女の子が1人。

なるほど、絵の中で笑っている少女の服装は確かに今日の蘭のものと同じだった。

「あらホントだね。新ちゃんが描いたの？」

有希子の問いに、新一は未だ少し気まずそうにしながら答える。

「ま、その・・・蘭は雪だるまと写真撮りたがってたし、俺が壊しちゃったし

だから代わりに。その・・・悪かったよ」

最初、新一は阿笠博士に頼んで蘭と雪だるまの合成写真でも作って貰おうかと考えていたのだが、わけを聞いた博士に『本当に悪かったと思ってるなら今の新一が、自分で出来ることで詫びてみたらどうじゃ?』と諭され、結局思いついたのがコレだった。

急いで描いたので新一としては満足の行く出来ではなかったのだが、蘭は嬉しそうだった。

「ありがと!新一!大事にするよ!」

そう笑って大切そうに絵を抱き込む。

と、唐突に何か思い出したような顔になり、有希子に色鉛筆を要求した。

渡された色鉛筆で蘭は何やら夢中になって新一の描いた絵に描きだす。

「できたあ!」

10分ほどした後、満面の笑みと共に蘭が描き上げたのは

「オレ?」

新一の絵だった。

心底意外そうに蘭を見やる新一に蘭は花が綻ぶような笑みを見せ、言う。

「うん。だって新一と一緒にじゃなきゃ、つまないんだもん!」

雪の積もったある冬の日、雪も溶けそうなほど熱い、小さなカップ
ルに起きた小さな大事件。

雪も溶けちゃう（後書き）

実はこれ、先日の星野由香里さんのリクを受けた時に考えたネタでした。

書くときにどっちにしようかな〜とか思って、結局「そばで」の方を書いたのですが、やっぱりこっちも書いてみました（＾o＾）
こっちはヤキモチ新ちゃんです

枯れないモノ（前書き）

リクがまだ思いつきませんので、その前にちび新蘭&コ蘭

枯れないモノ

風呂上がり、コナンが蘭にお風呂が空いた事を知らせに言った時、蘭は何か大きな本を広げて懐かしそうに笑っていた。

「蘭ねえちゃん、どうしたの？」

不思議に思っ て声をかけると蘭は一瞬ビクリと肩を震わせてから振り返る。

そんな蘭の手にある本の正体はアルバムだった。

どうやら思い出に浸っていたため、コナンが部屋に入ってきたことに気がつかなかったようだ。

「あ、コナン君・・・驚かさないでよ。

あのね、昔の写真を見てたのよ」

コナン君も見ると蘭が手招きをしたので遠慮なく蘭に近寄る。
蘭が開いたページにあったのは

「わあ、森の中だね！お花もいっぱいある！」

「うん、幼稚園の遠足で行ったの」

幼いころの蘭や新一、園子や他の園児たちが先生たちに見守られて、楽しそうに自然を満喫する姿だった。

園子などはいっぱいに咲く花を冠にしてご満悦だ。

その周囲にも、同じようなことをしている女児たちがいた。

だが、

「あれ？蘭ねえちゃんには作らなかったの？」

「え、何を？」

「お花で冠とか、指輪とか」

そう、多くの女兒が花を摘んでいるのに対し、写真の中の蘭は花を見ているだけだったのだ。

珍しいと思って訊くと、蘭はふと小さな笑みを零し、語り始めた。

遠いあの日の出来事を

「はい、みんな、ここで自由時間にします。」

ただし先生の目につく所にいること！勝手に遠くへ行っちゃダメよ！」

そんな先生の注意を合図に園児たちはわっと好きな所へ散って行っ

た。

今日は遠足。少しばかりはしゃいでも仕方がない。もちろん、蘭や園子、そして新一も同じだった。

新一は普段、蘭と共に行動することが多いのだが、今回は他の男児達と一緒にたはしゃいでいる。

いたずら盛りの少年たちは木の上に登ったりして、先生たちを青くさせている。

そんな彼らとは反対に、少女たちは満開の花畑に夢中だった。器用な子は花冠などを作り始めている。

それを見た園子は目を輝かせると蘭の手を引っ張った。

「らん！わたしたちもお花のここ、いこう！」

「うん！」

花畑に着くと園子は早速花摘みを始めた。

蘭はと言うと、園子や、周りの女の子達の勢いに押されてなかなか摘みだせないでいる。

と、園子が急に夢みる瞳になってしゃべりだした。

「ねえ、らん。こんな王子さまいらないかなあ？」

「どんな？」

園子の憧れの王子様話はよくあることだが、今回はどんな王子様なのだろう、と蘭は耳を傾ける。

「あのね、2人でお出かけするでしょ？」

それでここみたいにいーっぱいの花畑があるところにつくの」

「うん」

それで？と先を促すと園子は再び話し始める。

「それでね、わたしが『このお花キレイ！すてき！』って言ったら、彼は手早くそのお花で王冠と指輪を作ってくれるの！

でね、こう言うのよ。『ぼくにとってのお姫さまはキミだけだ』って！

いいと思わない！？キレイなお花ももってかえられるし！」

園子にはずいぶんと規模のかわいらしいものだったが、

「うん！ステキ！」

それは少し懂れてしまうロマンチックなシチュエーションだな、と思った。

「王子さま、かあ・・・」

小さく言うと、蘭はチラリとはしゃいでいる少年たちに目を向ける。視線の先にいるのはいつも一緒にいる彼の姿。

そして園子がそんな蘭の様子を見逃すわけがない。

「あゝ、らん、今、しんいち君の方見たでしょ？
しんいち君にやってほしいんだ！？」

「ち、ちがうよ！」

慌てて否定したが、園子は聞く耳を持たない、

「じゃあしんいち君に作ってもらえばいいじゃん！おーい、しんいち君！」

と、勝手に新一を呼んでしまった。

「どうしたんだよ、何か用か？」

園子は新一を呼ぶとさっさと姿を消し、新一は蘭に質問をしてきた。

「え、えっとその、用っていうか」

どうしよう、ここまで来たらもう言っちゃおうかな、なんて考えた蘭は思い切って言う。

「あ、あのお花！かわいいよね、すごいキレイ」

園子の妄想とは少し違った言い方だが、もしかしたら、自分の為にお花を採ってくれるかもしれない、と期待を込めていった。

「え？あ、ああ、キレイだな」

「ね！きれいでいいよね！」

新一が同意してくれたので蘭は嬉しくてたまらない。

「なんだよ？欲しいのか？」

「う、うん！」

口には出さない気持を読み取ってくれた、と蘭の期待はどんどん増していく。

もしかしたら、本当に採ってくれるかも、と。

だが、新一が次の瞬間放った言葉は予想の正反対に行くものだった。

「やめとけよ」

「え？」

どうしてそんな事を言われたのか分らず、聞き返すと新一は続けた。

「どうせ摘んでもすぐに枯れちまうんだぜ？花が可哀そうだろ」

ズキツと来た。

そのまま蘭が何も言えないでいると新一は言い続ける。

「キレイだからとか欲しいからとか、そんな理由でこんなにキレイに咲いてる花を摘むなんてただのわがままじゃねえか」

新一は、正しい。

正しすぎて、反論ができない。

新一が正しい事は十分に分かっていたし、だからこそ花のことまで考えなかった自分が情けなくなっと思って思わず泣きそうになった時だった。

「だから、……………」

その時、新一が言った言葉は何よりも嬉しかった。

新一は、あの日、花はくれなかったが、代わりにある約束をくれた

のだ。

「新一はね、『花が見たかったら俺がまた連れて来てやる』って約束してくれたの。」

お花は枯れちゃうけど、約束なら枯れないだろう？ってね。だから私はお花は摘まなかったんだ」

「そうなんだ」

言いながら、コナンは本当は途中で思い出していた。自分がした“約束”のことを。

（そう言えば、そんなこともあったな）

そう思いながら、コナンは蘭にある提案をする。

「ねえ、蘭ねえちゃん」

「何、コナン君？」

首をかしげてこちらを見下ろしてくる幼馴染に言う。

「今度、僕と行かない？その森に」

「え？」

「だからさ、新一にいちゃん、最近いないからさ、代わりに僕が連

れてっ^てあげる」

コナンの言葉の意味を解すると、蘭はふっと微笑むと

「うん、私もコナン君と行きたいな」

きっと、それは2人にとって楽しい思い出になるだろう

s e v e n t e e n o ' c l o c k s (前書き)

復つ活！

コナンのまま10年が過ぎた話。

蘭 コ 哀 みたいな？

元ネタは某少女漫画から

ネガティブコナン注意

s e v e n t e e n o ' c l o c k s

P e o p l e i n t h e w o r l d s o m e t i m e s
c o m p a r e l i f e t o 2 4 h o u r . . .

世の中には、人生を24時間に例える人がいるらしい・・・

哀はぼんやりとしながら、そんな事をふと思い出した。

一生を1日に例えると、生まれた時が0時丁度で、1時間はだいた
い3〜4歳。

その計算でいくと、今、哀がいるこの教室の皆は17歳、つまり朝
の4時とか5時くらいで、これから夜明けを迎える、希望に満ちた
ねんれい時間、なのだそうだ。

けど、

（もっとも、実年齢の違う私には当てはまらないけどね・・・）

実際は20代後半である自分は違う、と哀は考える。

今の自分は、夜明け前の希望にあふれる人間ではない、と。

8年前、FBIの手によって、組織は壊滅。コナンと哀の生活にも平和が訪れた。
だが、薬のデータが失われたため、2人は二度と元に戻れなくなってしまった。

コナンは『お前は悪くないから気にするな』などと言ってくれたが、罪の意識は消えることなく、哀の心の中で渦巻いている。
こんな状態で、希望を抱け、と言う方が無理なのだ。

しかし、それは本当に自分だけなのか

『あゝ、ヤバイって！彼氏に振られそ〜』

『部活で1年生に負けた〜』

『いやだあ、また太った!』

『この間の試験が悪くて・・・』

『聞いてよく江戸川君に告ったけど、ダメだったあ・・・』

ある人は彼氏との関係を

ある人は部活のレギュラーの座を

ある人は己の体型を

ある人は試験結果を

ある人は失恋を

様々な17歳の集うこの空間は、同じくらい多くの憂いで満ちている。

こんな、憂鬱に満ちたこの教室は、夜明け前と言うより、1時間1歳進む方式で、17時の方がふさわしい気がする。

これから夜の闇に吞まれる、夕刻に

「工藤君」

放課後、哀は人気のなくなった教室でぼんやりと佇むコナンに声をかけた。

コナンは呼びかけに応じてゆっくりと振り向く。

その顔は、他の皆と同じ様に、憂いを湛えていた。

「聞いたわよ？また、告白されたんですってね」

何か用か？と言いたげなコナンにそう言うと、コナンの顔が少し曇る。

別に、それは哀の質問を疎んでいる訳ではない。

コナンはいつも、告白を断り、その度にこんな顔をする。

「あ、ああ。まあ・・・」

コナンがなんともあいまいな返事をした瞬間、コナンの携帯が鳴りだす。

どこか悲しげな短調のメロディは、メール受信時のものだ。

携帯を開くと、その顔がより一層、翳りを帯びる。

その表情で、哀は誰からのメールかを悟る。

「蘭さんね？」

今度はコナンは返事をしない。

返事をしない代わりに、ずっと携帯を差し出してくる。

画面に映るのは、誕生ケーキを前に笑う、幼子。

蘭の、子供だ。

工藤新一の想い人、毛利蘭は待ち続けた幼馴染への想いを断ち切つて、4年前に別の男性と結婚した。
子供はもう3歳になるはずだ。

「なんて言うか、さ」

幸せそうな幼子と対極の表情を見せるコナンはぼつり、と語りだす。

「俺みたいなのに、告白するのだってすっげー勇気いたんだろうな、とかそう言うの、わかってるんだよ」

自分が、蘭に対してそうだったから。

「わかってんのに、踏みにじるしかない俺が嫌になる」

まだ、彼女が好きだから、少女達の想いは、受け取ることが出来ない。
い。

終わった事、なのに未練がましく彼女を想う自分も、

彼女の幸福を嬉しいと思いつつも、どこかで哀しんでいる自分も、その苦しみや悲しみを知っていながら、他人に同じ思いをさせてしまっている自分も、

全て嫌いだ、とコナンは言う。

だから、告白を断つた後に、相手の気持ちを考えるとそれだけで頭がいっぱいになってしまう、と。

「別にそんなことまで聞いてないわよ」

「悪かったな」

冷たく切り捨てるふりをしながら、哀は思う。

もしも、もしも自分が、他の少女たちと同じように彼に想いを告げたらどうなるのだろっ、と。

きつと、結果は変わらない。

驚きはするかもしれないが、後は皆と同じように断るのだろっ。

でも、そんなことはどうでもいい。

振られたその後は、普段は推理しかない彼の頭の中は、自分でいっぱいになるかも知れない。

自分でも、あんな瞳をして、思ってもらえるのだろっか？

それは、強く、甘く、哀の心を惹きつけた。

「俺、目暮警部に呼ばれてるから。じゃあな、灰原」

そう言つて、コナンは教室を後にした。

1人教室に残つた哀は窓から空を見上げる。

時刻は17時。

明るかった空は、宵闇に吞まれ始めていた。

s e v e n t e e n o ' c l o c k s (後書き)

久しぶりに書いたらなんか訳わからんのが出来ましたね・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3204v/>

バラエティギフト

2011年12月16日22時51分発行